（毎月二回五日、廿日發行、明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可）

明治三十五年五月二十日發兌

女鑑

第貳百五拾參號

女鑑第貳百五拾參號

目録

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及び通運にて本社出版部へ御直送の事
○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下候事
○郵券代用は(一錢、三錢)一割增の事
○別に領收證を出さず若し强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事
○未納税の來書は一切受取り申さゞる事

定價

一冊	金拾錢
六冊三ヶ月分	前金五拾七錢
十二冊半年分	前金壹圓拾錢
廿四冊一年分	前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行	金參拾錢
半頁	金八圓
一頁	金拾貳圓
表紙一頁	金拾六圓

色刷は特に御相談に應ず

明治三十五年五月十九日印刷
明治三十五年五月廿日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　渡邊素一

東京市京橋區南八丁堀二丁目十一番地
印刷人　蛭木艮雄

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　國光社

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發賣元　株式會社國光社出版部
(電話新橋二六九三番)
(電話新橋特八八)

國光社出版部近刊廣告

少年 武士道史傳

第一編　山中鹿之助……文學士　大町桂月著

第二編　上杉謙信……文學士　三好物外著

第三編　本多平八……文學士　笹川臨風著

第四編　小早川隆景……田岡嶺雲著

第五編　立花宗茂……文學士　白河鯉洋著

第六編　木村重成……法學士　太田蒼溟著

第七編　山鹿素行……國府犀東著

第八編　大石良雄……文學士　中內蝶二著

武士道は我邦國風の精華にして宇内に其比を見ざる處其義を重んじ節を全うするの氣風は泰西武士氣風と同日にして語る可らざる者あり今戰國時代以降三百年間の史迹に稽へ武士道の標本とす可き者八人を擇び各有名ある大家の筆に依り少年家庭の讀本に充て未來の國民をして此氣風の涵養に便益を得せしめん事を期しこゝに此史傳の刊行を計畫せり行文は凡べて平易流麗を旨とし勉めて少年の德性を啓發するに便せり家庭教育に多少の稗益をなすあらば本社の望は足れり

大和綴美本
全三冊
定價各拾八錢
郵税各四錢

少女讀本 花の巻

堀内新泉子著

さきに本社より『家庭の鑑』を出して廣く江湖の喝采を博し、次に開發社より『家庭讀本』春、夏、秋、冬の四冊を出して、近來の出版物中に實に稀有なる世の賞讃を博し得たる堀内新泉子は、今また本社より『少女讀本』花の、雪、月、三冊を出して、廣く世の教育家諸君に向つて問ふ所あらんとす。子が着想の如何に高潔多趣味にして、その着筆の如何に穩健優雅なるかは、已に讀者の熟知せらるゝ所なれば、本社は重ねて此に贅せず。唯、本社は讀者に告ぐ。從來『少年讀本』の著作は、已に數十種ありと雖も、獨り『少女讀本』に至りては、未だ世間にこれあるを見ず。家庭に並びに學校に於ても、この種の著作の世に出でんことは兼て渇望せられしならんが、今日初めて本書を以て、廣く江湖の需用に應じ得るは、著者と本社の聊か自負する所なりとす。願くは家庭の讀本として、將又、學校の賞與品として、續々購求の榮を賜はらんことを。今『花の巻』の目次を左に

（一）花の宴　（二）雪姫　（三）野末の露　（四）たま椿
（五）山吹　（六）ぬひはり　以上

小松宮彰仁親王殿下題辭　内務大臣内海男爵題辭
前内務大臣樺山伯爵題辭
賞勳局總裁大給子爵題辭　内務大臣官房編纂

明治國民龜鑑

定價金貳圓豫約價壹圓參拾錢期限後は定價に復す

豫約出版廣告

本書は明治十四年發布の褒章條例により紅綬綠綬藍綬の褒章を賜はり其善行を表彰せられたる者の傳記にて之が編纂の任に當れるは我文學界に名聲高き文學士大町桂月君ゆゑ字句流麗文章平易毫も艱澁難解のことなく叙寫傳神の妙を極めたれば、孝子順孫、節婦義僕を始め、一身の利害を顧みず専ら力を公同の事業に致し若くは實業の發達を圖れる有志家、及び萬死を冒して、他人の生命を救助せる義俠者等の面目鬚眉躍如として紙上に現れ、其志氣節操、義烈の行爲を眼前に見るの思あらしむ、實に國民必讀の要書なり、本社今回原本の御下附を請ひ得て精巧の活版に附し總傍假名附として婦女童幼にも讀易からしめんことを勉め、極めて廉價を以て豫約販賣することゝせり、大方の諸君速に御申込あらん事を乞ふ。（見本は各官衙町村役場學校等にあり）

注意

●受賞者肖像寫眞銅版及受賞者行狀密書木板數拾枚挿入●菊判五號活字總振假名大和綴●紙數凡九百頁●申込の際豫約價の半額を拂込ものとす●諸官廳郡市役所町村役場諸學校等公印押捺申込の分及褒賞佩用者は豫約前金に及はず●申込期限は五月三十一日迄●出來期日六月三十日●同日迄に豫約代金全額を拂込みたるものより順次發送す

豫約申込所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　電話新橋特八八　新橋二六九三　株式會社 國光社出版部



女子學院長矢島楫子刀自



成女學校講師嘉悦孝子刀自



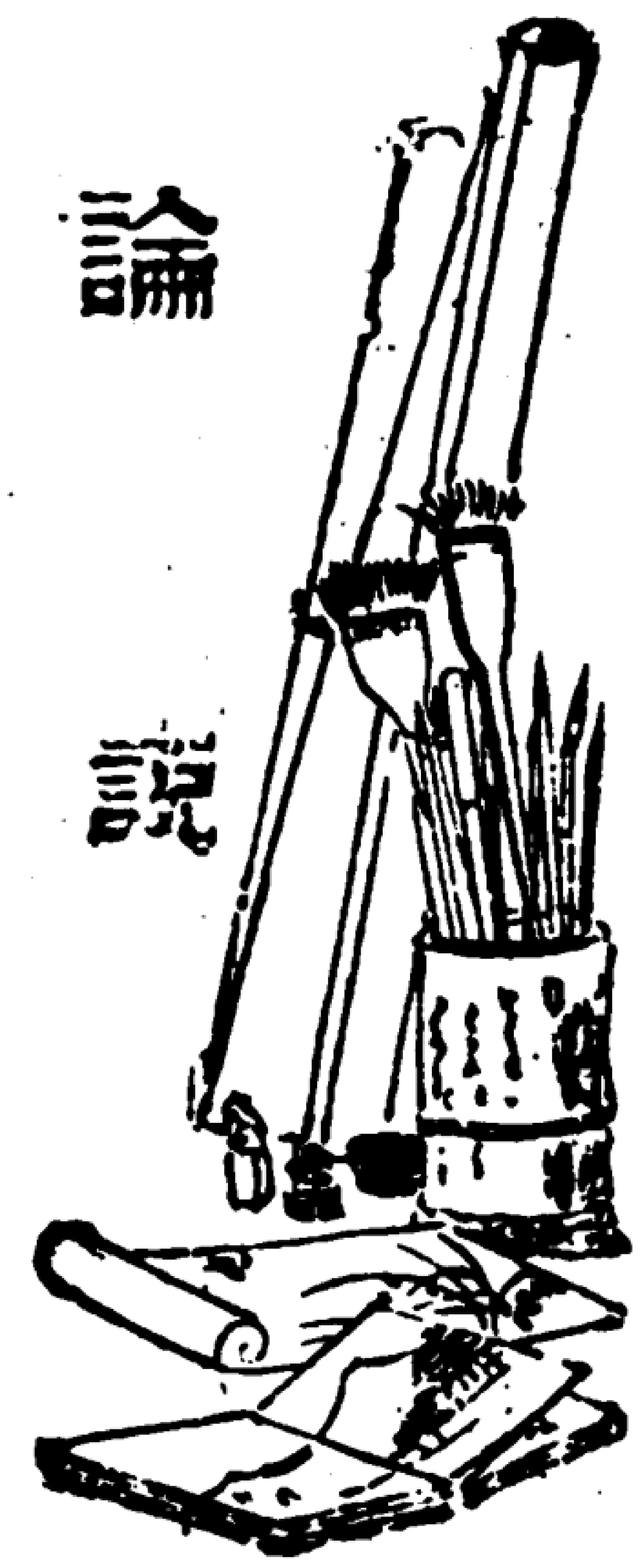
東京府第三高等女學校教諭星つれ子刀自



東京府第一高等女學校卒業生



北米ナイアガラの大瀑



論説

女子に高等女學校以上の教育の必要なきか

女子高等師範學校教授　篠田利英

近來大分高等女學校が殖えて來まして、今では私立、公立併せましたならば、殆ど八十近くになりませうが、また高等女學校規則に依つて居ないで中等教育を施して居る女學校も大分殖えて來て居る、ソコで教育者の一部分には高等女學校以上の女子教育を施す學校が必要であらうと云ふ論が行はれて居る、所が之に反對する人は、女子は良妻賢母となるのが目的であるからして、其樣に高い教育を施して學者を作る必要はないと云ふことを謂ふ人がある、成程良妻賢母を作ると云ふことは女子教育の大眼目とする所といつて宜からうと思ふ、が歐羅巴の或國又は亞米利加の樣に女子が獨立して往かなければならぬと云ふ樣な事情の國でないからして、我國の女子は勿論良妻賢母たることを目的とするのは至極最であつて、之に不同意を唱へる人は無からうと思ふデス、併ながら良妻賢母と云ふのは誰も異存がないとして、其良妻賢母の内容は如何なるものであるかと云ふことになると、人々考を異にするので、ソコから議論が岐れて來るのであらうと思ひます、——或人の言ふ如く良妻賢母を作るのが目的であるから女子の教育は高等女學校位の程度で宜いと云ふ、——考

へて見ると頗る了解し難いことがあるのである、何故高等小學だけでは良妻賢母が出ずして高等女學校の敎育を受けさせなくつちやならんのか、乃高等小學校よりも高等女學校の方が學課の數も增して、一家を治めて往く上に必要なる智識を得たり、又高等小學校の學課よりも深いことを修めて、其れだけ多くの智識を得るからして、其處で高等小學校よりは高等女學校の敎育を受けたもの丶方が良妻賢母となるに適すると云ふのであらうと思ふ、果して高等小學校の敎育を受けた者と高等女學校の敎育を受けたものとの間に、良妻賢母と成り得るのと成り得ないのとの相違のあるのが學課の種類及び其程度にあるとすれば、高等女學校以上の敎育を受けさせて、一層廣い且深い智識を得させたならば、人の妻となり母となつて其務を盡す上に於て、高等女學校の敎育を受けたものよりは一層便宜を得ると云ふことを推測しても間違つたことでは無からうと思ふ……今日の高等女學校程度の上に、二年や三年敎育を爲たからと云つて中々學者になるナンかと云ふことは出來る話ではないので、高等女學校敎育を以て滿足して居る人の憂ふるやうなことは決してないのである、勿論知ると云ふことゝ行ふと云ふことゝは一致しないこともあるからして、高等女學校以上の敎育を受けたものが、高等女學校の敎育を受けたものよりも、必しも一家を整理する上に於て又世の中に立つて往く上に於て、勝れた成蹟を顯すとは云はれぬかも知れぬけれども、若も……人が高等小學校敎育を受けたものよりも高等女學校敎育を受けたもの丶方が、一家の整理などに當つて、一層善良な効蹟を收め得ると云ふことを許すならば、——高等女學校敎育を受けた者よりも、其れ以上の敎

育を受けた人の方が、世に立つて善良の成蹟を擧げるであらうと云ふことを推測するのは、決して間違つたことではなからう、然るに或論者は、歐米の學制を調べて見ても、高等女學校の上に學校と云ふ樣なものは、學校の系統上に無いからして、高等女學校以上の學校を設立する必要はなからうと云ふ樣に言ふものがある、併ながら歐米諸國の高等女學校程度の學校に於て施す所の教育は、日本の高等女學校よりも、稍々高い程度の教育を施して居ると云ふ譯は、第一國語が容易い爲に、日本と同じ時間で教育しても、歐米の方は余程多くのことを學ぶことが出來る、又裁縫の如きものも、我國に於ては最も多くの時間を取つて居るけれども、歐米學校に於ては其れも課さない、デあるからして其れだけの時間を他の學課に配當することが出來るから、其れだけでも餘程違ふ所があるンですナ……且又高等女學校を卒業すれば「カレジ」に這入る道も付て居る「カレジ」は、特に女子の爲に立てたものもあり、又男子と共學の所もあり、又其れ以上大學にも這入ることの出來るやうになつて居る所もある、ダカラして究竟高等女學校の上に、一種の學校があるのである……矢張女子の爲に施す所の一の學校があるのである……歐羅巴に於ても、英吉利だの、スキッルランドなどでは、早くから女子の大學に入ることを許してありましたが、獨逸の如きは、餘程其點に於ては放縱的であつた所が、近來段々女子をして、此特權を得させるやうに成つて來る傾が見える、——例令女子をして獨立して世の中を改めさせる必要は無いと云ふも、男子が益々高尚な學問を爲るやうになつて來れば、其配偶者たる女子も、之に伴つて相當の知識を具へなければ、諸事に就て（色

々ナ事に就ていずネ〉理想を異にし、互に同情を表し合ふと云ふやうなことが出來なくなつて、究竟一家の幸福を得ることが出來ぬやうになるであらう、良妻賢母と云ふのも、畢竟絶對的のものではなくして、比較的の話であるのだからして、小學教育を受けた位のものでも、小學教育を受けた位の男子に配すれば、……其位の低い程度の家庭に於ては、良妻賢母となり得ないこともなからうと思ふ、併ながら小學教育を受けたものが、男子の配偶者として、良妻賢母にあり得るかと云へば、特に天才のあるものなどは別として、通常の人ならば決して良妻賢母たるに適すまいと思ふ、左すれば男子が進めば進む程、其配偶者たる女子も、益々高い教育を受けたものでなくてはならぬ筈である、男子が益々進むのに女子は何時まで經つても、高等女學校程度の教育さへ受ければ宜いと云ふ理屈は無さそうに考へられる、勿論高等女學校以上の學校を國費で立てるか立てぬかと云ふことは、是は別問題であるけれども、兎に角學校系統上に於て、今一層高い教育を施す所の學校を女子の爲に設けることは、女子の智識を高める上に必要あるのみならず、高等教育を受けた男子の爲に、最も必要なる事と考へられる、我國に於ては、古來女子を一等下つた人間の如くに考へて、取扱つて居つた、其餘習が未だ失せない所からして、女子が高い教育を受けると、從て見識も高く成つて來るから、從來の如く男子が女子を奴隷の如くに扱ふことが出來ないやうになるから、其を男子が不便に思ひ、のみならず我儘を押へられることを恐れる所から、女子に高等の教育を施さない方が宜いと云ふやうな利己的の考を以て居る人もあるやうに見えるが、本來夫婦の關係と云ふも

のは主從の關係の如きものでなくして、最良の友人の如き關係のものでなくてはならない……而して最良の友達とならうと云ふのには、夫婦の智識なども略ぼ相似寄つたものでなくてはなるまい、若し然らずして、男子の智識は大に進んで居るのに、其妻たるものの智識が甚だ低いと云うやうな次第であれば、互に事を相談するといつても、不釣合であつて、和熟圓滿なる相談は、到底出來ないであらう、此樣に色々な方面から考へて見ても、何うしても女子敎育は、高等女學校程度のものを以て滿足して居ると云ふことは出來ないと思ふ、勿論總ての女子を高等女學校以上の學校へ入れて、敎育を受けさせる必要はないことは明かであるけれども、學才もあり、金もあり、其他總ての事情が高等の敎育を受けることを許す譯であるなれば、之を抑へて高等女學校以上の敎育を受けさせないと云ふ理屈もなからう、——此頃高等女學校長會議が有つて、互に問題を持寄つて協議會を開いたことがあるが、其題の中に、高等女學校以上の女學校を設立する必要が有るか無いかと云ふのがあつたが、是に對して——吾々は、高等女學校長であつて高等女學校のことを議するのは吾々の務であるけれども、其以上の學校のことに就て彼是言ふ義務も權利も無いと云ふたものが一人あり、——又女子の腦力は（腦髓の力です）全くの高等女學校程度の敎育を受けるのが精一パイであつて、其れ以上の敎育を施すとすれば、女子を益するに非ずして、却つて害するものであると云ふたものが一人あつた、外は皆高等女學校以上の學校の設立を必要と認めた、シテ見れば我國の女子敎育に從事して居るもの丶殆ど總べては、女子に高等女學校以上の敎育を受けさせる必要のあ

ることを認めて居るものである、併し何れも女子に、或一種の専門學を修めさせて、獨立して世を渡らさせやうと云ふことを目的とするのではなく、必要ある場合には、學び得た所を以て獨立するの資とする、……役に立たしめるの目的として居るのである、此傾向を見れば稍々心を强ふすべきものがある、

女子に高等の敎育を施すに就ては、其健康を損すると云つて、大いに心配するものがある、之は尤な心配で、例令一方に高い敎育を受けて見た所で、人間生活の基たる身體の健康を損した日には、損益償はない話であるから、萬一高等敎育を受ける爲に必然の結果として、健康を損すると云ふことがあるならば、寧ろ敎育を施さぬ方が宜いかも知れない、併ながら敎育を受けて、生理、衛生などの智識を得ることが、益々深ければ其理を守ることを能く辨へて來るからして、身體に益があらうとも害は無さそうに思ふ、尤も生理の規則に背いた過度の勉强をしたり不規則な生活を爲たりすれば、健康を損することは當然であらうが、之は敎育の必然の結果でなくして、其方法の惡いのに依るのであらう、英吉利や亞米利加に於て高等敎育を受けた人の健康に就て取調べた所のものに依れば、却つて通常の婦人よりも、健康の狀態が善良であると云ふて居る、シテ見れば高い敎育を施せば、必ず健康を損すると云ふ心配は無用であらうと思はれる。

學校の保證人制度に就て

法學士　天野弘一

此前は本誌をかりて婦人に對する人權侵害といふ

やかましい論說を揭げた處が計らずも多少世の注意を喚起したものと見えて現に小石川なる女子大學に於ては成瀨校長が生徒一同を倫理講堂に集め此事に關して懇々訓諭せられたとのことで吾輩に取りては實に此上もなき滿足である

所で今度も亦學校の或る制度に關して聊か論評を試みるのであつて不本意ながら又もや學校攻擊である、して其制度は普く諸種の學校に共通なるものであつて殆ど例外はないが今日は主として或る女學校に就て御話するのである、といふのは先達て私が或る宗敎女學校の生徒の保證人となつた其事が此吾輩の數年來の宿論を今日茲に發表せしむるの動機となつたからである

扨て其制度といふのは所謂保證人に關するものであつて其れは大概どこの學校でも生徒が入學する際には必ず一人若くは二人の保證人といふものを設けて其者から在學證書といふものを取る其文に曰く

右の者今般御校へ入學御認可之上は御規則御命令を確守可爲致は勿論本人在學中に於ける資金其他一切の負擔は拙者共に於て相引受聊かたりとも御損害相掛申間敷爲後日依而證書如件

と、是れ果して善良の制度なりや否や吾輩が今將に論評せむとするのは則ち此事である、然しながら茲には決して一般諸種の學校に就ていふのではないたゞ或る女學校而も或るクリスト敎の女學校に於て猶は且つ此制度あるを論難するのであるから其邊は豫め斷つて置く

今此證書に書いてあることを分拆して見ると先づ第一には保證人たるものが在學生徒の品行上の監督をするといふことであつて第二には學校に對して金錢上の保證をするといふことであるから言葉

を換へていへば生徒の身元保證をするのである、さア其身元保證といふ事が此場合に於て果して穏當であらうかどうか、それは成程見ず知らずの下女下男でも雇入るるのならば所謂請人といふものを置いて其身元保證をさせるといふのは聞えて居るが一方は堂々たる學校一方は頑是ない子供何で身元保證の必要があらう學校は自ら進むで子弟薫陶の任に當り充分に其職責を盡す可く聊かたりとも他人任せにして置けるものでない否寧ろ學校は學校の見識として此子此生徒を一旦此學校が預つた以上は人に後指は決して指させぬといふ意氣込になる可きではないか、それに何ぞや校外の保證人とは、實に不見識不親切極まるといはなければならぬ學校に預る以上は吾子も同然子の身元保證を他人にしてもらふといふ親達がどこの何處にあるものぞ、それも營利を目的として立てた學校でもあるなら格別のこと、優にやさしい女子のみを收容する宗教學校而も學識ある西洋婦人を校長として戴く女學校に於て猶は且つ此制度を採用して居るといふに至つては實に殘念無念至極である殊に身元保證なるものは法律上其効力の有無さへ議論のあるところかた〲以て此制度に就ては識者の一考を煩はしたい

論者或は曰はむ君のいふことは單に一片の理窟といふもの、中々以て世の實際はそうは行かぬ多い中には月謝を滯らせて保證人の厄介になり不品行を働いて學校に迷惑を掛ける輩も隨分有り勝ちの事中々以て此制度は廢することは出來ぬと然らば問はむ其不品行をしたり月謝を滯らせたりして保證人の厄介になるものは統計上どの位あるかを恐らくは一年の中に百に對する一あるか無しであらうして見れば此制度の實益といふものは極々少々

といはなければならぬ之に引きかえ其害の及ぶ所を觀るに一體此制度は生徒たるものゝ後日の不始末を豫期すればこそ設けられて居るのであつて結局生徒たるものを信用せざるに基くものであるから所謂外以て內を制して生徒の自重心を墮落せしめ其精神敎育の上に至大なる妨害を爲すものである甚だしくいへば保證人といふ言葉其ものが早どの位生徒のあたまに害毒を與へて居るか知れないのである又或は曰はむ君のいふ所は悉く良し唯だ如何せむ誰か生徒の代表者となる成年者を設けて置かなければ通知其他種々の場合に不便であると、吾は直ちに反問せむ然らば何ぞ速かに保證人の名儀を改めざるかと」

終に臨むで一言するは吾輩が斯くも屢々學校制度に就て法律的觀察を下し敢て識者の笑を僻せざるものは先づ學校からして改めなければ到底社會制度の改良は覺束ないといふことを確信して居るからである。

まことの母（其貳）

敕　樸　生

父母の恩は山よりも高く、海よりも深しといへるは、古より子たるものに、父母に敎養を勸むるの語に使用せられたるが、予は移して父母たるものの其子を敎育敎導するに、心思を用ゐんことを勸むるの語と爲さんと欲す。所謂賢母なる人は、其子を敎誨するに如何に心を用ゐたるか。巳を謹みて、慾を絕ち、情を矯め、摸範たらんことを務めては、其心を尙くすること山よりも高く。身を勞して、苦を忍び、難に耐へ、精勵せしめんと欲するには、其思を沈むること海よりも深し。斯くの

如くにして、其子をして遂に大成するに至らしむるものなり。左れば中には巳が身を殺してまで、其子の爲にせるものあり。紀伊大納言賴宣は德川家康の第十子にして、紀伊家の祖なり。(家康十一子あり。長を信康といひ、早世す。次を秀康といひ、即ち越前家の祖なり。三子は秀忠にして、二代將軍となり。四子忠吉、五子信吉亦早世す。六子忠輝越後に封ぜられ、後罪を以て國除せらる。七子松千代、八子仙千代共に夭す。九子義直尾張家の祖、十一子賴房水戸家の祖なり。)兄弟中最も英邁卓異にして、幼より毅然頭角を現し、後幕府を初め内外の大に畏敬する所となり、一代の言行今に傳へて其英風を欽慕せしむるもの鮮からす。生母正木氏は於萬の方(養珠院)と稱し。家康側室中才德の譽高き人なるが遺憾なるは我邦の史家も、當時の婦女に望む教訓は、貞淑とか、節操とか、其他普通の孝悌、忠愛等なりしに從ひて、其傳ふる所、稱揚する所も亦此等の範圍を脫して、養育の善惡巧拙に重きを置くこと能はざりしを以て、於萬の方に於ても亦之を記せるもの至つて稀なり。唯々世に母を視て其子の如何を知り得るのみならず、子を親て其母の如何を察し得べしといふを見ても、母子の間に於ける感化教導の偉大なる効あるを知るべし。嘗て於萬の方が塙團右衛門(直之)が舊主の爲に仕途を妨げられて、沈淪し居ふを見て、(團右衛門初め加藤左馬助嘉明に仕へ、事を以て去る。後福島左衛門大夫正則、團右衛門を祿せんとす。嘉明大に爭ひ其事止む。以來諸侯の之を養ふなく、遂に大阪に應じて戰死す。)諸公子に珍器、寶刀を献ずるは奇しき事にあらず。妾は勇士をして公子(賴宣をいふ)を擁護せしめんと欲すとて。自ら節約を守り、每歲受くる所の化粧

料五百金の中二百金を割きて團右衛門に贈り、其窮苦を救ひたりといふ。此一事を以てしても於萬の方の尋常の婦女子にあらざるを知るべく、當時賴宣は年甫めて十二三にして、其後間もなく大阪夏陣に於て、賴宣が戰に及ばざりしを憾みたる美談あり。斯る非凡の母にして斯る英邁の子あり。常に訓誨諷諭に心を用ゐて、感奮興起せしめたるを推すに難からず。同じく家康の子にして、忠輝（上總介）の如き遂に其身をも亡ぼすに至りたるものあるを見ても、雄鷹の子は悉く俊鷹にはあらで、雌蜂の子は皆鋭蜂たることを知るべし。又之より凡そ三十年前に織田信孝（信長の三子、幼字三七君。）の乳母あり。幸田彥右衛門の母なり。頗る女大夫の風ありて、信孝を輔導し、彥右衛之を訓戒する所多し。信孝、豐臣秀吉方に質として乳母を遣る。秀吉受けて之に甘んず。以て其如何に重せられたるを見るべし。後信孝、秀吉と不和にして、遂に戰を交ふるに至りて、秀吉、母を以て彥右衛門を招致せんと欲す。當時信孝の臣にして、利に迷ひ、慾に暗みて其主に背くものさへあり。況して彥右衛門にして、若し招きに應ぜざるに於ては、其母の磔殺せられんこと火を見るよりも明なるをや。然れども彥右衛門は、幼より母の敎訓によりて、剛勇節義の士となれり。深く忠孝兩ながら全からしめ難きを歎きしなるべし。此時母は將に磔刑に處せられんことを知り、固より覺悟の上なればとて、書を彥右衛門に送りて、妾空しく果つるも、ゆめ〳〵歎くべからず。親の子に先つは世のならひなり。唯々君に仕へて忠節を勵むべし、決して貳心を抱くこと勿れと。彥右衛門は固より母の賢明を知る、母も亦彥右衛門の節義を知るべし。尚は死に臨みて訓戒を怠らず。之を聞くもの

敵味方の差別なく、感涙を流さゞるものなかりしといふ。彦右衛門は遂に信孝と共に始終し、潔く戰死したり。是亦斯母にして、斯子ありと謂ふべく。後元祿年中に至り、赤穂四十七士中竹林唯七(隆重、自刄の時年卅二。)の母も亦忠節を勸めて自刄す。是稗史小說の類にも傳へて世の知る所、我邦に於ても王陵の母、徐庶の母、其人に乏しからざるなり。以上は將士なるものゝ母にして、常人は學び難く、殊に母たるものゝ苦節は、太平の時にはあるまじき事なれど、古人も治に居つて、亂を忘れずなど云へば、母たるものゝ常より斯る覺悟も、決して不用にはあらざるべければ、王侯貴人の母たる務の常人に異なるを示し、併せて之に及べるなり。(未完)



近古勇婦百譚

黑金子

酒井遠江守の夫人(其五)

酒井遠江守隆忠殿の奥方は薩州の大守島津修理大夫綱久殿の御息女でありまして、お生得は甚だ麗はしけれど武勇に勝れ弓馬の道を好み給ひ其上儒學に心を寄せ歌書は云ふに及ばず釋迦孔子の道を見盡し軍書迄殘りなく女性には過ぎたる武勇才學でありまして召仕の婢女迄も其器量を選んで召抱へられました。

或時御里方即ち薩摩よりの附家老本多五兵衛と申

すもの奥方の御前へ罷り出まして近頃申し上るは如何ながらお里付の私なれば申上ますが、女性の御身にて武藝の御嗜み餘りなる御事に存せられまして御當用に入らざる事の樣に存じます、近來は往來の女に大小をさし歩行く者之れあるよし風聞仕る、畢竟是も勇氣ある者と覺えますが古來より女は腰の物を帶びざる習慣でありますから左樣の者は皆人笑ひます、當時萬々歳の御世に如何なる事のあるべき人の口は萬里に通ずるの道理で女儀の武藝を好み過ぐる事宜しからぬ御事にて、牝鷄の旦する家亡ぶと申す若し上の御咎も如何に候へばと諫言を申し上げました、奥方は細々と聞給ひ其方とて事を知らずしては言ふべからず、去ながら我も諸書を見たれば大方の事は知りをれば其方に委しく咄し聞せん、尤も古より諸評判等に女の武勇は入らぬもの丶樣に見えたれども定規にはなりがたし、異國本朝女の武勇にて忠臣とありし事數多し、誠に心掛のよき女は色の道を離れ忠貞孝の三つを專にし義の强きを本とするものである、唯一筋に武藝は女に益のなきものと思ふは善惡の分ちも知らぬ愚痴の沙汰なり、何として武士の家に生る丶者の武藝を心掛くるを入らざる事と禁じ戒しむるや、譬へば女許りの所へ狼藉者などあるに男の駈け集まるを待つべきや、近來岡部駿河守の内室下屋敷へ遊山に行き遊興の折から狼藉の者椽の下より跳り出で座敷へ切入るに、有合ふ者ども皆泣叫ぶ許りで之を防ぐ者一人もなき其間に内室の首を切つて行方知らずなりぬ、附々の侍表より馳集る間もなき故遂に其者を取逃したり、左樣の折から心掛の者あらば責めて敵をば切留めて僉議の種ともなすべきなれども手に及はねば力なし、證據無ければ詮議もならず隱密に濟しける間

世間の笑草となりたるゆゑ附添の侍切腹したりと、高家武家の婦人の中ハ男の立交る事は希れなる故甲斐〲しき女を召仕ふ事肝要の心得あり、男は勇なくとも男の看板、女は勇ありても人の侮るものなれば武家に仕ふる女は武藝の心懸第一なり、扨陣中に女を禁ずると云ふこと古戰評判に見えたり、是陽の發する所に陰の交ると云ひて嫌ふなれども是古戰評判の誤なり、天地は萬物の父母にて陰陽和合の根元なり、何れに隔あるべきや陣中とて陽氣許りにて陰氣なきにはあらず、既に掛引は陰陽あり駈る事許りにて引事なくて濟むべきか、魚鱗鶴翼の備も魚鳥と譬へて陰陽二つあり殊に陣中に用ゐる道具殘らず此二つを出す、士卒を下知する軍配も亦然り、然らば婦人を禁ずる事はあるまじきなり、女に五つの禍ありと云ふことは皆傾城遊女等の事で何ぞ人の本妻を禁ずべきや、

妻を夫の軍陣に連るゝならば夜は快く休息させ、晝は馬に飼秣を與へ夫にあり替りて倶に諸事に心を付くべき事なり、夫の別を哀しむ心あれば武勇のある女は能く夫を諫めて忠臣の心を致さしむ、古來より武備ある女の助を得て手柄をせしこと其數算へ難し、和らかなる者を内裡女郎の樣なりと云へども神功皇后は甲冑を帶して三韓を攻め玉ふ況や武士の妻の武藝を心掛ん事惡きとは云はれまじ、併し治世には入らぬ物と云ふ族もあるべきなれど、事變は皆色慾より出る事なれば女なりとも闇々と岡部駿河守が内室の如くに討れんこと無念の至りなり、勇氣強き女は本夫の外他人とは戯れも云はぬ、男は表女は裏に極まつて、女の大小を差す事宜しからぬ樣に申せども男は大小と云ひて二刀を差す、女も守り脇差守り刀と云ひて一刀を帶ぶ、箇樣の譯ある事なれば何國何方の女が

腰の物差たりとも笑ふ筈はなし、遊女傾城すら我道を思へば色の義理はあると聞く、増てや武家に生るゝ者武勇は家の業なれば其を知らぬは遊女傾城にも劣りたり、箇樣の心得もなく無用の異見、志は過分なれども道理に合はざれば用ゐ難し、其方も薩州生れなれば合點ならむ、薩摩の鞘割りとて勘忍ならぬ事あれば鞘を割り其儘再び納めぬ國風なり、扨々其方は和かなる性質にて婦人の附人には不相應なれば里方へ罷り歸りて休息せよ、と仰せられましたから本多五兵衛一言の返答も申し上げ樣なく悄々として本國へ歸りましたのは如何計りか耻かしい事でありましたらう



「グリセル、ベーレー」夫人（其二）

宮舘さだ子

此時「ヒユーム」孃（未來の「ベーレー」夫人）は、やうやく妙齡十七才の春を迎へたばかりであつたが、時代の精神に從つて、既に高尙なる敎育を受け、且又、裁縫紡績等の手業にも熟達して居られました。

母刀自は、元來身體の極めて孱弱き人でありましたから、家事上の事は、何くれとなく孃の一手に任せ、孃は亦た甲斐〳〵しく是等の事を整理して、少しも不自由を感ぜしめなかつたのである。

孃は此の如く家事に關係しつゝある傍に於て、屢屢父に伴はれて公會の席に臨んだから、當時父の身の邊に纏綿た危險の狀態にも常に接觸て居つ

た。其上孃は、政治上に關する父の密旨を啣み、之を「トルプース」監獄に拘禁されてある、孃が未來の舅「ベーレー」氏に傳ふるが爲に、兩度「エヂンボルグ」に使したことがあつた。此事は極めて危險な使命でありました。何といへば、當時國中の要所々々には、兵隊が駐屯して旅人を取調べ、若し非國教派の人であるか、又は時の政府に對して、穩かならぬ目的を抱いて居ると認めた場合には、些も容赦なく處刑するからである。それで孃の密旨を帶びて、遠く「エヂンボルグ」に使するに方りても、身には書類やうの物を携帶することが出來ず、父の密旨は能く之を記憶して、口頭を以て之を「ベーレー」氏に傳へなければならぬ、また兵隊の訊問を受けた時には、巧に言脫がるゝ丈の頓智を具へなければならぬ。のみならず「レドプレース」より「エヂンボルグ」までは、五十哩以上の路程であつて、それに道路の險惡なることや、兵隊の駐屯所を避くるが爲に、迂廻りをしなければならぬこと等を打算ると、此旅行は、先方に達する迄少なくとも二三日以上を費さなければならぬのである。

此危險い旅行の途中で、孃は兵隊の尋問を避けやうと、路を「アールストン」に取つたが、不幸にも前途の要所々々には、兵隊が蜘蛛の網を張るが如くに、嚴に警戒を加へつゝあると云ふことを聞いた、孃の進退は此に全く谷まり、如何とも詮術なきことになつたが、熟考の末やうやく一計を案出し、其附近を彷徨ふ一人の女乞食に金品を與へて、彼等の一群を手馴け、其案内で間道を迂廻し「スートラ」山の頂上に在る狹苦るしく、且寂しげな一軒の客舍に到着、其處に一夜を過ごした後乞食の衣を着けて、翌朝無事に「ミド、ローシアン」と

云ふ所まで案内せられ、首尾よく「エヂンボルグ」に入ることが出來た。

孃の「エヂンボルグ」に到着したるとき、先づ其眼に映じものは、實に悲慘にして寒心すべき狀況であつた。幾多の人々は謀叛人といふ嫌疑の下に、續々死刑に處せられ、名高き古市の草木も、爲に紅の色を呈して居つたのである。

孃は、如何にして獄則の極めて嚴重なる「トルブース」監獄に入込み、不幸なる老紳士「ベーレー」、氏に會見することを得たかは分曉りませぬが、多分「ベーレー」氏の友人、又は親戚の盡力に依つたものでありませう。兎に角孃は、兩度「エヂンボルグ」に使し、其都度陋穢き監獄の一室に於て、「ベーレー」氏と親しく會見を遂げ、父の密旨を傳へて口頭の返事を受取り、首尾よく使命を果したることは事實である。

此兩度の旅行は、孃に老紳士「ベーレー」氏の長男「ジョージ、ベーレー」氏と會見し、且懇話するの機會を與へたものであらうと思はるゝ。「ジョージ、ベーレー」は、孃よりも二才の年長者であつた。當時此兩人の間には、結婚といふ考は些しもなかつた。また之を考ふる程の呑氣な場合でもなかつたのである。唯孃の一家と「ベーレー」氏の一家とは共に同一の政見を抱き、同一の危殆に陷つて居るのであるから、自然此兩人の關係をして親密ならしめたのである。

「エヂンボルグ」に至る孃が最終の旅行の時には、父の運命が殆んど危機一髮に迫つて居た故、早速使命を果して歸城するの必要があつた。此後間もなく、老紳士「ベーレー」氏の運命は、既に終焉に屬したのである。乃ち千六百八十四年十二月の二十三日に、彼は高等法院の審問に附せられ、法庭

に引出されたが、永らく投獄せられて居りました故、今は身體も弱り果て、寢衣の儘やうやくの事にて法庭に出頭し、且審問中にも、數回氣付け藥を服用せしめられた程である。此審問中に於て、彼は自巳の國主暗殺の陰謀及與せざりしこと、幷に君主政治顛覆の政見を持する者でないと、嚴格に辨明したるにも拘らず、拷問の苦痛に依りて、無理推しせられた口供が證據となりて、翌日の午後「エチンボルグ」の四辻に於て死刑に處せられ、且つ其屍體を折解して、之を四個所の監獄の門前に曝すべき宣告を與へられた。彼の運命は玆に全く決定せられたのである。翌日の午後、彼は妹の腕に援けられ、從容として刑臺に登つた。當局者の猜疑は、此くして此公正なる老紳士を長へに葬つたのである。

蘇格蘭の「シドニー」として、其名を不朽に留めたる「ベーレー」氏の處刑後、其財産は悉く官沒せられた爲に、一家全く分散し、長男の「ジョージ」は、同志の人々と共に難を和蘭に逃れた。

飜つて「レドゾレース」に於ける孃の不幸なる一家は、當時如何なる狀態であつたかと云ふに、捕吏の視線は、一に父「サー、パトリック、ヒユーム」の身上に集つて居る。それが爲に「ヒユーム」氏は、「レドゾレース」の居城を距ること凡そ二哩にして「ポートワルス」寺院の地下に在る、「ヒユーム」家累代の墳窖内に潛伏した。此潛匿所を知るものは、唯「ヒユーム」夫人、孃幷に常に「ヒユーム」家に出入せる忠實なる大工「ジヤミー、ウエンター」と稱する者のみである。此者の勢力に由りて、夜間其墳窖内に臥褥、寢衣、卓子、椅子及び其他の必要品を運搬した。晝間は唯一條の細き光線の、窖の上壁なる隙を通じて透入るのみである。是さへ窖

内の物を見定むるには餘りに暗過ぎるのである。

此の如く陰鬱な墳窖内に於て、「サー、パトリック、ヒユーム」氏は、些の火氣もなく、又其周圍には、祖先累代の遺骸に取り圍まれて、千六百八十四年の秋の半を過ごした。

「サー、パトリック、ヒユーム」氏は、平素健康の餘りに勝れない人であつたのに加へて、斯くも陰濕で鬼氣人に迫るやうな墳窖内に潜伏して居るもので、ありますから、身體は日増に疲れ衰ふのみである。若しも其剛健なる意志と、可憐なる「グリセル」孃の慰藉とがなかつたならば、彼は累代の祖先と同じく、白骨となりて其處に安置せられたのであらう。

此墳窖内に潜伏中一つの面白き話がある。ある夜、彼は常の如くに孤燈の下に書見しつゝありし折、偶々其足下に在る髑髏の、ひとりでに動き出したのを見た。流石の彼も此奇異なる現象には驚かざるを得なかつたが、心を沈めて之を凝視ると、其動き方は益々激しくなるのみである。試に傍らに在つた杖を取つて、其髑髏を跳ね反したるに、中より一匹の鼠が現れ出でた。彼は後日屢々此話を人に語りて、世人の不可思議なりと稱するものの多くは、概ね此類なることを説き示した。



和歌講義

藤丸つま子

柿本人麿

上古は邈として詳かならず、いま古事記、書紀等

にのせたる謳歌を見るに、甚だ幼稚にして、而も盛ならざりしが如し。されど持統天皇の御代に至りて一大偉人を生じぬ。柿本人麿是なり。その詠せし處多く情を舒べたる歌にして、最も長歌に巧みなりき。物のあはれを感觸せしむるにくしき力を有したれども、また雄壯なるものに乏しからず、かの明石の浦の歌は長く人口に膾炙せるにあらずや。而して近江の荒都を歌ひしと、左に掲げし歌とは、殊に秀でたる者にて、よく彼の性格をあらはしたる者といふべし。即ち一は大津宮の荒廢を忍び、一は妻を石見に止めて、ひとり京師に上る時、そのやさしき心根は化して金玉の詩となりしなり。要するに、人麿に及びて、姿も形もやう〳〵整ひ、歌も歌らしくなりて、いやつぎ〳〵に榮えけり。されば我邦歌壇に於ける中興の大詩人、いな むしろその開拓者といふも大なる失當にあらざる也。

彼は持統文武の二朝に仕へ、長、新田、高市の諸皇子と遊び、駕に陪して吉野、紀伊、伊勢等に至り、近江、筑紫の名蹟を探れり。過ぐる處悉く詠歌せざるなく、大部分はのせて萬葉集にあり。晩年石見に閑居を搆へて、遂にその地に歿せりといふ。

柿本朝臣人麿從二石見一別レ妻上來時歌

石見乃海、角乃浦回乎、浦無等、人社見良目、潟無等、人社見良目、能咲八師、浦者無友、縱畫屋師、潟者無鞆、鯨無取、海邊乎指而、和多豆乃、荒磯乃上爾、香青生、玉藻息津藻、朝羽振、風社依米、夕羽振、浪社來緣、浪之共、彼緣此依、玉藻成、依宿之妹乎、露霜乃、置而之來者、此道乃、八十隈每、萬段、顧爲騰、彌遠爾、里者放奴、益高爾、山毛越來奴、夏草之、念之奈要而、志奴布良武、妹之門將見、靡此山。

◎語釋　石見乃海　石見は石群の約まりたる詞にて、唐の崎なるかの大汝貴少彦名の二柱神のおはしたる志都の岩屋、いと岩石多く群たればしか名づけしものあらむといひ、また、此國の海邊はおしなべて岩なれば、岩見の國ならむともいへれど、何れにてもありぬべし。●角乃浦回乎云々　岩見國那賀郡に都農郷あり。いまも角津と呼ぶとかや。その地の海邊なるべし。「浦」とは、和名抄に、大川旁曲諸船隱レ風也とありて、凡て海湖の曲りて、陸地に灣入したる處也。こゝはよき浦はなしとの意。●人社見良目　他人こそは左樣に見るならめど也。「こそ」は意味を強くきかせむが爲也。●潟無等云々　面白き潟はなしとこそ人は見らめどの意也。「潟」は海の淺くして、潮滿つれば隱れ、干れば一帶にあらはれて、いとめづらかなれば浦に對へていへるなり。概して西國にては、浦入江などをいひ、北國にては湖沼をいへり。●能咲八師　よしやマア浦潟等はなくもと、假に同意する辭也。されば、次に至りては、前者の齒牙にかくるに足らざる事をいへり。「咲」は稱嘆の辭。「八」は嘆の辭。「し」强辭也。●鯨無取　海の枕詞。すべて無とは魚の古言にして、鯨を取る海とかゝりたるなり。●海邊手指而　玉藻息津藻が、風浪のために海邊をさして漂ひよる也。「浪のむた」の下に入れて見るべし。さるをある人は、人麿自身が海邊に來よるやう曲解したれど、大なるひが事なり。迷ふべからず。●和多豆乃云々　石見國那賀郡の海邊にして、いま渡津村といふ處也。「磯」とは海湖の浪うつ際の、あら〳〵しき岩石多き場所をいふ。されど、後の世となりては、この區別をわすれ、一般にそのほと

りをもひろく「磯」といふに至れり。●香青生　「か」は「か黒き」「か弱き」などいふかと同じく接頭語也。「生」はなるの借字にて助動詞也。即ち青くあるの意。●玉藻息津藻　玉はほめ詞にて、單に藻といふに等し。息は沖。つは天つ風のつと同じゝの意。この藻は海底にあるものにて、磯邊にあるを邊津藻といふに對へたる名稱なり。この二つの藻は畢竟一物なるを、調べのうへよりあやなしたるものならむ。●朝羽振云々　古義に『「羽」は扇るの古言か。「振」は起り觸る事にて、風浪などの物に扇り觸るゝをいふ』とあれどいかゞ。思ふに「はふる」とはもと「放」の意味にて、風吹き浪動きて一所に靜止せず、かなたこなたに動搖するの古言なるべし。●浪之共　浪と共にの意。●彼縁此縁　藻のかなたこなたに漂ふさま也。●玉藻成　玉藻のごとくの意。かく比較の意をあらはす「なす」を使用せしは、萬葉以後には殆ど稀なり。いさなとりよりこゝ迄はよりの序也。●妹　は女より男を親みて兄といふに對し、男より女を親みていふ詞にて、こゝは妻のことなり。●露霜乃云々　露霜は置く者なれば、置の枕詞とせる也。置而之の「之」は例の强めの辭。●八十隈毎　八十は數の多きこと。隈はすべて道の曲り目の處也。即ち多くの道の曲りたるをすぎて、最早遠く離れたるよしを現せり。●里者放奴　故郷の地を遠く放れたる意にて、さかるは離るの古言。●益高爾　山の高きを遠く超えきたる意。矢張遠く離れたるよし也。●夏草之　「しなえ」にかゝりたる枕詞。夏は日光の照すこと强ければ、日中などは、あたりの草も、忽ち萎れる故也。●念之奈要而云々　思ひの切實にして、しをれて居るさ

ま。「志奴武」は　思ひ慕ふことにて、前號に說けり。「良武」推量の助動詞。妻が我を忍ぶらむと推し量りたる也。●妹之門將見　妻とまのあたり會はむことは到底適ふべからず。せめては其門をなりとも見むとなり。こゝに至りて夫婦の情合の極めて濃かなりしを覺ゆ。●靡此山　山の前方に横はりて、妹が門も見えざれば、他に靡き避けて、障碍せざれと、山に命令したる也。その眞情いと憐れならずや。實に全篇を活動せしむる勢僅かこの一句に存す。雄大可憐の情交々到り、讀む人をしてそゞろに卷を掩はしむ。これ後世詩人の遙かに及ばざる處也。

◎大意　石見國角の浦には、よき浦、おもしろき潟はあしと人こそ見るらめど、よし左樣のものはあくとも、和多豆の荒磯に、風浪のうち寄するまに〳〵漂ひくる藻草の如く、より寢し妻と住めばたのしきを、こたび獨り里に殘して、京師の方に上り來れば、あかず名殘のをしまれ、こよなう別れ難くて、數多の道のくま〳〵毎に、いく度も〳〵ふりかへりて故鄕の空を眺むれど、いつしか里は遠ざかり、山をも多く越えきぬれば、いまは益々妻の戀しく思はれぬ。また妻もその如く、頭をうなだれて、我を慕ひ偲び居る事ならむ。いでせめては妹の門なりとも見む、中間なるこの山よ、他へ靡きて邪魔をすることなく、かく互に思ふ情の切なるを通はせよと也。夫婦の情、まさに此の如くあらざる可らず。

指環等に用ゐる寶石

理學士　福地信世

指環に寶石を入れる事はもとより實用の點から割

り出したものではなく單に装飾の爲めであるから（第一）其の寳石は光輝強くして色の美はしい者が最もよいのである（第二）指環等は能く他物に觸れ傷き易く又擦れ易き故其の寳石の傷のつかぬ樣な剛いもので無くてはならぬ（第三）に如何に美くしい者でも到る所に多く産するものを麗々敷指環に入れて居る事は人の好まぬ所である人は好奇心に富んで居るものであるから寳石も其産出の稀なるもの程尊ばるゝのである。

偖寳石中で最も尊ばるゝものは金剛石であるが是れは寳石中で第一等の光輝を有し最高度の堅さを有し且つ産出が最も稀れであるからである。

是より寳石の光輝色及び堅さ等の事につき簡單に述べ終りに人造寳石の話をしやうと思ふ。

光輝　　光輝は寳石の最も大切なる性質である如何に美はしい色でも光がなければ装飾として美麗に見えない、例へば玻璃でも金剛石でも色は同じ樣に無色透明であるが玻璃の光は到底金剛石に及ばない是れ金剛石が尊ばれ玻璃の賤しまるゝ一つの理由である。

光輝と云ふ事を學問上より研究して見ると甚だ六づかしきもので二つの種類に分ける事が出來る（第一）は寳石の表面から反射して來る光（即ち寳石の光澤）と（第二）は外より光線が一度寳石の内部に入り内部にて反射し再び外に出て來る光（即ち内部の反射）との二つである。

（第一）光澤　金剛石の種類によりて異なる者にして決して磨き方の爲めではない。勿論磨き方が不完全ならば出べき光澤の出ぬ事はあれども如何にガラスを能く磨きても金剛石を十分に磨き上げたる時の樣な光澤は出ないのである

光澤の善惡は多少は磨き方によるものなれども重

に其寶石の種類によりて異同があるのである、之故に或る寶石に固有なる光澤は他の寶石を以て如何に摸せんとするも此れに擬する事は出來ぬのである、是れ寶石に自然と貴賤を生ずる一つの理由るである。

(第二)内部の反射は寶石として最も必要なる性質である。如何に光澤よき寶石でも内部の反射がない時は光が如何にも表面のみに止まり賤しく下品に見ゆるが、内部の反射ある時は光が如何にも寶石中から生れ出た樣に見えて高尚に見ゆるものである。金剛石の燦爛たる光は表面の光澤と内部の反射とが能く配合したる爲めである決して表面の光澤のみでは彼の燦爛たる光輝は放たぬのである、若し金剛石にして内部の反射なき時は金剛石の玉は簡單に其一方の明に面したる方のみが光りて決して彼の燦然たる美觀は呈せぬであらう然るに金剛石の玉が何れの方向にも美はしき光輝を送り恰も金剛石が電氣燈の如く自ら光を放つ如くに見ゆるは是れ外より金剛石中に入りたる光が再び金剛石の内部より反射して外に出づる爲めである。

同じ光が外より寶石中に入るも内部より反射して再び外に出る光の強弱は寶石によりて異なる、金剛石は實に内部の反射の最も強き石である。茲に同じ形に作りたる金剛石を無色の黄石と水晶とを一所に置く時は金剛石は燦然たる光輝を放つも黄石は光輝是れに及ばず水晶は一層黄石に劣る事知らるゝであらう是主に内部の反射の善さと惡しきとによるのである。誠に内部の反射は寶石の美觀をなすに必要なる要素である。

三 色　寶石の色には種々あり必ずしも何色が最も尊く何色が最も賤しと云ふ差は無い皆愛玩

する人々の好みによりて異なるものである
普通に愛玩せらるゝ寶石の色を掲ぐれば次の如し

無色の寶石
金剛石(ダイヤモンド)　黄玉(トツパース)
水晶、等

紅色の寶石
紅玉(ルビー)　紅拓榴石、等

青色の寶石
青玉(サフアイア)　綠柱石(ベリル)此れは
帶綠青色なり、等

綠色の寶石
エメラルド(綠柱石の一種)クリソベリル等

黄色又は橙色の寶石
黄玉(トツパース)ヲリエンタルトツパース
等

紫色の寶石
紫水晶　拓榴石、等

褐色の寶石
電氣石　煙水晶、等

以上述べた色は寶石の生れつきの色である、然し或る寶石は其生れつきの色即ち固有の色の他に見る方向によりて變化する一種奇妙なる異彩を呈すのものがある例へば蛋白石(ヲパル)の如きは少し濁りたる水の如き色が固有であるが、蛋白石の特別種は水の如き色の中よりチラ〳〵虹の如き七色の色を放つものがある。此のチラ〳〵見ゆる虹の如き色は蛋白石が有する固有なる色ではない全く前に述べたる內部の反射と同じ樣なる光線の作用によるものである。

寶石は大抵其の固有なる色の美はしき爲めに愛玩せらるゝものであるが、時には固有なる色は美はしからずとも光線の作用によりて一種奇妙なる色

を呈する事が美なる爲めに愛玩せらるゝものがある。チラ〳〵虹の如き色を呈はす蛋白石、又は見る方向の變はるに從ふて眼目の運轉する樣に見ゆる月石の如きは其一例である。

透明　一般に寶石には透明なるものと不透明なるものとがあるが必ずしも透明のものが美しく不透明のものが美はしからずと云ふ事はない。其色と光輝と透明の度との配合によりて美觀を生ずるものである。例へば孔雀石の如きは綠の美なる色と其不透明なるとによりて孔雀石に固有の美觀をなして居る。一般の寶石につきて透明の度と美觀とは大なる關係はないが然し乍ら指環に用ゐる寶石につきては大關係を有するものである。指環に用ゐる寶石は形が小なるものでなければならない、而して形小にして甚だ美麗に見せるものは其寶石の光輝が甚だ强いものでなければならない。强き光輝を放つ爲めには內部の反射が必要である。外より來る光線が一度寶石の內部に入り再び內部より反射して出る爲めには寶石の透明でなければならない。

それ故に指環に用ゐる寶石は透明なるものがよいのである。孔雀石の如きは大なる物を作りては美であるけれども指環に入れは少しも目に立たぬのは孔雀石が透明でない故從つて光輝が少いからである。

蛋白石、月石の如く一種奇妙なる光と色とを現はす爲めに美なる寶石のみは必ずしも透明なる必要がない、是れは唯一つの例外として考へてよいと思ふ。

石ではないが彼の眞珠の如きも一種奇妙なる色と光とを放つ爲めに愛玩せらるゝのである。

剛さ　石の剛き事は實に寶石の一大要

素である、折角の指環も寶石に傷がつきては甚だしく其美觀を損する故寶石は飽までも剛いものがよい

偖て石の剛さは如何にして定むるかと云ふに、一つの石の角を以て他の石の表面を爬き表面に傷がつくかつかぬかを以て檢するのである。例へば黃玉の一片を取り其角を以て水晶の面を引き爬けば水晶の面には其跡に爬傷を殘すのである、其故に黃玉は水晶より堅いと云ふ事を知る。此れと反對に水晶の角にて黃玉を爬くも傷がつかない、是れは全く黃玉が水晶より堅い爲である。

石の學者は凡ての石の堅さを檢し其の剛さの順序によりて石を十級に分けた。

金剛石が第十級即ち最上級であつて靑石（サファイア）が第九級、黃玉が第八級、水晶が第七級である。

指環に用ゐる他の岩石の剛さは如何を檢するに大抵は七級以上のものが多いのである。實に寶石は剛くなければならないからである。

玻璃は此等の寶石に比すれば甚だ柔かい、玻璃は六級以下のものである。それ故に何れの寶石にても爬けば玻璃に傷をつける事が出來るのである。金剛石は第十級であるから勿論玻璃に傷を付る事が出來るが、玻璃に傷をつける石は必ずしも金剛石のみでない、水晶でも黃玉でも何れの寶石でも瑠玻に傷をつける事が出來るのである。

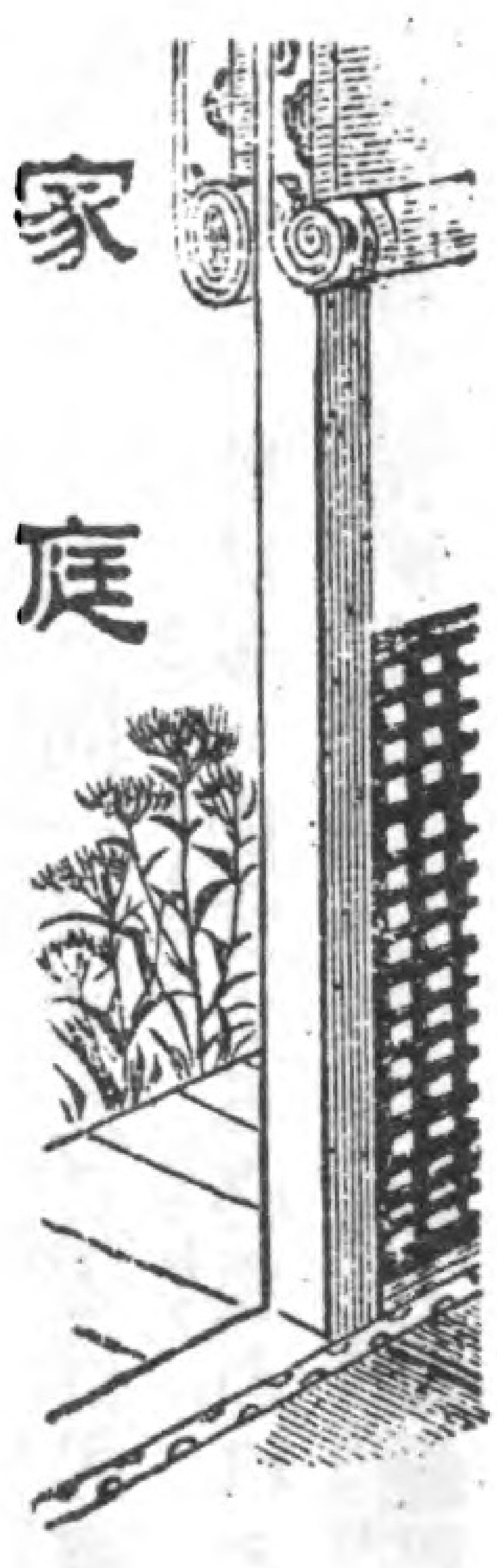
石の剛さを其寶石の何物たるやを檢するに必要なる一つの條件である、例を揭げて說明すれば金剛石の剛さは第十級と定まつて居るものであつて決して九級に下る事はない其れ故に一つの寶石が果して金剛石であるかないかを檢するには其疑はしき寶石の角にて靑玉（第九級の剛さの石）の面を爬

て見るなり、若し青玉の面に傷がつけば其疑はしき寶石は第九級以上の堅さのものなる事が知れる。これによりて其疑はしき寶石は金剛石である事を知る事が出來る。若し青玉の面に傷がつかなければ其疑はしき寶石は第九級以下の剛さである事が分かる此れによりて其疑はしき寶石は金剛石ではない僞物であると云ふ事が分かるのである。參考の爲め普通の寶石の堅さを示せば

第十級　金剛石
第九級　紅玉　青玉　ヲリエンタルトッパース
第八級　黄玉　緑柱石
第七級　水晶　電氣石　柘榴石

等である。

（未完）



家庭改良に關する意見（續き）

磯部　武者五郎

家庭改良に關する第二の要點は衣食住の改良に在り、世人多くは衣食住の改良といへば、悉く西洋的に變更するに在らざれば改良にあらずと思惟する者あれど、こは大に誤れりといふべし、西洋風衣食住の狀態が果して學理に適ひたるものなりや、又悉く吾人に適したる者なるか、又最も善く改良せられたるものなるか、是未だ決定せられざる問題にして、吾人が悉く之を取りて日本の家庭を改良せんことは無謀のことゝいはざるべからず、衣食住の改良につきては各專門の智識を要す

る事にて、輕々に變更すること能はざるのみならず、須く深重の注意を要するものなり、

先づ其の注意すべき要點を擧ぐれば、風土、氣候、習慣、體質、經濟の諸點につき考究を要するなり、先づ第一に我が國の風土、氣候、習慣、體質、經濟につき考究し、第二に現在自分が住居せる所の風土、氣候、自分の習慣、體質及び、經濟につきて考究し　而して學理上此の諸點に適ひたるものを撰びて施せば、衣食住の改良は完全なることを得べし、然而して此の如き完全の改良は全く理想に止るべきか、否々決して難事にあらざるべし、注意を怠ることなくば爲し得らるべきことなり、只世人は衣食住の改良といへば全く現在のものを打ち棄て、現在のものより縁遠き事を爲すにあらざれば改良の實を擧ぐるにあらずと思ひ、又或は金錢を非常に費して外觀の美を裝ひたるものにあらざれば改良の實を擧げたるにあらずと誤解せるもの多かるべきを以て、隨て余が完全の改良といへば、頗る費用を要して、現在のものと縁遠くならざれば不可なりと誤解せらるゝもあらん、若し此の如しとせば、完全の改良とは只理想に止るべきも余が謂ふ所の完全の改良は決して此の如きものをいふにあらず、余は日本人今日の衣食住中既に完全せるものも少からずと思ふなり、故に今日の衣食住に學理上の注意を加へたらば、完全なる改良は決して遠きにあらざるべしと思ふなり、

注意すべき諸點をざつと述んに、先づ食物のことにていへば、我が國の風土は四周環海にて温帶を占め居る故、歐羅巴大陸の四周環海にあらずして寒帶に傾在せる土地と同一にせんことは思慮なきことなるべし、彼は多く肉食する必要あれども、我は歐羅巴程肉食する必要なく、寧ろ歐羅巴人の

如く肉食すれば風土に適せずして身體を害することあるべし、氣候についても我は温暖にして彼は寒冷なり、習慣は我は先祖以來穀食せるに彼は先祖以來肉食を專とし、體質についても、我は穀物野菜は消化し得べきも、彼は多量の肉類を消化し得るなり、經濟の點にていへば、我は米穀は買ひ易きも肉類は買ふこと米穀の如く容易ならず、彼は肉類を買ふことは我の米穀に於けるが如くなれども、米穀を得ることは困難にしてライスカレーは彼に於て容易の料理にあらず、事情此の如くなれば我が國にては米穀を主食とするは理想に適ひたることにて之を變更する必要はなかるべし。而して米穀を主食とし、其の副食物たるお菜に至りては、宜しく肉味と野菜との取り合せを巧みになし、衛生にも經濟にも適する樣に爲すこと當然なるべし、此の取り合に至りては、衛生學又は食品に關する學問の智識を借りて考究せざるべからず、

又人々各自の住居する所の風土、氣候に至りても考究するを要す、たとへば山地に住すると海濱に住すると、乾燥の氣候と濕潤の氣候に住居するとにつき各食物を異にせざるべからず、山地の人は肉食を多くし、海濱の人は野菜を多食する必要あるべし、此の如きは一斑の例なるが、兎に角食物は何でも、風土氣候習慣體質、經濟に關係せず、何れの土地何れの人に於ても滋養物は均しく滋養物なりと思はゞ大なる誤りを生ずべし、食物は風土、氣候、習慣、體質、經濟に依りて滋養となるもあり、ならざるもあり、故に能く考究して、各自の家庭に適する樣に爲せば完全なることを得べし、

（以下次出）

女禮心得草（六）

日本女學校禮節助教授　大谷喜代子

第二　最敬禮のつゞき

このくはしい致し方につきましては、世間刊行の女禮式とか和洋禮式とかいふ書籍にも一寸は出してありますから、禮式のけいことといひますと、直に此仕方から敎へる樣になつて居ります、が是では實際に執行する適當の作法の敎授法としては、大きにまわりどほい事であります。

女禮の心得草には初めに上ても宜敷いのですが、實際には、第一番に日用調度について、其取扱ひの實習をいたし、夫から日常の飯のたべかたや、御膳のとりあつかひといふやうに敎授しなければなりませんので、其以上は次第をたてゝ、來客の送迎から馳走までも、女として知らなくてはならないふしぶしをけいこ致しますのが、實際に適當の敎授であります

と申しましても、いまだ私しなどは、女禮の初學者でありますから、其順序もよくはたてかねます、そこでむかし風な敎授法のことをもすこしは取まじへまして御話し申す事に致します。

實際に適切な女禮式の敎授法は宮内省につたはつて居ります禁中の禮法と、軍人社會で用ゐねばならぬ伊勢家の禮式と、眞正の小笠原流といふ近世の禮式と、夫に倶ふ禁中の料理と、臣民必用の料理とをすつかり知り得た者でなければたてる事は出來ないのであります、以上の禮式と料理とを知つて居る方について御聞になりますとわかります。

これから通常に行なはれて居ります仕方を一つ御話しいたしましやう

あゆみやうは、前條にのべましたとほりで、拜禮をいたします所に達しました時に、左右の足をそろへまして、さて左の足を右足より半足あとへ引まして、左ひざよりひざまづきます、次に右ひざをつきまして、左右の手はひざのまへにつきまして、右の手と右ひざを共にひきながら、かゝとのつまだてたるのをおろし、又左の手と左のひざを共にひきながら、かゝとをおろします、つぎに兩手の大ゆびとひとさし指とを合せるやうにかまへまして、ひざぐちのひらきませんやうに、兩肘でひざをはさむほどにしまして、手をぴつたりたゝみにつけまして、えりの見えませんやうに頭をさげて、はなのおほゆびひとさしゆびの合せめに、はいるほどにかほをたいらにさげて拜禮をいたしますのであります。

産所式

東京女學館講師　有住常子

鼻ひねの緒の事

鼻ひねの緒とは、小兒生れて一七夜までの內、鼻ひる數をむすびて置く物なり。

○緒の長さ二尺八寸程にして、白ねりにてぬひて內にわたを入れて、兩のはしを、細く中ふくらにぬふあり、

○鼻ひる數は多きほどよしと云ふなり、鼻ひるとは小兒のくさめする事なり

結の糸の事

むすびの糸とは白糸六七筋を左りよりにして、長さ一尺三寸ほどにしたる物なり、一七夜の間、小兒のはなひる數を結ぶなり。

○一七夜の後鼻ひねの緒に其數をうつして結ぶな

り。
右にて産所の用意の事はおほかた知らるべし、
つぎには湯始のことを略記すべし。
湯始の事、小兒うぶ湯の後に始めて湯あびする事を湯始の祝といふ。
○初めてかみそりをあつるを、うぶぞり、剃髪の祝といふ、うぶぎぬを初めて着するを産衣の祝といふなり（貞丈雜記）
其湯始といふ古例をあぐれば
（百練抄十二）建保六年十月十日中宮御産皇子懐成降誕云云十一日皇子御湯始也
（同十六）建長元年五月廿七日戊戌大宮院御産皇子廿八日己亥皇子御湯殿始也
いまは湯始の祝といふ事を知る人、中より下にはたえて、只うぶゆの事のみをいふやうになりぬ、この湯始の御祝は必ずあるべきことなり。

だいどころ

割烹學校講師　石井湧太郎

豆腐料理もまだ〳〵澤山ありますが余り豆腐ばかりではあきがきますから漸時中止として他の日用總菜並に手輕な料理法を少し述べませう、

椀物の仕立樣

輪切玉子、みつばせり

玉子を厚鍋に入れて湯の少し暖まり頃から、そろそろ掻きまはすのです時間は大概十五分から二十分位で茹ります、なぜ掻き廻すかといふと黄味を眞中に置く爲めです、放つて置くと片よりますから小口切にして黄味が眞中に在りません夫れまで茹上つたら水に取つて殼を剝いて小口切にするのです切方は玉子一箇を先づ四つ位に切りまして眞

中の二ツを用ゐます、みつばせりは湯に鹽を少し入れて三分位茹でるので、是れは一寸位に切り揃へて盛ります、夫れからつゆかげんです、先づ鰹節を削りて沸湯の內へ入れて直に蓋をして下すのです下して二三分置きますと細微な泡が立ちます、夫れを掬ひ取つて捨てまして跡を煮汁漉でこします、其のだし五合位でしたら醬油二勺位に味りん、食鹽等でよき鹽梅に仕立一度煮返して盛ります此等は隨分手輕で美麗でおります、夫れから前に使つた鰹節の煮汁がらを煮まして惣菜に用ゐます煮方は醬油に砂糖で煮ればよろしいのです、又二番煮汁といふのを取ります一度取つた跡を又水を入れて煮出すのでこのだしは煮物などに用ゐます、三番煮汁ですか、そうは取れません、



ナイアガラの大瀑（口繪參看）

永潜生

世界第一の高山と云へば、亞細亞のヒマラヤ山を推すべく、世界第一の大河と云へば、南米のアマゾン河を數ふべし。而して世界第一の大瀑と云はば、何人もナイアガラ瀑布と答へざるを得ず、ナイアガラの大瀑は、北米合衆國の東南に位せるシユペリヲル、ミチガン、ヒウロン、エリーなる四湖の水、相集つて、ヲンタリー湖に注ぐに當りて、一斷層を落下するが爲めに、此の瀑布を現出するものにして、實に世界第一の大湖の水（四湖を合せ

ば）溢れて世界第一の大瀑をなすことゝて、其の壯觀、迚ても筆紙の盡くす所にあらず、湖水の瀑に入らんとするや、先づ五十尺以上の急勾配を有せる、十町許の急坂地に注ぐを以て、急流激湍水勢箭を射るが如く、剩さへ大小無數の巨巖島嶼、其の間に横はれるありて、水はこれが爲めに、愈々怒激し、玉と散り、氷と碎け、終に分れて二大瀑布をなす。右なるを亞米利加瀑となし、左なるを加奈陀瀑と爲す。前者は、幅千六十尺、高さ百六十七尺、小にして突出し、後者は、幅三千十尺、高さ百五十八尺、大にして彎曲し、其の形馬蹄鐵に類するが故に、一名馬蹄瀑と稱せらる。之を吾邦第一と稱せらるゝ那智瀑の、巾十數尺、高さ僅かに八十尺なるに比すれば、其の壯觀思ひ半に過ぐるものあらむ。

此の大なる瀑布も、今は公園の一部となりて方の遊人咸な此處に集まる。人一度足を此の園に入れんか、鼕々轟々、百雷の一時に振ふを聞かん。而かも近づきて之を見るに及んでは、正さに是れ天工の至大、神斧の至妙にして、猛り狂へる水は、天地も撼かんばかりの音たてつゝ、瀑壺に向ひて直下する勢、悽まじとも、すさまじく、實に銀河天際より落ち、玉簾空に懸るの趣きあり。人をして神逝き、魂戰かしむ。

斯く多大の水量、高所より落つることなれば、其の力は非常なるものにして、隨つて或學者は、此の力を應用して、水力電氣を起さしめ、之を種々の事業に使用せんことを企てしことあり。若し此の計畫にして、實行せられんか、世界第一の大瀑は、同時に、世界第一の大勢力を起し、世界第一の富源となるに至るべし。

又た昨年の西字新聞に見えたる所によれば、或冐

險家、而かも一婦人は、堅牢なる桴を造りて、自から此の中に入り、難なくこの大瀑を流れ下ちしと云ふ。西洋人の大膽なる、誠に驚くの外なし。吾人は敢て如斯暴虎憑河の擧を喜ぶものにあらずと雖も、然れども眞摯なる冒險心は、偶々發して、クライブ、ヘスチング等の、印度征服となり、スタンレー、クルーゲル等の、亞非利加に於ける偉業となりしを思はゞ、我は切に、未來に於て、賢母たり、良妻たるべき、吾が讀者諸媛の、少なくとも、如斯き元氣を以て、二十世紀の活舞臺に立つて、優勝者の位地に立たざるべからざる第二の國民の頭腦を、皷吹せられんことを、冀望せざるを得ず。由來、冒險心の尠なきは、鎖國的國民の通弊なり。「石橋を叩いて渡る」とは、膨脹すべき國民の有すべき考にあらず。

世界第一の大瀑を紹介せし序を以て、試みに世界第一の高山、大河、大湖を列擧し、吾邦のそれと比較せんか。

	外國の部		吾邦の部	
高山	ヒマラヤ山脈中のエベレスト峯	二九〇〇〇尺	新高山	一二八五〇尺
大河	アマソン河	一、三五〇哩	石狩川	一六七哩
太湖	裏海	一六九、三八〇平方哩	琵琶湖 周圍	七十三里餘

(日本全土の面積は一六一、一六二平方哩)

天然に於て、既に如斯き著るしき懸隔あり。而かも其の人口や、其の富や、其の兵力や、凡そ是等のものを取りて、世界第一のそれと吾邦のそれとを比較せば、其の相異は尚甚だしきものある也。念ふて玆に至る吾は、膨脹的國民也、世界强國の

一なりなど、空威張する時期にあらず。勉めざるべからず、勵まざるべからず。惟だ夫れ吾邦に於ては、世界第一として誇るべきもの、皇統連綿萬邦無比の國體のあるあり。嗟々吾等は向來益々、忠君愛國の美風を發揚し、以て天壤と窮りなき、此の無比の國體を世界に輝かさんかな。

閑窓茶話

YT散人

坊間に散逸せる古書古文に就き良家の心得となるべき者を抄出し本號より次第に掲載することゝせり唯だ此の竹頭木屑の談萬一にも以て良家諸嬢の令徳を補綴するに足るあらば洵に編者の幸なり

◎子多きは喜ぶべし、

平判官康頼の物せる寶物集に、左の一節あり

後世までも寶となるべきは子なり、秦の良郭と阿用子と、二人を閻魔王宮に召して、罪の輕重をたゞされけるに、良郭は子を持ちたる故、冥途を吊ふべきものありとて、さし置かれぬ、阿用子はあと吊ふべき子なき故、うかむべき緣なしとて、忽ち地獄へ落されにき

又佛阿難を具して道を行き玉ふに、淺猿しき餓鬼の心地よげに舞ひたのしむを、阿難佛に問ひ玉へば、佛のたまはく、先の世にこの罪業により、あさましき餓鬼のむくいを受くれど、子が追善をなしける故に、樂みを受くるぞと

而して之を釋する者曰く

康頼は俊寛と共に流されたりし人なりしが、鬼界が島よりゆるされ返されたる後に書れたる物ゆゑ、寶物集一部始終は、甚だ道心ふかく聞え

ける、中にも此等の事を出されたるは、子たるもの丶親の冥途を思ひ遣る、追孝の志をも教ゆる道理にて、甚だ善事なりと云ふべし

如何にもあと問ふ人もなきものは、今の世にも寺の墓の石塔を取り除けて、溝のはたの石垣とし、五輪の名も漬物のオモシとなるを見る事あり、子孫もなければ、先祖の餓鬼も躍るときはなかるべし

されば子寶も、寶あらざるにあらねども、現身に三惡道の因縁もきれて、永く生死をへだてたる、無上寶珠の名號と云ふ寶物こそ、眞の寶なり、寶の山に入つて、手を空しくしてかへる事なかれ

持つべき者は孫子なる哉（山海里）

◎精進怠るべからず

精進の義に關し

大經には人有信慧難若聞精進求とも云ひ、勇猛精進志願無倦とも云ひ、天台道師は法界次第の中に、身の精進、心の精進てふ事を明にし、禮拜讀經等に怠らぬを身の精進と云ひ、作願觀念等に怠らぬを心の精進と云ふ、是れ出家の事あり

故に在家に於ても、六親眷族等の忌日には、常の日と異りて、殊更に法事勤行を修ずるが故に此日を精進日とは云ふ也

別して佛を禮し經を讀む日なるが故に、手を洗ひ口をそゝぎ、衣裳も汚れなきを着するにつきて、戒行なき在家にても、其の日は佛制を守りて魚鳥の肉も食せずして、佛前をはなれず、或は花を棒げ、香を燒き、念佛して法事を行ふ也

然れば精進日に當りて、今日は魚肉もくはぬ日なりと心付きたらば、精進と云ふ日柄ありと思

ひて、佛前に近づき、法緣にしたしみて、家内中むつましく、後世のいとなみを爲すべき也

魚肉さへ口にせざれば精進したりと心得ゐるは、大なる誤り也、又た佛事に就ての精進の名とも知らずして、念佛勤行を修せんとする前日には、精進入りとて、わざ〳〵魚肉を食ひ、とりわけ口中を不淨にして、法事をつとめんとするが如き、奇怪千萬の馬鹿者とぞ云はめ

讀み去つて漫に忸怩たらざる者、方今天下幾人かある

之を要するに、精進とは、無雜の故に精なり、無間の故に進なりとありて、餘念をまじへず、專ら行をつとむるを精と云ひ、行住座臥懈怠なく、進み〳〵てつとむる也

良家の子女、之を服膺せざるべけんや（山海里）

◎濫に飲食を不可勸

法事供養の座にて、無理に客に飯や酒をすゝむる者あれど、是れ大なる癖事なり

飲食を過すは、病を生ずる毒の第一也、それを强て無理に飲食させんとするは、大なる料簡違なり、それ程人にすゝむべき飯酒あらば貧民に施さんと思はゞ、法事とも供養とも云ふべき日柄の心得ならんに、施行一人に三錢又は五錢の限を定め、施しの高き者もきはめありて、其の限りに漏れて來る者には、歎き乞ふと雖も、叱り去らしむる者あり、それには引き換へて、最早滿腹致したりとて、辭退して椀をかくし、盃讓る者に、無理に推し付くる如くすゝむるは甚だ可からぬ次第と云ふべし

而して又た來客の方にては、法事の供養物なれば、殘し置くは勿躰なしとて、イヤ〳〵ながら膳のまはりにある殘物までも、悉く食ひ盡し飲

み盡して、膳をあげさする人あり、これも大な
る間違なり、少しにても膳にあまる物あらば、
法事あらんと尋ねあたりて、其の門に立つ乞食
饑餓の者に、其の餘りの流れ及ばん事を喜び思
ふべきことなるに、己が腹にさへ入れ終れば宜
しと心得るは、是れこそ勿躰なき事なり
獨り供養の席とのみ謂はんや、社交舞臺の人深く
留意するを要す（山海里）

大和めぐり

井上頼文

八日（午前の記者は石川氏なり）

八日、同じ旅の宿りにはあれど、伊勢としいへば、何となく心強く思はる。夜あけて朝日子の影水平線上に出づる頃、漸々眠を覺しつ。朝飯をはりて、正午迄の自由散歩を許されたり。今日は午後の滊船にて歸館せんとす。げに思へば今日は修學旅行最終の日なりしなり。こゝに初めて知られぬ。昨夜來同行者の憮然たりしは、今二三日を猶豫あれかしとの爲ならむとは。されど今更せんすべなければ、許されしまゝに公園に遊ぶもあり。木太刀を買はむとて出づるもあり。病院にゆくもあり。跡にのこりしは、僅に五六名に過ぎず。しかもこたび旅行にて足よわの名を取りし人ども、つれ〴〵なるまゝに兎やせむかくやせむなど評議まち〳〵なり。中に肥滿の大男、おのが足のにぶきをうしと歌ひし男、横ざまより無遠慮にも人の批評などし初めたり。たれは思ひしよりもつよし。かれは吾より弱かりきなどおのが事いさゝかも言はずて、人の事さま〴〵にのゝしりさわぐも、いと興あり。又一人あり靜に口を開きていへるやう、

我等生れてより以來、様々の旅行はせしかど、今度程面白くて、身に利益ありしことはあらず。されど吾々が服裝の不完全なるは、いたく口をしきことあり。あるは支那人と見誤られ、あるは賣卜者とみなされたるなど、實に本館の面目にも關はることなりかしといふ。吾もかく思へりとて、例の肥滿の男、身にはスコッチの脊廣の洋服を着たるが、いと寒げに火鉢にすがり居て、君等僕の出で立ちを見玉へ。如何に輕げに見ゆらむ。かくありてこそ、旅は心安く足は輕きなれ。羽織袴のいでたちはわづらはしきが上に、壯士めきて、いと見苦しなど、おのが形の土木師測量師などと見誤られたるを打忘れて、いと得意に洋服の便をいひ張れり。さればこそ、君の足は強かりしなりけれと一人がいへば、皆笑ひぬ。さるにても早晩一定したきは、皇學館生徒の服裝なりけりなどいひしろふほどに、時針は十時を指せり。先の人々は歸り來ぬ。ひるげをはりて出立の用意も整へり。滊船は二時に出帆すと云ふ。名殘を櫻水樓に留めて東の方贄崎港に向ふ。時に午後一時半。此の日天氣清朗、空に一點の浮雲なく、贄崎灣頭波靜にして白鷗汀にねむれり。遙に望めば、朝熊岳は南方にそばだちて、我等を歡迎するが如し。彼の青螺の浮ぶが如きものは、志州群島ならむ。かの白鶴の翔るが如きものは、布帆の來往するならむ。とかくする程に一聲の滊笛は、白鷗の眠りを驚し、一隻の船は黒煙を吐きて來りぬ。あはれこの船。白鷗も無情の者とやおもふらむ。

八日（午後の記者は中村氏なり）

切符もとめてはしけに乘る。けふは風なく空うらゝかにして、船行にはよき日なり。本船につきたれば、人々われ先にと乘り移りて、甲板の上にい

づ。船は速力をはやめて進む。おのれはしばしあたりのけしきをながめ居たれど、日ごろのつかれにたへで、横ざまになりぬ。かくて船は、はや神社港に着きぬ。時に日は西山にかたむきて、鳥はねぐらにかへり、晩鐘もひゞきわたりぬ。月、中空にかゝりて、ほのかに海づらをてらせり。人をしてあはれをしらしむるものは、げに秋の夜の月にこそ、はしけは岸につきたり。足はなよ〳〵として神社の畷を過ぐる程、猶波にゆらるゝ心地す。船江、河崎の里をすぎて、尾上なるおべの坂を越えぬ。古市町、中之町、櫻木町はいつか過ぎけむ。間の山を下りて、宇治の里に入る。時は九時頃にや。人々足の痛さをも忍びて、いかめしくとりつくらうもをかし。樂しかりし修學旅行も、こゝに事なく終を告げたり。一同皇學館の門内に整列して、萬歲を唱ふ。

天皇陛下萬歲　神宮皇學館萬歲　（完）

花がたみ（二）

白松園主人

◎わが子をサンと云ふ事

當時の流行語として、我兒を呼ぶにサンといふは常のことなるが如し、サンはサマの音便にして、敬稱なり、我兒に附すべき語に非ず。秋サン國サン抔の語は、女親の口より出づるのみならで、男親さへ多く然るにあらずや、幼少の時より、かゝる習慣にならはしむる時は、遂にその兒をして、倨傲ならしむる者なり。たゞ人前にて優しき呼びかたぞと心得て、世上の習慣に從ふは深く戒むべきことなり。これ明に自他と、尊卑との區別を混同せしむる第一動機と云ふべし。秋チャンの如

きもサンの出來損ひなれば、これもよろしからず、何ぞ直ちに秋或は國、又は謙太郎や、の如くに呼ばざるぞ、小兒にはあるべく、やさしく云ふべしとのおもひは、所謂婦女子的考にして、横着、不遜、優柔懦弱の自然淘冶に陥らしむるに至らむ、その甚しきに至りては、東京婦人などの言として秋チャン入ラッシャイなどの最敬語を以て、我兒を呼ぶ者あり、何ぞ思はざる事の甚しき、ソウセヨといふべきを、ソウオシナサイ、ソウデハイケナイといふべきを、ソウデハイケマセン、又は早クイッテ入ラッシャイなど云ひて、毫も怪しまざる者多く、却つて正當の語を發する者を目して、田舍言葉など〻云ひて鄙しむ者の如し、嗚呼我國人の、國語を輕視するも亦甚しからずや。

◎流行語の獘

たま〳〵飜譯語によりて、新に文法上の誤りを傳ふる時は、世人多くはその獘を救ひ、そのあやまりを正さんとはせで、却りて特更に之を濫用し、傳播の毒を速ならしむる者の如し、之れ蓋し、邦人の弱點として、善惡を吟味せずして、只他人の顰みに習ふを常なる習慣の、然らしむることながら、大切なる言語文法の流獘を、煽いで熾ならしむるに至りては、學者の見識として、はた義務として、無責任の誹を免れざるべし、たとへば、今日の新聞雑誌にて、尤も目だちて、しきりに靑年學生などの、眞似をしたがる言は、

（一）此の地の産出は、より多くより能く製作せらる、

（二）彼の人は、勉强するだけそれだけ幾何の智識を有す、

（三）神ながらの道を、説敎すべく命ぜられぬ、

（四）研鑽することの、それが原因となりて、

右は僅に一二の例に過ぎず、されど從來我國文法として、此の如きものあることとなし、特に此の如き場合の文は、古來より常にかき來れる者にして此の如き變調の語法を用ゐずとも、立派に書くを得べきを、一時の拙劣なる飜譯語の流行を逐ひてわが正しき文法を書き崩すとは、何といふ意氣地なき國民の惡癖なるらむ。より多くなどゝかく、よりといふ比較のてにをはは、接續すべき主要の語なくては、更に何に比較せし者かを知る能はざるなり。何々するだけそれだけ云々は何といふ拙陋鄙俗の用法ぞ、此の語なくて、毫も差支なきなり、說敎すべしと命ぜられぬとすべきを、すべくとは何の故ぞ、思ふにこは「これ彼に對する最も適當の評語なるべく、彼も亦、決して此の評語に對して、異議なかるべしと思はる」と云ふ如き場合の中止法より誤り來れるなるべし。研鑽する事のそれがは指す意ならんも、無くて意味明瞭なり、いやみ多きこと、以上に讓らず、幸に本誌あたりには、未だ此の病毒波及し居らねど、充分防禦線を張りおかざれば、その襲來いつとも計りがたかり。

◎おばんさん

東京にては、良家の息子を指して、ボッチャンと云へど、近江國にてはオボンサンと云へり。余は初め之れを聞きて、妙なる感をなせり、何となれば余が鄉里山口縣にては、ボンサンと云へば、寺院の僧侶を呼ぶ名なればなりけり。俗に難波の葦は伊勢の濱荻と云へり、怪しむ者のおろかならんか。

◎雨月物語

上田秋成の雨月物語は、アービングのスケッチブックに似たり、その小說にして小說ならぬが如き、

短篇にして簡潔なるが如き、總て髣髴たるをおぼゆ、而して毫も鄙猥の語なき方は雨月物語の方勝れり、我新進小説家連中は、などてかゝる方面に筆を染めざるぞ。

◎斷腸

誰にかわりけむ、いとをしの愛兒を失ひて悲みながら

トンボ取り今日はドコマデ行ッタヤラ

紀の貫之の「ある者と忘れつゝなはなき人をいづらと問ふぞかなしかりける」の詠よりも一層斷腸の吟、感愴無量と云ふべし。

◎憐れの娘の話

鬼の子よと云はるゝ簑虫も、ちゝよ〳〵と泣くらむは、いかであはれならざらむ。こゝにそれよりも憐なる人の子の話あり。おのれいにし世一年の頃東都に在りし時、親しきしるべのもとに宿れりけるが、その家のあるじ夫婦の、日頃親しく交はれる、手塚某といふ人ありき。教育もありて身分も賤しくはあらざりけり。その娘にすぎとなんいふいと愛らしき少女ありけり、十一歳ばかりにやありけむ、五つばかりの妹を伴ひて、暇ある毎に、我宿のあるじ夫婦のもとに遊び來にけるがその容顔の美はしきこと、まことにたとへんに物なかるべし。日頃經るまゝにおのれにもいと親しみて、そのあどなき物語の、床しくらうたげなる花の木陰に清水流れ、銀盤の上に白玉据うる心地して、此時はげに一點の塵さへおかぬ神の子なりき。されば日頃親しかりし我友は、そをめでゝ、あれは神の子、只いつまでも浮世の風に當るなとぞ、戯れける。されど余は、その母に疑ひなき能はざりき、その母は或は此の娘の幸福を、圓満に保護すべき資格ありや否やを、疑はざる能はざり

き。斷雨殘雲、か往きかくゆきて、早くも五年の星霜を經にける今年きさらぎの頃、圖らずも驚くべき消息を耳にしたるなりけり。氏なくして玉の輿にも乘らるぞといふなるに、そのさがの怜悧なるからは、いかならむ家の令室と、崇められてもふさはしかるべき彼の少女よ、今はいたくおとなびて、さこそは美しき孃となりつらめなど、折にふれては思ひ出づることもありしに、こはそも、去る二月の東京新聞は、俄然として、我懷舊の夢を破りにけり。そをいかにと聞くに、彼が父は負債のために產を傾け、男の童を携へて、妻に別れて田舍に行き、妻は女をゐて東京に下宿屋を營みけるが、彼の娘すゞ子の、漸くひとゝなりて妖艶たる姿色の、われながらすて難き風情あるを種にして、遂によからぬ事を敎へ、操を汚すに至りしが、まだ少女心には、母の巧みは知らずして、人を損ひ身を傷うて悟らずとなん。あはれさしも、よき人の指導をうけなば、萬人にも立ち勝りて、大和撫子のにほひめでたくありぬべきものを、一朝鬼々しき母のために、うち摧かれしこそあはれなれ。そのむかしを知りぬるおのれは、忍ぶにもなほ袖ぬるゝ心地してなん。

◎落首

余先年、東京本所向島の三圍神社に詣でしに、例の其角が詠みし「夕立やたをみめぐりの神ならば」とある碑の側に、誰がいたずらにや

●●●●●●●●●
ゆびたてやたばひねくりの髪ならば

と書きつけたり、いとよからぬことながら、ことざまのさすがにをかしかりければ、今に忘れず。

◎習慣性

幼童の時は、壯烈の談を喜ぶものなり。忠孝節義の話を好む者なり。その父たり母たる者は、つと

めて之の氣を皷舞しおくべし、之を皷舞するには寢物語にしくものなし、金銭上の損徳などの話を耳にせし幼童は、十四五才になりて、慷慨氣節の談を爲すとも、毫も感慨を惹起することなし、之れその習慣性なくして、更に趣味を解せざればなり、今日家庭の讀本として、新聞雜誌の小說の害あるを見て、急に之れを禁ずる者あれども、視聽を塞ぐことは、到底及ぶべからず、幼より和漢の軍記物を讀ましめよ、此の習慣は今日の小說をよむことを厭ふに至るべき、根本的療治法となるべからんか、これ余の實歷談なり、その師たり親たる者、注意せられたし。

あをば（一）

藤の舍主人吾水

漲漫たる青海原、陽光うらゝかにして白鷗汀に眠るの時に於ては、仇波さわがず、魚介嬉遊し、一面さながら鏡の如くなれども、一たび風伯怒り雨師憤れば、空は忽ち小暗となり、狂瀾澎湃として岸をかみ、岩を砕き、やがては巨艦艨艟をも呑みつくさむとす。象はそのさがやさしく、稚子も之にあつきこそすれ、時に怒れば、百獸慴伏し、虎豹すがたを隱すとかや。あはれ、茶の湯に柄杓のおもきを嘆ち、挿花に枝幹の堅きを恨む姬達はさてもあるべし。やまと島根の國ぶりにや、常には美しき心操を持するも、國の變に處し義に望みては、しかすがに雄々しき氣象に富めるものいと多かりけり。往昔神功皇后は、親ら鷄林八道をことむけ給ひ、板額、巴御前は共に勇名を後世に傳へぬ。氏清、一豊の妻等もまた壯烈のかゞみとなれり。こゝに數ふれば濱の眞砂の盡くるはてしなけれど、大方の能くまねび得ぬこと多

かるめり。さればさしも高からず、而も模し易く、所謂虎を描いて狗に類するの恐なき海底の眞珠、幽谷の蕙蘭をうつしうゑて　其色香を園生のうちに匂はせんかな。

頃は、安永八年九月廿九日の夜半ばかりなりけむ、九州の南陲に位せる薩摩國鹿兒島の近邊大地おびたゞしく震ひて、山岳鳴動せり。人家ゆがみ、人畜の傷ふ事少なからず、人々驚きさわぎておめさけぶ聲、無間地獄のさまもかくやと思ひ知られたりやうやく曉近くなるほどに、少しく靜まりければ胸も落ちつきぬ。かくて朝日影、このすさまじき光景を寫し出したるを遙かに見やれば、城南一里餘り沖なる櫻島の山頂より、黑烟むら〳〵と立のぼり、またゝく中に空に棚引き、天を掩ひ照る日の光かげを失ふ。雨も降らぬに電光を放ち、雷神轟々と鳴り渡り、物凄さいはむ方なし。雲時ありて大石の空より落下することいくらといふ數を知らず、その危險なること薄氷を蹈むにも勝れり。こはいかにと皆々膽を消し、今更に天災地變のおそろしきを感じけり。もと此島は周圍七里に餘り、中央に高き山そびえて俗に薩摩富士といひ習はしき。山麓に城壁そばたち溫泉湧出し、村里多く連る。遠く隔りたるさへ運命のほども覺束なかりしを、いかでか死地に其身を安んずべき、島人鹿兒島にうち渡り、島の山燃えいでて、村落に燒け廣ごり、燒死負傷するもの夥多なるよしを告げぬされば人々の驚き一方ならず、直に數十艘の救舟を催し、必死となりて漕行きけるが、空よりは、灰砂に交りて輕石のふりかゝること雨のごとく、面を擧げむやうもあらざりけり。蒼々たる海面色かはり、烟は底より湯玉をなして湧き上る。魚介どもの死して波上に浮べるは、散りたる木の葉

に似たり。力を盡して漕ぎゆき掻きわけんとするに、風に吹かれて漂流せる輕石藻屑等に遮られ、よろづ心のまゝならず、いつ着くべしとも見えざりき。さる程に十日ばかりの間晝夜の區別なく、焼火をかゝげ、松明をともしてふためき合ひ、殆ど四千人の命を救ひけるが、島の内にて無慘の最後を遂げたるもの、また山をなせり。さてこの島と陸との間なる瀬戸といへるは、古來鯨の群る所なるが、砂石に埋もれて、ひた續きに續きたりとぞ。いかに其さまの甚だしかりしを忍ぶに足りぬべし。されば其處にて船を損ひ命を失ひしもの實に多かりけり。かゝる間におひさらばひたる身を以て、あまたの人を救ひたる勇婦こそ現れたれ、そは、かの島鳴瀬戸の内藏とかやいふ者の母にて、よる年なみは八十九歳、髪には霜を置き、腰は梓弓のやうなるが、心根はいと剛くしてなかな

か壯者も及ばぬ程なり。かひがひしく城屋敷なる婦女どものおきさ迷ふを引連れ來り、少し許りの糧を備へ、靜に小舟に乘込ましめ、自ら艫をおつ取て沖の方へと漕出しぬ。されど、輕石の飛下る事未だやまず、海また危し。前面猛に向ひ、後面虎を防ぐが如くなるに、身體疲れ、氣力衰へて進退こゝに谷まりたり。たゞ人を擁護せんとするの赤心は、海神も、いたく感應ましましけむ、それより海上穩かにして、風波起らず、五日の間彼所此所を漂ひめぐり、飢餓に陷ることなく、遂に鹿兒島に着し、一同の玉の緒を繋ぎ止めにければ、人々老媼の沈勇に舌を捲きたりといふ。幽鬼を信じ靈魂を恐るゝは、既に過去の歴史となりぬ。わが影を見て逃げ出だしたる懦夫も、また一睡の夢と化せり。されど、徒に拔山蓋世の勇婦たれと強ふるにあらじ。其行爲を習はむより、

むしろ精神を學ぶに若かざるをいへる也。さるを全く蠻勇に甘んじ、人にをゆびさゝるゝは、さても口惜しき次第ならずや。すべて、女子にふさはしからざる振舞はいと賤しきものから、あまり女々しく、義に臨みてためらふも卑怯のものぞかし。故に平素うるはしき心を養ふと共に、義を見て進む眞の雄しき氣象を養はざるべからず、是其時に當りて、とみに養ふ事能はざれば也。



樂園

朧夜

小畑いく子

心ともなく足のまに〳〵さまよひ來にける諏訪山の上、半過ぎての春の夕、ねぐらにや歸りけん、鳴きふるしたる鶯の聲もやみて、花かと見ゆる若葉の枝に朧にかゝる月の影も淡し。

　むかし見し影もやあるとながむれば
　　月もおぼろにかすむころかな

と、うち誦しつゝ歩むともなく行くほどに、ほのかに聞ゆる琴のしらべ、誰がすさびにか心にくや今日此頃のたれこめて春の行方もしらぬ我は、そも何の爲か、アヽなつかしの昔や、戀しの昔や。拙き手ぶりをも厭ひまさで、兄君ののぞみ給ふるまゝに琴とり出づれば、離れて聞くこそ興あらめと立ち出で給ひしが、此わたりにてや聞き居給ひけん、ある時は手を携へて共に遊びしもこのわたり、若芽小枝手折りつゝ、歸らば瓶にさしねなどの給ひしも此山なりき。山はとこしなへに動きなく、草木も時を違へでもとのまゝながら、はかな

きものは人の命ありけり。
山も海も、ありし昔のそれながら、我を二なき者やうに、愛でいつくしみ給ひし兄君の、面影のみはまのあたり去りやらず、なつかしの御聲は耳底に殘りて、濱の松風小笹の露にも、そよとばかりは驚かれながら、夢路ならでは逢ふよしぞなき身こそつらくかなしけれ。
住居を移してよりは、再び來て見んとは思はざりし此わたり、今霄はいかなる心のくるひにか、迷ひ來て見る昔の面影、なか〳〵に涙の種なりな。げにや、行く川の流れは不絕、しかも本の水にあらじかし。彼方の茂みを透してほの見ゆる圓窓こそ、戀しき兄君がむかしの書齋なりけれ。その世ながらに燈火はほのめけど、今や誰が彼室のあるじなる。彼窓よりさし入る月に、灯火ふきけちて琴かきならしゝこともありき。おぼろげながら、

月影に、それぞとしるき窓外の櫻、あだなりと名にこそたてれ櫻花、汝はことしも咲きけるよな。一年汝が蕾の少なかりしを見まして兄君の、ことしは數ふるばかりもなき花よとの玉ひければ、わな僞をなの玉ひそ、數へ盡せぬものをと、さかしらだちていひし時、さては蕾をかぞへ見しか、うたてのわざや、如何なればさは幼ぞと少しはゝゑみましゝが、さればこそうしろめたけれ、たらちねの親の形見は只一人なり。汝も吾をや慕ふらん、吾もしばし放ちがたきをと、の玉ひつゝ手をさしのべて、彼櫻の一花摘みて、我頭にはさし玉ひけり。何とはなしに名殘惜げに見え玉ひける。思へば永き別れとなるべきしるしなりけんかし。
其はゝゑみ、其さゝやき、今は幽明道をことにして、慕へど戀へどかひなきをいかにせん。遂に

堪へ得ず、木立に據りてよゝと泣けば、無常を告ぐる一陣の風、花をさそひて颯々たり。

小說 桃源記

清水橘村

上野澄田の櫻は何時しかの雨に散らされて、花洛の貴賤車馬を下り、近き郊外に杖曳く今日此頃、咲くは躑躅か花菖蒲、柳の糸ものび〳〵と吹く風さへも長閑なる空には、白小雲のさへぎる影も無く、小さき蝴蝶の二ッ三ッ、人馴れて飛ぶ南縁の暖かなる光を背にして、漸やく落付きたる室内の飾りを見上つゝ所在の日和ぼこりに樂しみ居るは、此家の主人春野松雄が新妻の母親、四十路の坂を越えて間も無き年配なれど、若き時よりの艱難辛苦、深く刻みし額のわたり年浪の三つ四つ寄せて見ゆるは、日に燒けし顏の黑き故のみにはあらざるべく、身には田舍縞のごり〳〵したる綿入暖かく着こなしたる、都なれぬは野暮らしけれど、夫も古鄕なる所は矢張武藏の國神奈川の山中八王子への往來も名許りの街道に添ひて、流れは早き相摸川の水に、大根洗ひし名殘なりと覺えて懷し。

折から表に馬車の止まる音して人の尋ね來し氣合せしが、合の襖をさらりと開けて入り來りしは主人松雄の父子爵、身には此母等の見も知らぬ絹物滑に卷きたる時計の鎖にても中々容易の黃金にてはあるまじくぞ覺えし、鼻下八文字の髭嚴めしく双々たる眼光人を射ること鋭ければ、口元には云ふ可らざる微笑をたゝへて立たんとする母親を止め、イヤお母樣其儘にお居でなさい、儂もその溫な日和へ御中間入りをしますぢやで、と後より逐いて來し新妻愛子の手より無雜作に座敷團取りて座を占むれば、母親お杉は急がはしく膝の小猫を

下して座をすべる、横手よりお母様お土産を頂戴致しまして、と何やら示す娘のお愛、子爵は今更愛子の艶麗しき容顔を眺めて、何ね今日は幸ひ日曜で暇でもあるぢやで、儂夫婦とお母様や君いもの等と、茶でも飲んでゆる／＼話をしやうと思ひ、途中六藏に云付て茶菓子を買つて來ましたんぢや、今家のお新も見えるぢやらうから、さうしたなら茶を入れて貰いませう、お新も途中で何か誂文て來ると云ふたから、夫迄待てる事にして時に春雄は居りましたかい、何、畫を描いて居ると彼の畫描先生にも困つたもんぢや、そんなに勉強せずと少しは世間へ出て見ろと云ふのに…………まア此處へ來いと引張て來て貰ひなすぢや、儂からよく說得してやるぢやに……夫れで今日は儂等三人の雛祭だから、そこへ生た人形を二人並べて置いて、自酒の代りに茶を飲んぢやによつ

て、お前も用が濟んだら是方へ御出で、……ナア、お母さん春雄はあの通りの變人ぢやから何卒面倒を見てやつて下さいよと、子爵は磊落の氣性とて邊り憚らぬ大聲なり、母親お杉、恐る／＼膝を進ませ、貴所飛んでも無い面倒を見るなんて、愛や私こそ御面倒を見て頂か無くては成ませぬ、何を申せあの通りの田舍者、夫れに學校へ遣りもせず遊戲と云ふものも何一つ覺えて御座りませず、漸く奥樣のお仕込で少しは物も讀める樣になりましたさうで御座い升が、根が愚かしい女で御座いますから、人樣に對しても誠にお恥かしい許りぢやありません、貴所樣や春雄樣の御名にお掛るやうな事は有はしまいかと思ひますと、實に御氣の毒でなりませぬ、元々無學文盲の者を御承知で御貰ひ下さつたのには相違ありませぬが、釣合ぬは不緣のもとゝやらで、此先萬一のとがありはしま

いかと思ひますのも年老の癖でがな御座いませうが、何卒末始終御見捨て無く御面倒を見て頂き度いので御座います、ハイ私もこの様に御親切にして下さい升のではほんとに天へも登つた心地、亡夫が繁昌で居りましたなら、さぞ喜びましたで御座りませうと、しみ〴〵物語るも子を思ふ親心、亡夫金作繁昌せし頃は村では莊屋まで務めしものなれども、老主人の貴族院議員子爵と云ふにたぢろぎたるのも、田舍者の正直なる心あるべし。いや然う云つちや困る、何も百姓の子ぢやからと云つて人に高下の在るものぢやありません、幾ら立派な身分の者でも心掛の賤しい奴もあれば、貧いし生活をして居る者でも人として耻かしく無い賢人の様な人もあるぢや、愛子が僕の家へ奉公に來た時、田舍者だと聞いて通り拔けの惡いお猿さんぢや無いかと思つたぢや、アハ……處がどうして何をやらせらても目から鼻へ拔る樣な働き振り、中々十二三の小娘共思へない位、僕より奥の方が早く目付たと見えて、晩酌の時よりには種々僕に話して聽かせた者ぢや、夫で餘り利口な奴ぢやからと云つて、新が何か一つ二つ習はせたさうだつたが、わしは一向そんな方には關係が無いものぢやから、別に氣にも止めんで居つたら、其内春雄が愛を妻にして貰ひ度いと云つたとやら云はれたとやら、何しろお阿母の氣に入つて居る愛子のことぢやから一も無く同意したと見えて、新は大變力瘤を入れて僕を說得する譯でした、僕も何せ彼に世話にある身體ぢや無し、彼もちと變人の方で兄貴の壯健で居る内は自分の嗜好に托せて置かうと思ひましたで、早速承知してやつたら、同棲に成る當人同志よりは、奥の方が大喜び、新も女の子が一人欲しい〳〵と云ひ居つたので、今ぢや全く自分の娘

の氣で居るやうぢや……、儂も亦段々話して見ると中々賢さうで、近頃珍らしい娘ぢやと思つた位春雄も自分から好んで求めたもの、奥だとて矢張嗜きなしかも自分が腹を痛めた子の様に思つて居る愛い事であるこつぢやから、まあ〳〵何事も無いのは儂が保證するで、おッ母さんも安心して居なさるがい丶、夫れに何時までもその様に他人行儀では面白う生活すとも出來ん、又私の方でも改つてならむから、もうそんなことを云つて下さるなと。子爵も何時しか母親の話しに釣り込まれて眞似目になりし折から、人力にて馳付けしは春雄の母親お新夫人なり。

此家の住居は都と云へ市を離れし小石川小日向の片邊りなれば、結ひめぐらしたる杉の垣根の青々と、萌え出し草も緑の色濃くして程隘からぬ庭のとりなし、いくらか自然の風趣を備へて、吹く風も靜かなれば和氣堂に滿ち、靄然として樂むめり。籠の加奈利亞鳥、嬉春の天樂を囀ること繁く、草葉の胡蝶佐保姫の羽袖を返す霓裳の舞、やがて春雄も來りければ、新らしき八疊の間へ五鼎になりて樂しき春を送らむとす。ヤレ〳〵是れでお雛樣が飾られたりと、子爵の戯むるゝに、お新もお杉も共に喜び、おもはゆげに座り居る愛子の方を顧みて、お新はにこ〳〵と、ねえあなた、こう二人を並べて置て云ふのぢやありませんが、愛子も本眞に立派な奥樣にお成りですね、矢張私が見立た丈ありますでせう。何お前が見立たのぢやない春雄が見立たのぢや、そう云へば春雄は目が高い、又愛子の見立てられたのも傑いぢや、いえ春雄も見立てましたらうけれど、私の眼鏡はそれより先に屆いて居りましたのです。と夫婦のものが爭ふ、これも親子の愛情あるべし。彼方の母親は又春雄

の男らしき風采と、娘の一際立優たる有様とを眺めて嬉し涙に掻暮れ、これは偏に奥様の御恩なりとて心の内に手を合せ。ねー奥様、今も大旦那とお話し致しましたのですが、私はほんとに貴所様方の御恩を思ひますと、斯うして居りますも實に勿體無いやうで。とまた女氣の眞率に、身分の賤しかりしを耻かしく氣の毒がれば、限り無しとや春雄は引取り。いやおッ母様先夜も話しました通り、私等は決して身分の高下を彼是云ふものぢやありませんから、その様なことは仰つしやらないで下さい、夫れに今度だとて立派な親元が立つて嫁娶たのですから、世間に對しても決して耻かしいことはありません、愛子だとて中々得難い婦人です、貴母は未だ愛子の人と爲りを御知りあさらないからでせうが、今ぢや婦人一通りの學問はありまするし、心掛も尋常ぢや御坐んせんですから、何處へ出ましても決して引を取る様なことぢや有ません、ですから貴母も餘り心配をなさらん方がいゝです、と優しく云はるれば、思はずほろりとする愛子の方へはお新が膝を進めて。愛子最早道具なども片付ましたかい、あう左様かい、夫れに婢女を雇はなくちやあるまいが、本宅にはお霜もお秋も手が明いてゐるから、一人位は是方へ寄越してもいいのだが、何んだか勝手が違ふやうで、お前も否だらうし、來るものも變でせうから、誰かお中婆さんにでも頼んでやりませう、何お前一人でするつて、それには及びません、お前がそこらへ出歩いてる様なことがあつちやおッ母親や春雄の世話が届きませんから、大急ぎで誰か目付て貰ひませう、種々お世話になつて濟みませんて、何です親が子に盡すのは當り前ぢやないか、今に私達が世話になるのだから、今の中澤山世話して置

かなくつては其時我儘を云ふことが出來ません、オホ……、お前のことだから如才もあるまいがね、おッ母親をよく面倒を見てお遣りなさい、便りにするのはお前許りだから全く心細いわねと。八年も手鹽に掛けて我子の如く育てしとて、親身の親も及ばぬ眞情、それも此心があればこそ斯くも樂しく生活も出來るなれ。

馳走の何彼程よく按排されて、箸とるさへも隔てなき語らひ、如何なる平和の神の宿りますらむ。日頃は議會にて雄快なる辯論に朝野の人々を恐懼れしめ、天晴一黨の首領と仰がるゝ春野子爵も、今日は春の日の温暖なる家庭の光に浴して、心に十二分の愉快を感じたりけむ、磊落なる而も巧みなる談笑を試みて家族の頤を解き、已れも笑壺に入りて日の傾くも知らず顔なる夕暮方、夫人先づ御暇と云ふに驚きて、子爵も座をば立たせ玉ひ、人々の止むる聲を程よく否みて、夫れと云ふ指圖を承り、馬車は江戸川邊の邸に向はれぬ。

蘭燈の影温暖き春の夜、うつし出すは春野畵伯が家庭の平和、戸毎に巣くふ軒の燕の雛も飛び立つ春の空、棚引く霞長閑なる海原は、そもやいかなる谷間の苔の雫なりけむ、細き一條の水の源こそ、波靜かなる愛子が心にあらざらめや。清きは流れの石にも似、崇きは寒梅の花一輪、香りも深く咲きいでしによるぞかし。さればお杉が幸福も愛子がやさしき力なり。子爵夫人の喜びも、又愛子がめでたき力なり。春雄が家庭の樂しみ、愛子が出世、皆愛子が心のうちより湧きし春の水、想ふ、愛子は此人々に家庭の平和を味はせむが爲、天堂のそれより下れる神の化身にあらざるなきかを。（完）

村岡勤王談（續）

森林黑猿

村岡等は日數を經て江戶に着し、町奉行所の假獄舍に投せられ、軈て一々評定所に呼出してお調べとなりました、寺社奉行松平伯耆守、大目附久貝因幡守、町奉行池田播磨守、石谷因幡守等立合ひ、留役は松田新之亟、横浦作十郎でありました、お調べの作法は、熨斗目着用以上の者は薄緣に、以下の者は板椽でありますが、先づ鵜飼父子、次に梅田雲濱、頼三樹三郎と次第に調べが濟んで、其次に村岡で厶います、村岡は屢々演ぶるが如く女ながら比類稀なる男まさりの女丈夫であつて、年七十を越えて囚屋の月に憂を見つれど、心は眞に鐵石の如く更に衰へたる態もなく、襠の褄はづれしとやかに、怯めず憶せず薄緣に坐を占むれば、松平伯耆守村岡に向ひ

「近衛家の老女村岡とは其許に厶るか」

と懇ろに問へば、村岡は片頰に笑を含みつゝ

「御意に御坐りまする」

と應ふる姿を屹度見て、松平伯耆守

「やゝ其の襠は、畏多くも葵の御紋散し、それ脫がせよ」

と下知すれば「ハッ」と應へて一人の同心、立掛るを村岡は靜かに押止め

「ア、これ、卒爾の振舞めさるな、御手前達の手を觸れらるゝ衣服に非ず」

同心「お掛りの仰せで厶る」

村岡「然らば伺ひまするが、此所は不淨の場所に厶りまするか」

伯耆守「如何にも此所は不淨の場所、御紋服は恐れあり、其故襠は脫いでよからう」

村岡「オホ……見ますれば彼方にも其の御紋付の御上下……お脱遊ばしますか」

伯耆守「エッ……サア是は拜領の御上下、大役を承はる某苦しうない」

村岡「では拜領なれば苦しうないと仰せられまするか、妾とても私しには用ゐませぬ、辱なくも當御御臺所さま、薩摩より御輿入りの砌、御供申上げたる此の村岡、歸洛の折御暇乞ひ申上げましたるに、御手づから此の葵の御紋散しの裲襠を下し賜はりしを、身の守りとも存じて彼樣に着用致して居りまする」

と辨舌爽かに演べたので、人々返す詞もありませんで霎時は役人們顏と顏とを見合せて居りましたが、稍あつて久貝因幡守目を瞪て

「長々の道中殊に獄中にて髮上げは叶ふまじきに、白髮の髷艶やかに結び上げたるは訝しき事よ」

と訝り問へば、村岡は再び微笑て

村岡「其の御不審は御道理ながら、女の嗜は髮貌と申すこと、老さらばひし妾も忘れませぬゆゑ、朝な〳〵下さるゝ芋の汁を溶きて油に代へ、彼樣に自ら撫付けましたがお目に止まつてお耻かしう存じます」

と云へば人々益々感じ入りたるものゝ如く、因幡守不圖心付き

「入獄の身は笄は相成らぬ取上られよ」

と命ずれば、同人は再び立掛るを

「又しても瑣細なるお咎め立て、是は主家より拜領の品物、妾が息の根絶ゆるまでは身の守同然、何れも方のお腰の物同然でござる」

伯耆守「老女の事なれば仔細も厶るまい、其儘に置かれよ」

と制し、改めて村岡に向ひ
「偖、此度江戸表に召寄たるは餘の義にあらず、豫て私に武家、公家の出入相叶はざる御取定めなるに、近頃其許の手引にて、水戸殿家來、鵜飼吉左衛門父子、其外浪人共出入致し、水戸殿御謹愼を解く事を取就しの程内願に及び、それを其許には取合ふまじきに取合ひ、主家へ申立てしは如何なる心得ぞ、其義言譯あらば聞かん」
と詰り問へば、村岡泰然として色動かず
「官家の老女などと申すものは、唐紙の引手同然、主用を下々に達し、又下々の用事をお上にお取次申すに、相手を嫌ふては唐紙の開閉がなりませぬゆゑ、それはモウ種々の人の取次ぎを致しましたのが、老人の事ゆゑ一向覺えが厶いません」
と云ひ切りましたから、奉行も持餘したが、更に物柔かに
「如何樣、左樣で厶らうが、日頃誰々が何の用にて參りし位の事は、お覺えが御坐らう」
と問ひ掛けました。

文林

筍　東久世通禧

なへて世の人には似すて親よりも
立のひけりあのきのたけの子

待郭公　鍋島直大

我やとのそともの森にほとゝきす
こゑせぬほとは淋しかりけり

雨後新樹　前田利鬯

涼しさをつゆにのこして晴にけり

わかはにそゝく今朝のむら雨

竹風　黒川眞頼

そよそよと我にかたらふ心ちして
　軒はのたけにかせわたるなり

首夏雨　宮地巖夫

降あめのしつくとともに椎のはな
　こほるゝ見えて夏はきにけり

芍薬　小出粲

えひすとておとしめ難き世の中は
　此はなにこそおもひしりぬれ

辨内侍　荻原巖雄

高やすにまつときゝつる嬉しさは
　なかなかわたのたよりなり鳬

松有歎聲　千葉胤明

萬世のおとするまつの木の間より
　ふしのたかねの見ゆる宿かな

曉旅行　内藤存守

朝いするわれさへ旅はいそかれて
　つきのかけふむあけかたの空

千代野尼　遠山英一

底ぬけて水もたまらぬ桶のうちに
　こゝろの月のかけはさしけむ

黄金の花見にゆきて　海上胤平

まとかにも光をみてよくれをしむ
　花の木の間の三日月のかけ

春日敬三

咲つゝくさくらかもとを行水は
　花のみやこの人やくむらん

惜花　春日昇一郎

吹すさふ深山おろしにさそはれて
　散かふ花の惜くもあるかな

松陰餘花　鍋島榮子

見るかぎり青葉になりしやま松の
こかげにのこる花もありけり

小野道風　柳原愛子

秋はぎの筆のはなをもさかせつゝ
にほひはたかし小野のふる道

騎兵　南郷柳子

黒こまの手綱ゆみてにとりゆくは
おほ城をまもるいくさ人かも

殘鶯　保科節子

さくら花おとなくありて青葉のみ
茂れるかげにうぐひすのなく

禁苑新樹　日野西廣子

茂りあふ御園のわかはちるつゆめ
さなからたまの心地こそすれ

拿破崙第一世　北島以登子

西の海にひゞきわたりし白なみも
ひと夜の風にうちくだけけり

大原女　常磐井文子

折そへしつゝしのはなに大原女の
いたゞくしばも匂ふはるかな

百合　田中瀧子

草ふかきたにのそこにもしな高き
いろこそ見ゆれ姫ゆりのはな

夏露　三宅瀧子

ゆふたちはみるみる過て小さゝ原
きらめく露に日かけさすなり

わかは陰濃かなり　服部磯子

薄くこくみとりしけりてなつ山の
こかけすゞしくあさ風そふく

黄金の花見に行きて　渡邊龍子

ゆふづきの光もそひて咲花の
わたりしられぬ黄金井のさと

思ふ事ありける頃よめる長歌幷に短歌　　下田春興

あつさゆみいつの島ねに
　あさなきにみちくるしほ
ゆふなきによりくるあみ
　其の潮のいやます〳〵に
其の波のいやしく〳〵に
　君のためおもふとすれと
國のため盡すとすれと
　おほ君のしこのみたてと
出てたゝむ時にはあはす
　選る人にえりのこされて
ますらをに生れ來なから
　ますらをの集にもれたれ
賤たまきかつならぬ身の
　あさむすへせむ便しらに
かすみたつ長き春日も
　あめ地におらひなきふし
たらちねの母のこふこの
　眉こもりいきつきわたり
赤ねさすひるはしみらに
　ぬは玉のよるはすからに
立つ波のいやしく〳〵に
　みつ汐のいやます〳〵に
たゝひとり物しおもへは
　にきひにしわか家すらも
草まくらたひねのことく
　おもふ空やすからなくに
あけく空すくしもえねは
　のまぐものゆくら〳〵に
わしかきの思ひみたれて
　はる鳥のねのみしあかゆ
代のこと〳〵に

かへし

ますらをに生れきなから大丈夫の
　むれにもれたる身をいかにせむ

蝙蝠傘

かはほりの傘もつ御代となりにけり
　さしもひらけぬひなのはてまて

冥府の花

山岡良旗

去にし卯月二十七日と云ふに、最愛なる夫君と幼君とを遺して、みまかり玉ひし原綾子刀自を悼み奉りて詠める。

森のしげみを後にして　天津御空をおのがじゝ
風につばさの鳥もまた　古巣したひて帰るあり
嵐のまゝに散りみだる　花を惜めどたれかまた
かはらぬ色に染め返し　もとの枝邊に上すあり
数なき鳥のそれをだに　情をしらぬはなをだに
かゝるためしは吾も人　見もし聞きもし年毎に
されど果なき憂世やな　人の身なとか鳥邊野の
ゆふべの煙あだし野の　朝のつゆと消えうせて
終に還らずなりにける　きみをおもへばたゞ涙
遺には千代を契りてし　君が夫の君いとし子も
深き嘆きにしづみつゝ　夢にゆめ見し心地して
如何に無情おはすらむ　それを思へば我もまた
夢路をたどる思ひあり　さなり夢なり人の世は
ゆめの夢とは悟れども　君を思へばなみだのみ
さはさりながら一度は　貴賤貧富のへだてなく
老若男女のけじめなく　いつか行べき道なれや
あはれ現世は憂世にて　無常の風したえまなく
逝きて再びかへらざる　人こそかくも哀れなれ

されど此の世は小車の　双輪の夫にあらねども
廻り〳〵てすゑつひに　元にとこそは還るめれ
見ずや流れて行く水は　遂に氣となり雲となり
雨となりては亦さらに　もとの水には還るなり
人は土よりなればこそ　ものと土には還るなれ
されば土より何すれぞ　元の人にはかへらざる
土に歸れる其のものは　終に人にはかへらぬか
萬のものはまたもとに　かへる例はありながら
天は人をばてらせども　人を活さんめぐみなし
あはれ憂世の無情さよ　人こそかくも哀れなれ

雲は浮世にあれんとも　風は下界にすさぶとも
君しまします冥府の空　五彩の雲やたなびきて
如何に安けくおはす覧　さはれ憂世は塵ふかく
雨かせはるゝ隙なきも　君を慕ひていとし子は

月をながめて月に泣き　花を手折りて花に泣き
君の御靈にぬかづきて　悲しいかなや痛ましや
なみだの乾く時ぞなし　あはれ現世にいま一度
それも思へば夢なれや　頃しも春の八千ぐさは
野もせ山もせ咲き匂ひ　美しかれど冥府路なる
蓮華の色のたふとさに　比べつべくもあらざ覧
されば高天原に長へに　日夜めでませ冥府の花
あはれ御魂よ靜かなれ　あはれ御魂よ安かれよ
思へば夢かまぼろしか　君に手向けん言の葉は
たもとに落る露ならで　涙のほかになかりけり
あはれ無情き憂世かな　あはれ憂世の無情さよ
逝きて再びかへらざる　人こそかくも哀れなれ





五月廿日兼題

新樹

天　下谷區下根岸町三十三番地　椎野薫子

かせわたるにはの青葉のつゆちりて
いりひすゝしくわめはれにけり

評、實景見るが如し。

地　和歌山市新通七丁目九番地　池田まつゑ子

さほひめのうす花そめもいつしかと
みどりにうつるころもてのもり

評、青葉うるはしく、ふくとゝのひていとめでたし。

人　埼玉縣川越町　横田秋子

賤の女かこかひいとなむとき來ぬと
えたさしてけりはたのにひくは

評、趣向米に秀でたり。

甲之部

青葉ふくかせにすたれのゆらきつゝ
のきはすゝしきなつ木たちかな　東京　千勝ふく子

あて人のかりのすまひのかりそめに
うゑしかへてもわかはしけりぬ　愛媛　飯田信子

花のゆきちりしこすゑのあとゝへは
わかはのつゆそそてにかをれる　大阪　桝田登子

朝つゆを玉とちらしてかせわたる
わかはのかけもなつかしきかな　東京市　近澤和子

花のかもまた失やらぬこゝちして
わか葉にそよくかせもなつかし　京都　坪内りき子

乙之部

むら雨のはれしそのふのわかへて
ひとしほいろのまさりぬるかな　東京　椎野ぬき子

むらさめのすきし梢につゆ見ゑて
みとりすゝしきなつのゆふくれ　東京　椎野清子

わかはもる月かけくらきなつこたち
はなのむかしのしのはるゝかな　肥後　坂本美知子

みつ枝さすこすゑのわかは繁りあひ
さしくろつきのかけもなくらし　神奈川　森田はな子

花まちしこすゑもなつはたちならふ
まつのみとりのいろにゝほへり　長崎　八尾いへ子

若みとりしけりのみゆくなつやまの
いつこやあきのもみちなるらん　長崎　日高かす子

たちならす庭もをくらくなりにけり
はなのこすゑもわかはしけりて　東京　泥堂菊代子

日かけたにもらぬはかりにわか庭の
ならのひろ葉はしけり合ひけり　愛媛　梯たけ子

花のいろにとみしころもかへろての
あを葉すゝしくなつはきにけり　肥後　野口靜子

みつとりの青葉のやまのをもしろく
木々のわかはそしけりあひぬる　東京　山本梓子

朝かせにこほろゝつゆそをしまれて
しけろわかはのいろのすゝしさ　東京　片山あや子

おそさくらましろを見れは若葉やま
はろののこれろこゝちこそすれ　東京　吾妻ちか子

あさくらくしけりにけりな夏木たち
かへてかしはもおなしみとりに　東京　川村松子

つゆに磨き風にちりをはゝらひつゝ
ひこといろそふたまかしはかな　岩手　佐藤だい子

しけりあふあをはの山のわかゝへて
はなにもましてめつらしきかな　東京　佐藤成子

涼しくもほたろとふかとおもふまて
にはのわか葉にむすふしらつゆ　大阪　谷信子

ふきわたろ夕かせみねてわか葉さす　茨城　相根八重子

きゝのこすゑのつゆそこほろゝ

朝かせにつゆちろにはのわかかへて
みとりのいろはゝなにまされり　茨城　内田さた子

桃の實もみつよつみねてふせいほは
わか葉すゝしくなりにけろかな　熊本　佐々有鄰子

池みつのみとりふかめてなつ木たち
すゝしくしけろにはのおもかな　東京　林琅子

見し花のおもかけあれやなつやまの
あを葉にわかぬみれのしらくも　熊本　千知波楯子

若葉もろつきかけすゝしなつこたち
つゆおもしろくにほひこほれて　愛媛　竹村竹里子

夏やまのわか葉にむすふあさつゆの
たまふきちらすかせのすゝしさ　廣島　衣笠澄子

影くらきわかはにこもろふろやしろ
なつはいよ〳〵かみさひにけり　埼玉　横田音羽子

ふみ學ふまともを暗くしけりあひて
つきさへもらぬなつ木たちかな　熊本　田代艶子

梅さくらひとつみとりに繁りあひて
あさけすゝしきなつこたちかな　東京　北島功子

きのふまてめてにし花のあとゝへは
しけろわか葉にあさかせそふく　熊本　谷口廣子

花はなほのこれろやまのしたいほに
しけろわか葉になつをしろらん　鹿兒島　山田よれ子

ふみまなふまとも小暗くなりにけり
のきのかしはのわか葉しけりて　愛知　角田ともゑ子

山みれはみとりのほかのいろそなき
のころはなさへ葉かくれにして　愛知　永井さい子

あかすみし花のなこりもあらしやま
木々のわかはそしけりあひける　埼玉　前野壽賀子

日にそへていやしけりゆく夏木たち
あをはのいろもめつらしきかな　栃木　靑木たま子

へたてなきとなりも遠くおもふまて
きゝのわかはのしけりあひぬる　埼玉　前野ふさ子

わか窓のさくらの若葉しけりあひて
日かけもゝらすかせもかよはす　信州　岩間千枝子

立ましろ木々の若はのしけりあひて
ひろさへくらきすきのしたみち　長野　岩間種子

桃さくらこすゑみなから繁りあひて
つきにくまなすなつのよはかな　山口　田村道子

あらしやまはなのしら雲きねはてゝ
わか葉のみとりなつめきにけり　三河　本多きさ子

しら浪とみねしさくらのはなちりて
みとりにかへるふなをかのやま　三河　竹尾みね子

はかくれに殘れるはなもちりはてゝ
みとりいろこきなつはきにけり　東京　椎野鋭子

丙の部

このころは月たにもらすなりにけり
あをはしけれるやまのしたいほ　東京　椎野秀子

その名さへ高尾のやまのわかゝへて
あきのにしきのいろにまされり　東京　中島鉦子

ふみまなふ窓はをくらくなりにけり
たゝひともとのきりのわかはに　岐阜　吉村せい子

軒ちかきはひろくま檀しけりあひて
まともをくらきなつのこのころ　熊本　坂本たけ子

きのふまて花なめてたろつきやまも
ちろつゆすゝしわかはしけりて　東京　松村あさ子

ふるあめにあをはの色のいやまして
はる見しはなもおよはさりけり　東京　三井鉞子

こきませしやなきさくらも押なへて
みやこのおほちみとりなひけり　横濱　竹内久子

雨はれてみとりいやますわかゝへて
はなにまさりてなつかしきかな　愛媛　池田梅子

梅さくらおなしみとりにしけりつゝ
いふせきなつになりにけるかな　茨城　小沼かの子

一もとのかへてなれともみつねさし
みとりしたゝるかけそすゝしき　福岡　千石文子

野に山にこゝろうかれしはなちりて
木かけすゝしきなつは來にけり　愛媛　岡田猪子

わか宿の庭のわか葉はしけり合ひて
とほやまのはそ見ねすなりける　和泉　福岡蓮子

川そひのやなきさくらも繁りあひぬ
ゆきかふふれのかけ見ねぬまて　和泉　稲原信子

うすくこくみつ枝さしそふ夏こたち
はなのいろ香におとらさりけり　但馬　田尻保代子

木々はみな青葉になりぬこのあきは
いつれかさきにもみちそむらん　大阪　中舘やう子

吉野山さくらのわか葉しけりあひて
つきのかけさへうとくなりぬる　大阪　横山芳子

月かけのもろひまさへもなかりけり
木々のこすゑのわか葉しけりて　松山　水木とも子

月も日もかけもらぬまてしけりゆく
にはのわか葉のいろそすゝしき　松山　綠友子

教の庭

はなためてしなかの櫻の陰に來て
　かせまつへくもしけり合ひけり　東京　林　ひな子

やかてちる秋をおもへはきりの葉の
　すゝしきかけもたのまれぬかな　東京　大木光子

葉かくれて見ねすなりゆく山かけの
　いほりそなつはすみよかりける　東京　牛山素子

なかめつる花のしらくもきねはてゝ
　あをはしけれるみよしのゝやま　秋田　早川のふゑ子

松すきのみとりかなかにましりても
　めにつくものはさくらなりけり　秋田　古瀬りく子

なつこたちしけきみやまも柴ひとは
　かよひなれてやつまきこるらん　秋田　古瀬とよめ子

いつのまに夏のけしきになりぬらむ
　みなれしにはもあをはしけりて　愛知　木下鶴子

こすゑみな青葉になりぬ水のいろの
　そらのみとりにかよふのみかは　東京　片山ふみ子

すゝしくもまた清らにも見ゆるかな
　木々のこすゑはあを葉しけりて　東京　名倉すゝ子

このころは庭の若葉もしけりあひて
　いつれさくらとわかたさりけり　東京　平尾あさ子

うめさくら今はならひて若みとり
　こきもうすきもなつかしきかな　東京　矢野保子

ちりくれはこすゑの露かさくら木の
　わかはのかけそのとけかりける　東京　綾脇ます子

花と共につゆさへちりてにはの面の
　みとりそひゆくなつこたちかな　東京　鍋田よし子

足ひきのやまのしたみちかけくらく
　なつはあを葉のしけりあひけり　東京　富田けい子

　しけるあを葉にまとひぬるかな

見渡せはかへてさくらのあさみとり
　やまの氣しきもなつめきにけり　東京　戸塚鐵子

花なのみひとはめつれとなか／＼に
　しけるあをはのきよくもある哉　東京　杉浦いと子

我やとののきはにつきのもらぬまて
　ならのわか葉はしけりあひけり　東京　佐藤央子

日にそへてみとりふかむる我にはの
　かへてのわか葉いろのすゝしさ　大阪　伊勢村花子

夏されはにはのかへてのあさみとり
　あさのいろにもおとらさりけり　大阪　伊勢村春子

こきませしやなきさくらも夏されは
　いつれかはなのこすゑなるらん　和歌山　瀬戸ゑい子

枝かはすうめもさくらもあをやきも
　みわかぬまてにわかはしてけり　東京　三好珍子

なつ木だち青はしけりてそよ／＼と
　こつゑをつたふかせそすゝしき　丹波　大槻まつの子

いつしかと花ちりはてゝさくら木も
　わかはしけれるなつは來にけり　茨城　荒野たろ子

降るあめにみとりの色もいやまして
　わか葉すゝしくなりにけるかな　東京　田中秀子

わすられぬ花のなこりのつきぬまに
　みとりそめなすみよしのゝやま　筑後　武田龜子

あさな／＼きゝのわかはにおく露は
　いろもみとりににほふなりけり　筑後　饒山増代子

春かすみたちへたてたるやまのはも
　なつはあを葉のしけりあひけり　肥後　筑紫春子

庭さくらはなはわか葉にさしかへて　みとりすゝしくなりにけるかな　肥後　小池粗子

このころは軒のわか葉のしつくより　つゆしたゝりてすゝしかりけり　肥後　佐々小學子

花ちりし木すゑも今はしけりあひて　なつとしもなくすゝしかりけり　肥後　服部倫子

花の香のうすれもゆくかいなはやま　みれはわかはのしけりあひつゝ　岐阜　佐藤そら子

いとはやも花はちりしか四方のやま　みつみつしくもあさみとりせり　肥後　高田重子

ふる雨にはなすりころもいろあせて　やまはあを葉のなつ木たちかな　肥後　德永市子

あかす見しさくらはちりてあらし山　わかはをくらくしけりあひけり　肥後　田代瑩和子

さきにほふ花にまさりて見ゆるかな　日ことにいろそふにはのわか葉は　肥後　田代綾子

こゝろゆくすみかなりけりけさよりは　すゝしきかせにわかはそよきて　東京　田村政子

いつのまに青葉のかけとなりぬらん　わらひたをりしはなのこのもと　大隅　山田稻子

おしなへて山はみとりになりにけり　くもとまかひしはなのこすゑも　大隅　稻垣政子

花はゝやあとなくちりてなつ木たち　わかはすゝしきにはのおもかな　三河　坂本てい子

うくひすのなく音をおひてみやまちは　きゝのわかはにかゝるしらつゆ　相模　岩橋花子

花はしもあとなくちりてあさみとり　いつもゆかしきなつ木たちかな　東京　太田やへ子

梅さくらえたさしかはすにはおもに　すゝしきなつのかけもみえけり　横濱　細谷まつ子

ひまもなくこすゑの若葉しけりけり　てらすつき日のかけもらぬまて　横濱　高森かじ子

きのふまて匂ひしはなもちりはてゝ　けふはあをはのかけしつかなり　上總　高石登代子

雨はれしあしたに見れはわかやとの　かとへのやなきわかはしけれり　東京　小川たき子

たちならふ松もときはのいろはへて　みとりすゝしきもりのさかきは　和歌山　長尾こゑい子

おそさくら花はのこれとそれもまた　おなしみとりの木すゑなりけり　山口　村上操子

青葉にはときもおそきも見えぬかな　うめもさくらもみとりふかめて　松山　上原のふ子

花に引しつゑのあとさへ消えぬ間に　わか葉しけりてかせそよくなり　山口　田村米子

月かけもゝらぬはかりに繁りあひて　のきはをくらくわかはさしけり　三河　服部萬子

けふみれは花はあらしのやまゝつに　さくらもおなしわかみとりせり　三河　服部正子

しろ妙のはなのころもをぬきかへて　あをはよそほふにはのさくら木　東京　馬場さい子

みつえさす青葉にいまはおほはれて　となりもとほきこゝちこそすれ　松山　松山絲子

一ゑたはきりてはらはんにはの面を　せはくなしたる木々のわか葉は　松山　松山春子

みつはさす青葉にいまはにほうめは
　　おほろのつきもまたおほろなり　松山　松山きく子

しけりあふき〻の若葉のもれいてゝ
　　にはをくらくなしはてゝけり　松山　松村房子

文まなふまとをわかはにおほはれて
　　こゝろもくらきふみを見るかな　松山　宇田すき子

目にたちし庭のかれ木もこのころは
　　わかはしけりてかくれはてけり　松山　神原しつ子

はなとみしき〻のこすゑも色かへて
　　あをはゆかしくなりにけるかな　東京　杉本ますの子

五月廿日兼題

出産を賀する文

天

東京神田區美土代町三丁目一番地　田中さだ子

御うぶやの事、かねて承り居候間、疾より御けしき伺度存ながら何かと取紛れ、無禮なる罪は寛き御心に免したまひてよ。扨先程は御文賜はり、うれしく拜見いたし候ところ、御許樣、今朝御安產わけで行末は御家のかせをもふかせ給ふべき、御男子の由、御祖父母の君を御初め、御父君樣にも一入御よろこびの御事と、めでたく御いはひ申上候。古の聖も申され候通り、黃金にも玉にもましてたふとき御たから子授かり給へる御たのしさ、なかなかに申もおろかに候。なべて母親は、愛におぼれ候ものと世の人も申候へども、何くれと教の道にたけ給へる御前樣の御事故、いやが上にさかしう御愛育遊ばされ候事と、今より推量り御うらやましく存候。申迄も無之候へども、御產後はいさゝかの事も御身にさはり、それがため、取かへされぬ大事に及びしためしもまゝ有之候間、時せつ柄、一入御大切に御養生遊ばされ度、此品誠に粗末には候へども、御襁褓しろに遊ばされ度、何れ近き内まゐのぼり、まのあたり御ばぎ事申上度、先は御よろこびまで。めでたくかしく。

評、よろづにゆき渡りたる心づかひ、さこそはあらめ。またためでたし。　雛路

地

肥後國熊本市東寺島町　田代艶子

昨夜はやす〳〵と御產のひもをとかせたまひて、玉の御男子をまうけさせ給ひしとか。一しは御目出たう、父君母君の御よろこび、さこそとおしはかり奉り候。此方にても、いつしかとまち侍りし事とて、何れもこよなうよろこび居り候。殊に若竹のめざしの君は、いとすか〳〵しう

おはしますより、御行末は、いよ〳〵榮えゆく御家の根ざしとなり給ひて、やがては、月の桂をも手折らせ給ふらむと、いと〳〵御たのもしうこそ。さて產衣一かさね、いと見いたしうは侍れど、御祝ひのしるしまでにさゝげ侍れば、何卒御納めたまはりたく、又こは若君の御よはひを巣ごもる田鶴の千とせになぞらへて、手づからその模樣を繡ひし袋にて侍れば、おとりし業はとがめ給はで、おのが志のほどをくみ給はゞ、いかばかり嬉しう侍らん。何れ明日はさぶらふべければ、數々の御よろこびは其節したしくきこえ上べくなん。

千代しめて生ひ出し竹のみどり子は
いよゝ榮ゆる根さしあるらむ

評、手づからたづを刺繡したまへる袋には、などて千とせのよはひをたもたざらむ。

人

長崎市新町十三番地　八尾いへ子

かねて此月はとまち侍りつるに、今日なんにほひ出る朝日の光りと共に、いときよらなる、玉の男のみこうまれ給ふと承るなん、こよなうめでたうこそ。はゝそばの木高きかげにおひたゝせ給ひやがては御館のみはしらともあふがれ侍らん君にませば、うからたちのみよろこびは更なり、たらちねの御親の君には、初御孫にさへおはすれば、御心のほど、いかばかりかとおしはかり侍るになん。この產衣は、八十路に近き祖母の手づからてうじ侍りつれば、其よはひをかさね給はんしるしにと、たいまつる。萬はさぶらひて、きこゆべくなむ。かしこ。

評、簡單にして要を得たり

(以下原稿到着順)

大阪　桝田金千

はやう承り侍りつる御うぶやの事、鶴の千代の初音、待ち給へらるゝ心地のし侍りてなん。とくより待ちきこえかしづかせ給へりしを、いと〳〵安らにまうけさせ給ひて、玉のやうなる男の君にさへおはすとか。父君はまして、おほぢ、おほばの君には、如何に嬉しびよろこばひ給ふらんと、おし量られ給へられぬ。いみじき嬉しさは、藤衣せまき袖には、つゝみ余り侍りてなん。更に御二所にも、平らかにおはし給ふとなん、いと〳〵めでたう思ひ給へられ侍るを、猶、鶴龜のつきせぬ萬萬世も、ねびとゝのはせ給ひて、玉の緒の末長う、いや榮えまさん事を祝ひきこえ侍り。御住ゐ廣うあらせ給へば、まばゆくも賑はゝしう、御うぶやしなひども、花やかにせさせ給ふらん。さるつらねに白絹ひと卷、まゐらするもかゞやかしう、思ひ給ふべけれど、しるしばかりと御らんぜさせ給へ。やがてまう昇りて、うゐま見えも給らまほしうこそ、とりあへず、御よろこび、ことほぎまつるになん。殘りは御まのあたりに。あなかしこや。

鶴龜のつきぬ齢ひもこの君の
へなんちとせにとり添へてまし

東京　山本梓子

若葉にゆらぐ風のけしきも、夏このましき此頃しもぞ、めづらかなる御消そこ侍らむと、待きこえまゐらせしを、今朝なむ、いともめでたき御たよりに、そのうれしさは秋にも、つゝみもあへぬばかりにこそ。さるは、いにし五日とや、いと平らかに玉のを節句に、御子設けさせ給ひし由、其日しも、昔よりいはひ聞ゆる端午ののばかりなる、御家の風いとたのもしく、はた、御齢の數も引けるあやめの千代の根ざしと、淺からずなむ、ことほぎまゐらす。御やかたのうちは、たとしへなき御よろこびみたせ給ふなかにも、祖父母君の、いかにもてかしづき給ふらむ。花なし見ればといひしふるごとさへ思ひ出でられてゆかしうこそ。めづらかなるちこの御かたちも、とく見奉らまほしう侍れど、御祝ひに加へて、よろづ御事業うものし給ふべきを、そが中におもてさしいでむも、なめげにや。君が御こゝちも、少し靜まり給はむ頃をまちて、御まのあたり御ことほぎもきこえ侍りてん。事そぎたるは、さるかたにおぼしけちてよ。此きぬは、御らんぜさせん數にも侍られどいさゝか、御いはひのしるしになん。いはけなき君の、御そうぞきのかたはしにも加へ給はらば、こよなき幸にこそ。其のちのみけしき、御二方とも日にそへて、すが〳〵しく肥立給ふらめど、暑さ寒さの定めなく、かつば、いとしめやかなるきのふけふなれば、御心つくしてやしなひたまへや。こなた、たれかれ、御ほぎごとよきに傳へさせてよとなん申出で侍る。なほかず〳〵はのちに聞ゆべく、取あへず、御よろこびまで。かしこや。

今年おふうらわかたけのたくひなく
しけらむ千代のかけなしそまつ

松山　梯たけ子

若葉にそよぐ風さへも、一きは心地よう覺えられし今朝。とく戴きまつりし御玉づさ、いかにうれしかりしよ。拜しもてゆくに、思はず聲を出してよろこび侍りぬ。さても、かねてより、いつならんかと陰ながら待ちにまち侍りしかひありて、昨日はも、さしいづる朝日のかげと共に、安々と玉の男兒君をあげさせ給ひし御目出度さ、そも何にかはたとへん。とる此筆さへも躍るやうなるこゝちのせられ侍るを、まいて御二方の君のみ心のうちやいかばかりならんと、おしはかりまゐらせ、げによそならず、ことほぎまつるになん。就ては、御祝のしるしまでにとて參らする此鯛双尾、いと〳〵粗末には侍れど、納めたまひなば、此上なき幸にこそ。何れ午後よりさぶらひて、幾重にも御よろこびきこえあぐべく、不取敢かくなん。目出度かしこ。

伊豫　綠友子

床しき御産屋の內ののどけさ、げにいかばかりならんと、遙に推しまつるよ。まいて實にも替へがたき、玉の男兒君との御事、ひな鶴の初音にもまして うれしとも嬉しう、何ごとも、さし置きて、幾重にもことほぎまつるになん。さて此の縮緬は、いと見苦しく侍れども、和子樣のいく久しく榮えたまはなんことを、ちかはせたくて、ときはの松の摸樣あるを撰びしものなれば、御召物の數になど入れさせ給ひなば、こよなき幸ちにこそ。目出度かしこ。

廣島　春野靜子

ひなも漸く春めき候を、都大路の春やいかならむと、東の空のみ打ながめらるゝ折しも、なつかしき數御玉章、机の前におちたりしをとる手をそしと、拜しまゐらせ候處、かねて御心配申居候御姉君

様には、此程やすく〱と御出產遊ばされ候由。殊にをのこごと承り、飛たつ斗りにうれしく存候を、御両親様御はじめ、御兄上様の御よろこび、いかばかりなるらむ。御両親様にも、殊に御初孫様の事ゆゑ、一しほ御可愛く思召すらむと、推はかり申候。未だ姉上様御むかへ遊されてより、一とせあまりに相成候を、はや御前様には、叔母様と成らせられ候事の、御うらやましさよ。御家の千代萬代までも、いや榮えにさかえまさんこと、今よりしられて、こなた一同共に、御悦び申居候。扨何ぞ御祝申さむと存候得共、さしあたり、能き思付もこれなく候間、甚御粗末には候へども、御初着一重、並に犬張子一對、小包郵便を以て御送り申候間、御受取願上候。何れ近日の内、是非共上京致すべき用事有之候間、其節御對面、よろづ御話し申べく候。末ながら御家内様へ宜敷御つたへ願上候。先は取敢ず、例の亂筆にて、よろこび申上候。あなかしこ。

上總　高石登代子

かれて、此の月はとまたせ給ひしもしろく、よべいとたひらかに千とせ經ん松のみどり子御出產遊され候趣。いとも〱めで度御事とよごときこえはべり。しげりにしげりゆく君が園生の、たまつひめまつの千代八千代の根ざしかためさせ給ふをみそなはすかぞいろの君だちの御よろこび、はた、いかばかりにかあるらん。御七夜すぎなばまゐでゝ、御よろこびきこえあくべけれども、只今は、わざとさしひかえはべり。此のさかなひとかご、いとはづかしくは候へども、御うぶやしなひのしるしまでにと參らするつゆの心うけさせたまへや。あなかしこ。

讃岐　横山芳子

かれて、御ふくよかに入らせ給ふよし、承り及び候へば、やすらかに御分娩あらせたまはんことをのみ、たのしみまち侍りしに、今日しも、うれしきおたより玉はり、まことに、やすく〱と玉のをの御子產ませ、特に、別段の御障りもあらせず、又、和子様には、わけて御健かのおもむき、御一同様の御よろこび、さこそと推しはかりまゐらせ候。まことに御家のいしづゑ、こよなき御幸福におはし、千代八千代かけて、芽出度御壽ぎたてまつり候。就ては御初着一かされ、見ぐるしくは侍れど、御祝儀の印までにまゐらせ候まゝ、幾久しく御納めたまはり度、いづれ、近き日さぶらひて、よろづ御よろこび申のぶべく候。先はめで度かしこ。

丹波　大槻まつの子

承り候へば、昨夜は御新婦様、いとやすらかに、御分娩あらせられて、玉の如き御男子御出生のよし。御滿悅さつし上まゐらせ候。ことに御二方様、御さはりもなく、すこやかに御肥えたち給ふよし、御嬰兒様の行末長き御ためし、若松の緑りかはらず、幾千代までも、いや榮にさかえまさせ給はん事をのみ祈り上まゐらせ候。此產着一重れ、鮮鯛二尾、御祝儀の心ばかりに、御覽に入れ候。いづれ御七夜濟せられ候程に相成候はゞ、參上御まのあたりに、御よろこび申上べく候。かしこ。

東京　田中秀子

春がすみ名殘なくきえうせて、夏たつ頃となりぬれば、なにとなう心もすが〱しく覺えて、庭の椿もいや茂り、垣の卯の花雪の如くに咲きいで候折から、御もと様には、やすく〱と御子うませ給ひ、ことに御男子さまと承り、先以てめでたく存上候。第一御家の御世嗣と成らせらるゝ御方とて、姉御様の御よろこびは更なり、御祖父祖母さまには、いかばかり嬉しきことに思ひ給ふらんと、おしはかりまゐらせ候。御母子様とも、なにの御さはりもあらせられず、御すこやかに御日立遊され候事、御祝申上候。申すまでも御座なく候へ共、御產後は殊に御身御大切にあそばされ度

いのり上候。此品すこしばかりには候へども、初衣一かされ御祝ひのしるしまでに進上候まゝ、御受納め下され度、まづは御祝ひまで。目出度かしこ。

東京　三好珍子

若葉の緑いと麗はしう、朝心ちよく覺ゐ候折から、いともよろこばしき事こそ承り候へ。さては、御姉君様御事、しろがねにもこがねにも、まさる寶の御子をあげさせられ、しかも、御男子の由。いち早く御世繼の君ゐさせられ候御事、めでたしともめでたく、二葉の松の千代かけて、はるかに御祝ひ申上候。御兄君様の御よろこび、はた、かねてより待遠げに指折數へさせ給へる御老母様の御笑顔など、まのあたりみゆる心ちせられて、妾にもそゞろに嬉しく、何は置ても御祝詞申上むと、心のみせかれて、認めし筆のあと、あやしげなるふしも候はんを、ゆるさせ給へ。さては、別包の一品、若葉のみどり麗はしき產屋の内に生ひたゝせ給へし御子なれば、それにちなみてと、若竹の模様、妾事見立て侍り。心計に調じ參らするを、納めさせ給へてよ。先はとりあへず御祝詞まで。めでたくかしこ。

東京　太田やへ子

昨夜は御令室様御安產、殊に御男子にてさへ渡らせられ候由。御初產にて、御兩親様はじめいかばかりか御滿足の御事とぞんじ上候。御母子様とも御健かにて御肥立の事、いよ〱目出度御祝申候。まことに龍は龍子を生ずとやら、御一門の御繁榮一入の御事と末頼もしく御壽ぎ申上候。御初衣一重、御祝儀のしるし迄に進上いたし候。早速參上御祝も申上、若君様をも見あげ奉り度候へ共、昨今の程は、何かと御取込なる可くと存じ、わざと差しひかゐ居り候。いづれ御七夜もすみ候はゞ、母とも〲參上ゆる〲申上べく候。かしく。

相模　岩橋花子

兼て御身重とうけたまはりし御姉君様には、昨日事なく、御出產遊ばされ、殊に御男子様にて、御二方様とも御無事のよし、重れ重れ御目出度、鶴龜の千代萬代と共に、幾久しく祝ひ上參らせ候。御兩親様はじめ、御兄君様の御よろこび、如何ばかりかと推し上ろ此方も、いとゞ御嬉しく存上候。德高き御姉上様の御事とて、如何にさかしく生ひ立ち給ふらんと、末たのもしく存上候。申上ろまでも候はれども、猶此上ともに、御二方様の御看護御大切になさるべく、念じ上參らせ候。先は右御祝ひまで。めでたくかしく。

肥後　佐々有鄰子

御そろひ目出度わたらせられ候よし承り、此もとよりも、よろこばしく老母をはじめいづれも申出候。さてとよ今日は、五月二十日にて、舊曆の四月十三日の火曜なり。午後四時四十五分の月の出に產聲高くあげたまひて、雄々しく御男兒様御出生あそばされ候。御しらせの玉章拜見いたし候。御母子様ともに、安らかにたひらかに御座あそばされ、千代萬代に立榮ゐたまふらん。目出度御事に奉存候。後刻參納の節、千鶴萬龜の御祝儀言上可仕候。あなかしこ。

陸奥　國分ふみ子

今朝疾く、郵便の一聲常より勇ましく聞ゐて、懷かしき君の御玉章に接し奉り、取る手遲しと開き見れば、嗚呼嬉しとも喜ばしとも、君にはさいつ日の朝日と共に安らかに玉の男兒君あげさせ給ひしよし。梅が香清き產屋の內、愛らしく健かなる孤々の御聲高かりし時、若き母君の面わの如何にはゐまさり給ひけんなど、他乍ら想ひ出され候て、背の君の御喜び、御老親様の溢るゝ計の御笑顔など眼に見ゆるが如く覺ゐて、維乍ら人事ならず存じ候。扨も

可笑しきは人の運命に候よ。彼の學の窓にありし時、世の仇浪の聲も知らで、共に手をとりかはし野に山にあくがれしも、實に昨日今日の如く思ひしに、早や一家の母君として、第二の國民を養育し給ふ御任務とならせ給ひし事よ。さる方に御心あつくおはしませば、床しき庭の撫子を如何に美しうも育したゝせ給ふらめと、御かげ乍ら床しうなん。君のさかしき御心や、既に此事は辨へさせ給はんに、數ならぬ身の、今更さかしら立て聞え參らせんも、如何ばしき業に侍れ共、かくも親しきにあまへて、今茲に思ふ事の一節を書連ね參らするにこそ。哀れ、たど／＼しき水莖のあと、ゐやなき言の葉はよしなに免させ給へや。人の親の心は闇にはあられ共と、古人の歌ひしも實に去る事になん。とかく子を思ふ親の心の限りなき愛と云ふ字に眼暗まし、しらず／＼、心は途に子を思ふ闇路に迷ひ、善きも惡しきも其思ふにまかせ、其身を淺猿しき境におちいらしむること少からねは、昔も今も同じ御事に候。忘れてもかゝる世のそしりを受け給はぬ様、脊の君とも御はからはせ給ひ、武士の身を戰場に捨つる如く、敎育の爲めには命をしも顧み玉はず、淋しき古里に床しき山櫻の朝日に匂はせ給はん時をば、かれても祈り上候。別に小包に致し候縮緬、常盤の松に雛鶴の摸様は、和子の君の千とせをことほぎ參らしたる心計に侍り候を、御召料の一ひらとも遊ばされ候はゞ、こよなき幸にこそ。

先は目出度かしこ。

東京　椎野秀子

かれてふくらかにおはし給ふとうけ給はり、今日かあすかとまち侍りつる折から、よべ平らかに、清らかなる玉のをの子設けさせ給ひしよし。いとも／＼めでたくなん。さだめし御二方は申すまでもなく、祖母君のけふの御心地やいかばかりなるらんと、おしはかられ申候て、わらはもいとうれしく悦しうてなん。こは其折にもとて調ひおき侍りつる産衣、いとそまつなるものには侍れど、一重まゐらす。心ばかりを納め給はらば、いかにうれしからん。とくさぶらひて、ほぎごときこえんと思ひ侍れど、なにかとそゝのかしくる人のたえねからに、取あへず御祝のしるしまでに、ことほぎまつるになん。

行く末のさかえやすらん若松の
枝にちとせのかげもこもれり

和泉　福原萱子

日頃いつかと、其御事のみ心ぐるしう待ち渡り侍りしところ、昨夜平らたに御分娩あらせられ玉ひし由、いと／＼めでたき御事になん。御兩方様には、きはめて御すこやかにまして、御子は殊に御男兒にさへ渡らせらるゝと聞けば、御初孫にます御老人様の御よろこびや、いかばかりなるらん。御館の中の御滿足やさこそと推し量りまつるも、實にうれしうなん。此酒二樽、御産着一重、心ばかりの品ながら、印までにおくりまゐらす、いづれ、御七夜すませらるゝ玉ふやうならせられし上、まゐのぼりて、よろづ御祝儀きこえ上べくなん。かしこ。

神奈川　森田はな子

かれて御にんしんあそばされ、種々の御こゝろづかひ大かたならずおはしましゝかひありて、うれしき今日の御しらせよ。御二人様とも御安らけくおはしますと承り、思はず、むれかきおろし侍り。さては、やさしき女子をうませ給ひしよし。定めし皆々様には、いたうめでられ給ふらん、御名はお松枝といはれ給ふよし、みなにちなみて、いく久しく榮え給ふらん。殊に御乳も、ゆたかにおはします由なれば、御母子ともの御幸福、この上なくと存上侍り。定めし御ふとやかにすく／＼とおひたち給ふべく、さては君の御敎訓親しく導かせ給ふ御ゆく末の御たのしさ、御うらや

ましく存上候。ちかゝらむには、すぐにも參りたけれど、せんかたなし。御快ふくの上、何卒寫眞御送り給はりたく、せちにねがひ上候。いと／＼つたなき言の葉なれど、御祝の印にこそ。

千代かけてみとりもふかき姫小松
たのむかけとそやかてなるらん

なほあとの御養生にふかく御心づけ遊されたく、まづは御祝ひまでかくなん。かしこ。

尾張　後藤信子

今朝しも御妹子様より承り侍りしに、花子様には先つ頃より御心地只ならず、御氣しき惡うおはしまし候やう、如何やらむと心もとなく、心ないため居候ひしに、いとも御目出たき御妊娠と、御母上様に承り侍りてより、一日も早く御安產の程指折りかぞへ御待ち申居り候處、昨夜は御安く／＼と玉のやうなる若子様、御誕生遊ばされ、御二方共御無事の由、いかばかりか御喜の程、言の葉だにつくされず、別て御兩親様には初孫様の御事故、御喜の程おしはかりまゐらせ候。早速御伺ひ申度候へども、折惡しく主人昨日より他出いたし、不在の事故歸り次第御喜にさん上いたし、あいらしき若子様の御すがた見まほしく、今よりたのしみ居り候。此の品粗末ながら、御產婦様召し上り候ても宜敷と承り居り候へば、御喜の印までに御目にかけ候。あまりのうれしさに、取あへず便りを以て御祝ひ申上候。よろづは御伺ひ候てとかくなん。かしこ。

横濱　石川ひろ子

初春とは申ながら、まだ雪氣のそらさむく、ことに雪ふるくにの此山里、いとゞしのぎかね、こたつにのみありてあたゝかきゆめむさぼる折しも、郵便の一聲にめをおどろかされ、とる手おそしとひらき見れば、あなうれしや、おもひもかけぬおとづれに、またもや降りくる白ゆきも、春風におそはれてさく花とおもはれて、春にあひぬる心地いたし候。祖母君の御文によれば、君にはこたびいと安らかに男の子を上げさせたまひしよし。うぐひすの初音にましてうれしうなん。まことけふ日は紀元節とて、たかきいやしきおしなべて、君がちとせを祝ふ日の、朝日の光とゝもにものせられ給ひしは、御運の程もかしこく千代のさかゆのたのもしく、祖母君には此和子君のさはやかなる笑をもて、いはぬながらも片いざりしたまふ程になり給ひたらんには、いかにめでたまはんか。人とならせたまひて、文讀み字習ひたまんには、いかによろこばれたまはんなど、家内の者共口々に申居り候。あはれ月日に關守なく君と手を引き袖をつられて、文の屋に通ひて折ふしは、花の月下に歌をはいじ、あるはさはたる月下にこし方を忍びしなどおもひいだせばむかしなりけり。君は早母君となんよばれたまふ身とならせたまひしに、妾はいまだ文の林にさまよひをるにつけ、御身のうらやましく存じ候。此千羽鶴、中に高砂そめいだしたる產衣、粗末には候へ共、御祝ひのしるしまでにまゐらせ候へば、御納め下され度候。とかく時候不順に候まゝ、和子君もろとも御身御大切に遊ばされべく候。まづはとりあへず御祝ひまで。かしこ。

長崎　日高かず子

此月ばかりと承り、かゝなべて其御事をのみまち侍りしが、よべ平かに御產のひもとかせ給ひ、めでたき男の子の君をさへあげさせられて、あとの惱もおはしまさぬ由、人の上ともおぼえずうれしうなむ、まいて御初孫得たまへる父母の君かつは背の君の御よろこび如何ばかりなるらん、いつくしみの露深き御園の竹の子すく／＼と生ひたちて、ふしうきよにあひ、やがて、月の桂も折るばかり家の風吹かせ給ふらんとかへす／＼めでたうこそ、此麻の

葉ぎぬは、御事あらばとまちかねて調へ置きつるものから、いと見苦しくは侍れど、御祝の心ばかりにまゐらするになむ。つきせぬ御よろこびは、よさりにうのぼり、御子抱きまゐらん折々聞にあぐべくなむ。かしこ。

東京　馬場さい子

青葉のかげなつかしう、しのぎよき頃と相成申候處承れば、御許様には昨夜いと安らかに御出産遊ばされ候よし、御目出度祝上候。殊に御なのこにておはしまし候よし、誠に御家の榮は、さては御兩親様のよろこびいかばかりかと推し參せ候。躬てより此度は御初産の御事とて、何となう心にかゝり案じられ候折からに候へば、心のどかに相成申候。すぐさま參上致し、御よろこびをも申上べきの處、相にく日曜にかけて、皆々大磯へまかり、人少なく候まゝ歸京致候はゞ伺ひ申べく候へ共、とりあへず文して御祝申上候。かしこ。

雜報

●御救恤　天皇　皇后兩陛下には去月下旬宮城縣加美郡中新田町火災の報を聞食し、いと憫然に思召され、昨日御救恤として、罹災者へ金五百圓下賜せらるゝ旨御沙汰ありたりと承りぬ。

●東宮妃殿下の御美徳　申すも畏き事ながら、東宮妃殿下には、來六月下旬御月滿たせ給ふ趣なれど、至つて御健勝に渉らせられ、毎日御運動かた〴〵御苑を御緩歩遊ばされつゝありとぞ。去る九日午後一時四十分頃のことなりとか、近衛歩兵第一聯隊第六中隊附某特務曹長は、近日除隊すべき補充兵を率ゐて、儀仗衛兵の服務方法見學の爲め、警邏線内を通過し赤阪離宮内なる丸山の方に進みし時、恰かも　妃殿下には二三の女官を從へさせられ、此處を通御あらせらるゝ折からなりしかば、特務曹長は令を傳へ、一同に最敬禮を行はしめ、禮終りて頓て歩調を整へ、再び進行を始めて蟲食門を通り西の入口へと出で、回り〳〵て蓮池の邊りに出でしに、此時又も　妃殿下には丸山

のあたりに御休憩遊ばされつゝある趣傳へ聞きたれば、特務曹長は再び洗心亭の前に整列せしめ、敬禮を行はんと御待受け居りしに、霎時して、彼方より仕人の急ぎ來るを瞥見せしかば、何事やらんかと伍長の一人をして其意を伺はしめしに、仕人は傳ふるやう　妃殿下には各方一同が姿勢正しく整列せるをみそなはせられ、其儀には及ばじとの御内旨を御女官に下し賜はり、女官よりは更らに小官に御内旨を傳へ給へり。去れば重ねて敬禮に及ぶまじとの事に、特務曹長をはじめ兵士一同は、殿下の慈深き御思召に感佩して、何れも感涙に咽びたりとぞ。

●周宮殿下の御誕辰　周宮房子内親王殿下には去る八日第十三回御誕辰の御祝賀を、高輪御殿にて擧げさせられ、午後三時田中宮相、花房次官、香川皇后宮大夫以下宮內省高等官の祝賀を受けさせられ、御酒饌を賜はりし由なるが、兩陛下及び東宮　同妃兩殿下より、午前御祝儀として、御下賜品ありたりと承りぬ。

●小松宮妃殿下の令旨　客月廿八日赤十字社病院に於て、第十八回準備看護婦生徒卒業式擧行の際、特志看護婦人會總裁小松宮頼子殿下の賜はりたる令旨は左の如しといふ。

令　旨

茲に第十八回準備看護婦生徒卒業證書授與の席に臨むは、頼子の深く喜ぶ所にして、諸子は多年螢雪苦學の功空しからずして、全科卒業の名譽を得たるは、洵に歡ばしき限りなり。倘名譽を享くると倶に、益勉めて斯道を講究し、他日事あるの日に方り、能く其本分を盡さんことを望むになん。

●老公の御玩具献上　九條老公には、皇孫迪宮

裕仁親王殿下第一回の御誕辰に、何か御賀物の御玩具をと、京都東福寺山莊靜養中より心懸けたりしが、同地富小路四條下る淸水勝藏を召し、同家に傳ふる御所人形數種に於て、寶船曳人形、逗子の二種を注文せられしが、去る五日獻上せられたりと。右は孰れも桐製にして、寶船は船體に菊唐艸の模樣ありて、七寶の車を付し、上には種々の寶を積み、帆は緋縮緬に松竹梅の縫模樣あり。帆柱及舳に玉を附し、之を右手に掲げ、左手を垂れ、右足を伸べ、左足を屈めて金の烏帽子を冠り、緋縮緬に松竹梅鶴龜の繼模樣あるどんすを着し、同じ腹當を爲したる兒童の曳き居るものにして、逗子は腹當を爲て、頭髮耳の邊まで垂れて、得もいはれぬ愛らしきものなりとぞ。

●・・・・・●

●辻文庫の設立　辻新次氏が敎育上偉大なる功蹟あることは、普く世人の知る處也。氏本年華甲に達せられしかば、左記の人々發起となり、去る頃其還曆祝賀會を開き、かつ其紀念として辻文庫を設けむ事を圖りしに、內外朝野の紳士淑女喜んで之に贊せられしといふ。實に聖代の美擧といふべし。今首唱者、要領、手續等を得たれば、左に掲ぐ。

辻文庫設立首唱者

井上守久	磯部武者五郎	市川雅飭
今井市三郎	林吾一	巫松三郎
逸見幸太郎	岡五郎	川村理助
吉村寅太郎	丹所啓行	根本正
中川謙二郎	村田亮輔	梅澤親行
上田萬年	野口保興	日下部三之介
黒田定治	久保田鼎	山崎彥八
松見文平	松山傳十郎	町田則文
前島密	後藤牧太	澤柳政太郎
肝付兼行	湯本武比古	三島通良
篠田利英	淸水直義	

還曆紀念辻文庫設立要項

一、還曆紀念辻文庫は帝國敎育會書籍館內に設くること

二、還曆紀念辻文庫設置賛成者より一人につき金壹圓づゝの寄附を請ふこと
　但し書籍にて寄附するものは其價額に制限を置かざること
三、寄附募集期限は明治三十五年十二月三十一日までとすること
四、寄附は帝國教育會內還曆紀念辻文庫設立事務所宛送附のこと
五、寄附は便宜其の最寄の還曆紀念辻文庫創立委員に託することを得
六、寄附者の氏名は帝國教育會發行『教育公報』に掲載し一々受領證を出さゞること
七、寄附金寄附書籍及び寄附者の氏名は還曆紀念辻文庫の記錄に登載し永く其の厚意を存することゝすること

還曆紀念辻文庫寄附手續

一、寄附金は現金又は爲替にて直ちに事務所宛送付せらるべき事
二、寄附書籍は先づ書名を記したる寄附申込狀を送付し事務所よりの請求を待ちて現品を送付せらるべき事
三、總べて送附に要する費用は寄附者に於て支辨せらるべき事
四、寄附者にして特に受領證を要せらるゝ向は郵券三錢を添へて其の旨申込まるべき事

●高等學術講義會　帝國教育會にては倫理學を專攻せらるゝ東京專門學校講師文學士藤井健次郎氏に囑託し『教育的倫理學』の講義を開會することゝなり、同講義は、五月十日(土曜)より始め、毎土曜日午後二時半より同四時半まで、二時間宛拾回にて完結すべく、聽講料は金一圓なりといふ。

●誌友懇話會　女子之友發行所なる東洋社にては、去る十一日正午より同社創立五週年の祝に兼ねて第二回誌友懇話會を神田明神境內なる開花樓に開きたり。來會者は男女來賓及び誌友を合せ、無慮三百人にも上りたらんか。席定りて同社の石川正作(開會の辭)日本女子大學校長成瀬仁藏(女子教育論)高等商業學校長寺田勇吉(女子體育に就て)淸水晴風(五月幟の說)諸氏の演說あり。餘興には太神樂、福引及び立食の饗應もありて最と盛會なりき。

●水戸市の女學校●●●●●●　同市に於ける女子教育も漸く進歩の幸運に向ひ、一昨年茨城高等女學校の設立せられし以來、生徒とし毎に増加し、現在二百七拾餘名の多きに達せりといふ。また太田梅子氏の校主たる茨城女子職業學校は、課程を本科、速成科、選科、溫習科の四科に分ち、修身、裁縫、家事、圖畫、唱歌、算術、國文等を教へ、目下四拾餘名の生徒を有し、挺秀女學校は、大高つる子氏校主として、重に裁縫を教へ、禮法家事國文等をも兼修せしめ、七十餘名の生徒を養成しつゝありと、この二校は、共に私立にて將來大に隆盛の望みありといへり。此外縫箔工女養成所ありて、盛に工女を募り、之を教授するの傍ら、精巧の產を出す事少なからずとぞ。

●菊地文相の女子教育意見●●●●●●　本月一日午後一時より文部省修文館に於て全國高等女學校長會議を開き、着席校長六十七名。菊池文部大臣臨場して、大要左の如き演說をなせりとぞ。

我國の女子は、多數の外國の女子とは其趣を異にし、結婚するを目的とするが故に、女子教育も大多數は、賢母良妻を得るの目的を以て施さゞるべからず。而も、今日に於ては、高尚なる專門的教育を授くるより、寧ろ高等普通に必要にして、且つ適切なる方法を採るべき也、即ち今日は、此の如き程度を以て限度となし、立派なる專門學校者を作るの必要なし。

日本の家庭は外國の家庭と異なりて結婚の後は多く其舅姑と同棲するの國風なれば、今日思想の過渡時代に於ては、動もすれば新舊思想の衝突を來し、家庭の不和を生ずるの實例尠しとせず、是を以て、我女子教育も、亦之に鑑み、品性の陶冶は勿論、智育の側に於ても、即ち彼の

倫理科修身書講義の課程以外の學科に於ても、特に新舊思想の衝突を避くるの考案を以て教授に努めざるべからず。

女子の性質は感情に強く特に感情の激發に際しては、常知常識を沒すると往々にしてあり。之を救ふの道は、理學思想の發達即ち理學的觀念を養ふべ　。例へば、近來中等以上の家庭に於いて、淫祠邪教の迷信非常に流行しつゝあるが如きも、亦た此の感情の奴隷と爲れるに外ならざる也。

今日の女子教育に就て、特に女子に望む所は、日常生活に必要なる觀念と趣味とを最初の目的とせざるべからず、高尚なる學問も必要なるべしと雖も、日常必要なる實用的の教育をなすこと、即ち女子に必要なる常識常知を與ふるを以て、主眼となさざるべからず。

右等の目的を達する方法としては、孰れの學校にても必要のことなるが、殊に學校と家庭との聯絡を計り、家庭の教育は學校の參考として其適切なる方法を講究するを要す。

●**寄宿舍構造の適否**　文部省に於て召集せる高等女學校長會議に諮問せる事項中、高等女學校寄宿舍の適當なる構造如何に關しては、議論百出したる趣なるが、結局地方の情況に依り、經費の許す範圍內に於て設備を爲すことに決したりと其理由は、今や各地方共、普通義務教育普及奬勵のため、授業料廢止又は、就學兒童增加等の結果地方經費の過半は教育費に充つるの現況にして、此の上寄宿舍をして完全なる構造を爲さしむるには、幾多の經費を要し、事情の許さゞるものあるを以て、止むを得ず完全なる設備を爲すこと能はざるに依るとぞ。

●最も奇特なる美談　宮城縣栗原郡金成村字新町に二階堂かつえ子と呼べる一女子ありけり。其祖母は孝道を以て名高く、維新の初め頃膽澤縣より賞狀に金圓を添へて賜はり、又父嘉平氏も村治に盡力せし廉を以て賞狀に金百圓を添へて贈られたることありき。他にも公事上及び慈善事業に勤勞せし結果として賞狀並に金圓銀盃等を贈られたることも數多ありしとぞ。かつえ子は即ち嘉平氏の一人娘にして、其母はとみ子と稱し、資性善良にて勤勉なる婦人なりしが、不幸にも十年ばかり以前より、リウマチスに侵され、手足全く用をなさずなりぬ。されば之れが爲めに、百方療法に手を盡しけるが、些の効顯もあらざりき。さるに孝女かつえ子は、心操極めて正しく、一家の經濟は凡て自身に引受け、他に接しても公事を除くの外は何事にても悉く辨じ盡し、殊に長き病人なる母上に對しては、如何にも親切に看護至らざる所なかりしかば、曾て駐在所巡査たりし村上氏は、此事を取調べて其筋へ報告し、又役場よりもすでに當局者に具申せしとかや。

●無名の寄附金　去三日芝區芝園橋際報効義會へ、無名の郵書を以て金五圓を寄附せし婦人あり其文意は、小兒が初節句の費用を節しての上とありしより、會長郡司大尉は、協議の上在千島同會會員の子女教育費の中へ計算したりといふ。徒に雛よ幟よと華奢をのみ競ふ世に、奇特の心懸にこそ。

●女子教育問題　山形縣女子師範學校長の津田氏は、左の問題を印刷物とし、諸方に配布して其解答を求むといふ。蓋しこの事たる有益にして趣味あることゝいふべし。

拝啓益々御清祥に被爲渡奉恭賀候却說左の問題に就き御高敎仰

き度奉存候處一々拜趨仕兼候儘印刷に附し御高覽に供し候間御多忙に被爲在候際願上兼候へ共御高見の大要左の各問題の次に御記入御返附を頂き候はゝ誠に忝なき仕合に奉存上候先は御願迄に草々頓首

明治三十五年五月

山形縣女子師範學校內
津田元德

殿
御執事

一、我國の女子に適當なる職業如何

一、從て女子の爲に方今急に設立せさるへからさる學校の種類如何

一、女子を教育するには女子教員を主とすへきか

(1) 小學校程度の教育に於ては如何

(2) 高等女學校程度の教育に於ては如何

(3) 女子師範學校程度の教育に於ては如何

一、我國の女子に女子高等師範學校の程度以上の教育を施すへき必要ありや

一、方今女子教育上の科目左の如し尙增減すへき教科目あらさるか

(1) 尋常小學校（修身、國語、算術、体操、土地の情況により裁縫を加ふることを得）

(2) 高等小學校（修身、國語、算術、日本歷史、地理、理科、圖畫、唱歌、体操、裁縫）

(3) 高等女學校（修身、國語、歷史、地理、數學、理科、圖畫、家事、裁縫、音樂、体操）

(4) 技藝專修科（修身、國語、數學、理科、圖畫、家事、裁縫、音樂、体操、技藝）

(5) 女子師範學校（修身、教育、國語、漢文、歷史、地理、數學、理科、家事、習字、圖畫、音樂、体操）

一、家庭に於ける女子の服裝は如何にせは可なるか且其注意如何

(1) 尋常小學年代に於ては如何

(2) 高等小學年代に於ては如何

(3) 高等女學校年代に於ては如何

一、女學生の服裝は如何にせは可なるか且其注意如何

(1) 尋常小學校生徒に於ては如何

(2) 高等小學校生徒に於ては如何

(3) 高等女學校生徒に於ては如何

(4) 女子師範學校生徒に於ては如何

●●●●●●●

●女學生の衣服　先頃文部省にて開かれたる中學校長會議へ臨席する爲め三年ぶりにて上京したる某校長の談話に、東京の女學生は漸々奢侈に趣くの傾向あり啻に其衣服の綺羅を飾るのみならで

其袖の如き一昨年に比して二寸餘の長さを加へ殆んど振袖の如きものを着用せる者多し、是等は啻に經濟上無用の費なるのみならず學校にて算術習字等を爲すにも不便なるべく殊に體操の時には妨害となること少からず、見馴れたる東京人は氣づかざる事なるべけれど久しぶりにて上京せし者の目には甚だ不愉快に感せらるゝなりと語れるよし注意すべき事にこそ。

外報

●和蘭女王の氣質　おらんだ女王タイルヘルミナは幼年の頃より意志強く飽迄之を貫ぬかされば止まざる決心を有せられたりと云ふ。或る時母なる攝政太后と共に、馬車にて村落を通過せられたる事ありしに、折柄小學校の退校時間にて多くの生徒は雪合戰を爲しゐたるが、中には女生徒に向ひて雪球を投ぐるものありたり。幼き女王は之を見て、直ちに馬車より飛び降り、之を制せられたるが、多くの男兒は女王の何人なりやを知らず、生意氣なりとて、女王に向ひ雪球を投附けたれば、女王は負けぬ氣になり、自ら雪球を造りて男兒に投附けんとせられたるが、侍者之を止めたるため女王の失望は一方ならざりしといへり。

●英米佛の婦人　英米佛三國の女子に就きて體格を檢査したる醫士の報ずる所に據れば、身長の最も高きは英國の女子にして、平均五呎三吋半、次は米國の女子にして半吋低く、佛國の女子は更に二吋低し。體量は米國の女子最も多く、平均十四貫百匁なりとぞ。

●有名なる英國の唱歌者　英國のアデリナ、パッチーと云ふ有名なる婦人は、一回の興行に數萬圓の報酬を受くる有名なるシンガーなるが、此婦

人の初めて舞臺に現はれたるは七歳の時にして、其頃は監督者が如何に叱責するも、必ず舞臺へ人形を携へ行きたり。又聽衆中に小兒を認むるときは、之を招き、舞臺にて遊戯を爲すことなどありしと。バッチーは千八百四十三年西班牙のマドリットに生れ、家庭以外に教育を受けたることなきも、曾て米國の新聞にハベラに關する論文を草したることありといふ。

●四千人の名親を有する人●●●●●●●　獨逸皇弟ハインリッヒ親王の妃は、四千人の名親を有せらる、如何にして斯くも多くの名親を有せらるゝかと云ふに親王妃の生れたるは千八百六十六年にして、恰も戰爭の終りを告げたる時なりしかば、其後ヘッセ公は、其子の記憶すべき時に生れたるを喜び命名の式に公の指揮せるヘッセ聯隊の將士を悉く參列せしめて名親たらしめ、其女にはイレネ（平和）といへる名を付けられたるなりと。

●一日に二時間の勞働説●●●●●●　人は成る可く少時間出來得る限りの力を以て、精神上及び體力上の仕事を爲し、成る可く長時間の休息を爲すべし、長時間倦みたる仕事を爲すよりも、仕事の成績に於ても健康の上に於ても優る所ありとの説は、近來歐米の醫學者間に盛んに唱道せらるゝ所なるが、米國の醫學者チェムバーレイン博士は、此説の實否を確めんがため種々の獸類、小兒、學者、勞働者囚徒、蠻人等に就きて實驗したるに、孰れも少時間の仕事を爲さしむる方、成績良好なりし由にて殊に小兒の如きは、學校の授業時間を半減したる方普通の授業時間のものより、學業の進歩に於ても體育の發達に於ても、著しく優る所あり。勞働者の如きは時間の短きものは長きものに比して、其生産力の優れること雲泥の差なりしと云ふ。博

士は曰く、勞働者の勞働時間を一日に二時間と定むることは、頗る經濟的なる說なると共に、精神上の勞働をも二時間と定むるを可とす。二時間出來得る限りの力を盡すときは、智力上實質上十分に得る所あるべし。實に此の如きは總ての物の向ひつゝある理想なり、將來の詩人は歌はん「長き歐士の一日より短き米の二時こそは優るなれ」と、實に米國は集中せる短時間の勞働に依りて必ず勝利を得るならん、否已に勝利を得つゝありといふべしといへるよし。

●勇ましき佛國の女子　昨年は軍功に依りて佛國政府より名譽の勳章を授けられたる人極めて少なかりしが、殊に珍らしきは、婦人は一人も勳章を授けられざりしことなり、佛國の婦人にして勳章を授けられたるものは、總て三十三人あり。其内二十人は、夫の功に依りて授けられたるものにして、自身の勇敢なる行爲に依りて授けられたるものは、殘りの十三人なり。多くは已に死亡し、今尙生存するものは、孰れも白髮の老嫗にして、安樂なる生涯を送るものなれども一時は修羅の巷の恐ろしき光景を目擊したる人々なり。最も名高きはマリー、ヴラヽーなり二三年前に死亡したるが、最初の從軍婦人にして、第百三十一聯隊にては、今尙婦人の名を尊敬す。其クリミア戰爭に從軍したるときは、僅かに二十二歲なりき。次で千八百七十年の戰にも從軍したり。ソアイル、グレゴアールと稱するも、同じくクリミアの勇婦なり。當時左手に負傷したれども、尙清國の戰爭に從軍せんことを志願し、天津にて死去したり。ジヤンバンネマールは佛國の軍隊に最も人望多かりし從軍婦人なり。此婦人は、殆んど恐れの念を有せざ

る如き大膽なる女なりき。若し此婦人の勇敢なる話を編むものあらば、一部の浩翰なる書を得べし。曾て密書を味方の軍に齎らす命を受けたるとき、普魯西の兵に捕へられて其密書を嚥下したることありとぞ。

●・・・・・人の寢る時の姿勢　人の寢るとき、最も健康に利ある姿勢は、體の右を下にし、手足を十分に伸ばすにあり。但し、手は决して頭より上に置く可からず。若しこれに反せんか、體内の血液頭部に集まりて、遂に不眠を起すに至るべし。又、口は必ず之を閉づべきものなりと云ふ。

●・・・・・幼兒の睡眠　幼兒は、決して大人と共に同一の寢所に臥せしむべからず、又病に罹りたる人と同一の室に臥せしむべからず。これ病に感染すること極めて速かなるが故也。而して幼兒に最も適當なる臥褥は、馬の毛にて造りたるものにして、すべて馬の毛は、最も無害なれば、何人の臥褥にも適すとぞ。

落葉籠

▲本居若水先生のしひがたりは、誠に面白く拜讀致しました、けれ共其中に詞からてづゝといふ事がありましたが、あれはどんな意味でせうか、又、ぶり〳〵といへる戯は、どうして遊ぶのでおりますか。初學の私にはわかりかねますから、御存じの御方は、何卒お敎へ下さい。(長崎某女投)

▲早速長崎のお方に御答しますが、「詞からてづつ」といふのは、詞からが如何にも不調法で、優美な點が無とか、或は、言ひまはし方が圓滑でないとか云ふ類を申します、元來てづゝといふ語は、銃の手筒から出たものだと云ふ說が有りますが、と

まれ、かくまれ、不器用、不調法と云ふ意味でおります。また「ぶりぶり」は古く京都附近で行はれた玩具の名で、其形は、度木槌の頭へ竪に柄をつけた樣で、其兩側に、輪形の木をはめ込でります、もて遊ぶ時には、此輪形の木を拔きとりて一方より投げ轉ばすのをかの槌の樣な物で打ちとめたものらしいのです。又ぶりぶりの柄に紐をつけた物を古圖にはまゝ見受けますから、振りまはして遊んだかも知れません。後には毬打と同じ樣に唯年始の贈り物となりて、遊ぶ仕方は絶えて仕舞ひました、委しくは京傳の骨董集、信節の嬉遊笑覽などに見えて居ります。ことに骨董集には、圖まで入れて詳しく考證してあります。(かゝり記者)

▲名取正代樣は、どんなお方でせうか。友達と打よつてはお噂致し御したひ申して居ります。どうぞ早く女鑑に御姿を御のせ下さいませ。(長崎某女)

▲先頃本鄕の切通しをとほりました時に、そこの牛屋から、蝦茶の袴を穿いた御方が連立つて出てきたには驚きました。而も微醉を帶びて…………
…(東京三浦あさ子)

▲お考への深い方々にお尋ね致します。私の家は女の子斗りでありますが、衣類は起居動作及び經濟上にも、筒袖の方が便利なりと考へ、一昨年來、皆縫直しましたが、衣服改良の聲世間一般に喧しき折から、此後は、從來の如き長袖の衣服は、不用になりませうか。(山城華島とく子)

▲裁縫の事に付き、記者足下に御願ひ致します。歌文御兼題の如く、裁縫も「巾何々、長付丈何寸を以て、何々の裁法」と云ふ樣に出して頂きたい。
…(大阪平野みち子)

▲下田歌子先生の書法のお手本は何と申が宜敷、何處にて發賣致しますか。また先生の御生れ年月

目を承り度存じます。また八田知紀翁の墳墓は何處に有之候哉御教へを願ひます。(京都榮子)

▲私が先日行路厳と云ふ題の和歌を詠じて出しましたら、歌がすつかり違てかいて御座いましたが、あれは直して下さつたのですか、如何で御座いませう。本欄にて御答を願ひます。(春子)

▲本誌の和歌の撰者は海上先生で、余程御親切に添删して下さいますが、あなたの御歌も、やはり御直しになつたで御座います。(かゝり記者)

▲妾は女子英學塾の本科へ入學致したいのですが入學試驗を受けなければ成りませんか。伺ひたう存じます。(東京禮子)

▲今度國光社から出版された修身一夕話と云ふ本は、日本は申に及ばず、支那や西洋のエライ人の逸事言行逸話が澤山に集めてありまして學校家庭共に教育上の參考書として、此上もない有益の書物であると思ひます。(讀書生)

▲私が、學校歸りに小石川のある寺を通りましたら、女學生が四五人よつて、大聲で學問上の議論をして居ましたよ。(東京よし子)

▲衣服の改良問題は昨今又々氣焰を高め來りし樣の傾向相見え候得共有名熱心な梶田半古畫伯は女子服裝の改良を主とし山根下田の諸先生は專ら女子服裝の改良を唱導致され候が若し改良の必要ありとせば何れを先にいたし候て可然か之等の研究を試みても隨分興味あることと信じ女鑑愛讀の諸媛に相談仕候。(ルーカラー)

▲津田梅子及び柴田靜榮子兩先生の御宿所(學校所在地)承知致度、御存じの御仁に伺上候。

(駒込、m子投)……

▲私は、此頃親類より「婦人之生活」と言ふ本を頂きましたが、元より無學ですから、處々わから

ないところが有つて困りますが、何かよい字引でもありますか。御存じのお方は、成丈早く落葉籠まで願ひます。　（信濃愛讀者投）

▲ヒユース孃の談話中で「額の緣を取るが如き職業」と言ふ事は、如何な譯でございますか。
（信濃愛讀者投）

▲額は「がく」で、西洋のがくは、多く絹紗などをその緣つけるので、丁度ハンカチのふちをくける類である。これを婦人が一の職業として居るものが多くあります。　（か〻り記者）

▲女は、一度嫁りしますれば、夫とちつとも心は合はなくつても、舅姑が可愛がつて下さる義理にからまれて、女の道を守つて快々その家に一生を送つた方が宜しうございませうか。又、早く離緣して、自分の思ふとほり修業し、やがて、出世しました時、その御恩を報ゆる方が宜しうございませうか。皆樣に御尋ね申上ます。（信濃某女投）

新刊紹介

やまびこ　第一號　定價十錢 郵税一錢　神田佐久間町四ノ一六　白鳩社發行、

島崎藤村を始め洒汀知十等の新進作家が顏を揃へて、美文に新體詩に其技能をあらはして居る。今日此種の雜誌の世に出たのは誠に喜ばしいと同時に、長く健全ならむ事を望むのである。

新東京　第一號　定價八錢 郵税五厘　本所横網町一ノ廿一　壬寅社

其名の示す通り、東京に於けるあらゆる事物を熱心に紹介し、新に現はれたる現象を捕へて論議し、また多少文學趣味をも有して居る。東京の樣子を知るには善い雜誌である。

女界　第一號　定價十錢 郵税一錢　神田駿河臺西紅梅町六　白鳳社

近來女學雜誌が追々殖えて來るが、これは其中で有數なものである。内容外形共にある一種の女學生には歡迎されるであらう。

婦人と家庭　定價二十五錢　寺内子誠著　神田表神保町十　甫風館發行

家庭問題に健穏な文章を以て、適當の解決を與へた好著述で、家庭の性質より東西古今の例證をひいて、互に比較研究の結果、最後に至つて家庭の平和は愛が中正なる標的と定めたのである、これを座右に備へたならば、益する所があるだらうと信ずる。

婦人と社交　定價二十五錢　今井完三著　東京神田美土代町三ノ一六　集成舘

すべて婦人の社交に關することは一切網羅して餘す處がない。其上に言文一致にかゝれたから、何人にも了解することが出來る。

口繪について

●矢島楫子刀自　刀自は天保六年熊本在代官の家に生る、幼時母の膝下にて養蠶紡績の手傳を爲し傍ら四書五經を授けらる、長じて後一度或家に嫁せられしも久しからず離別して家居せらるゝこと數年、明治五年上京し人の勸めに任せて小學校教員となる、當時我國の文運未だ盛ならず、舊慕の餘習を改めず、刀自頗る感ずる所ありて自分教育の事業を以て任じ大に畫策する所ありき、明治十二年小學教員を辭しぬ、抑女子教育の忽にす可らさるを思ひ或は大家高門を訪ひ或は我國に在る歐米知名の士に就き意見を叩き思想を述べて斯道に盡瘁す、明治十八年米人リビット我國に來遊し禁酒會を組織し大阪京都神戸岡山長崎に遊說す、刀自曾て我國人の飲酒に耽り健康を傷ひ遂に其害の子孫に遺傳するを慨嘆せられしかば、リビットと共に各地に至り矯風會を創始し會員を募りて飲酒喫烟の弊を矯めんとす、明治二十三年櫻井女學校、築地新榮女學校の二校合併して女子學院を組織するに及び刀自推されて之れが院長となり

て今日に至る、女子學院に在りて刀自の薫陶を受けて賢良貞淑の譽を得たる者の多きことは世人の洽く知る所なり、刀自幼より何れの門に入りて學びし事なく眞に獨學を以て身を立てられしとか、以て其精力の人に過ぎたるを見るべし。

●星つね子刀自　刀自は慶應三年一月土佐國高岡郡佐川村に生る。三歳の時高知市に出で、小學校卒業のうへ高知師範學校に入り、ついで同校を卒業して直に東京女子師範學校に入學せり。中途にして高等師範學校女子師範學科を修むる事となり、こゝに螢雪の苦をつむ事七年遂に全科を終り、やがて東京府高等女學校に奉職せられぬ。當時同校は創立の際にて、萬事整頓せざるのみか資金の缺乏甚しかりしかば、刀自はおのが俸給の四分の一を寄附しつゝ、教鞭を取り幾多の子女を養成せり。爾來職に在る事實に十三年、今日第一高等女學校の完備したるは、實に刀自の力與かつて多きに居る。されば本年四月東京府第三高等女學校に轉任せんとするや、職員生徒大に之を惜みあへりといふ、此間名家より子女の家庭教育を托せられ、或は、女子の集會、教育會、慈善會等に役員たることすくなからず。以て刀自がいかに女子教育界に重きを置かるゝかを知るべし。

●嘉悦孝子刀自　刀自は、明治二年一月熊本縣飽託郡本山に生る。熊本藩士嘉悦氏房氏の女なり。幼き頃其地の小學校を卒業し、十九歳の時上京して成立學舍に入り、中原、棚橋、坪內、土子、等諸名家の教授を受け、同廿三年卒業して同校に教鞭をとる事凡そ二年。傍ら三島博士の門に入て漢學をも修められき。明治廿五年舊藩主の分家宰士藩主學校を創立せらるゝに際し、切なる望み默し難く、其招聘に應じて職を奉ずる事五年、其後

歸京して、大日本婦人敎育會附屬女紅學校の監理となりぬ。かくて同校廢校の後、同卅二年成女學校の成立せらるゝや、翌年一月講師に聘せられ、家事科習字科等を分擔して精勵怠りなく、熱心、着實寄宿生を監督して、今日に及べりといふ。刀自常に我邦家庭の改良を以て任となし、普く諸大家を歴訪し、且自ら女學雜誌上に其意見を發表せし事少なからず。以てその抱負を窺ふに足りぬべし。

因に云ふ。本社刀自を諸媛に紹介するの切なる再三再四刀自に乞ひしも許されず茲に他より聞きたるまゝを記せり若し誤あらば其責記者に在り

●卒業生　東京府第一高等女學校本年卒業生及び撮影せる職員人名左の如し

議員、伊藤貞勝、濱口鹿次郎、山内昇、市川源三、本岡龍雄、木元平太郎、西田喜久松

卒業生、中岡貞、青木しげ、川久保美須々、三橋せん、鈴木不二千代、青木シゲ、安藝萬壽榮、加藤愛、河野マサ、桂確、横瀬なか、杉田とく、雨宮シウ、三善清香、松宮タヅ、小田桐くに、齋藤保子、内田文、中山信子、荒井ヨシ、廣江はな、小山みつ、近藤ふみ、神作はつ、都筑けい、伊藤若、岩屋佐晉、高木敏子、小林と代、二神たれ、長田正、入江しげ、渡邊治、野田照子、今非はる、栗原八重、横山千代樹、磯野きみ、陶山茂、岡田ふすま、中島まき、松島マサ、渡邊きみ　計四十三人

次號豫告

口繪

例に依りて女子敎育家の肖像及び卒業式風景等を掲載して、諸媛の瀏覽に供すべし

論說　下田歌子女史

女史が希世の英才を抱きて華族女學校の敎授兼學監として、女學界の泰斗たる事は、既に本誌に掲載せる處、こたび特に女子日常の心用ゐと題せる一篇を寄稿せらる。論議剴切、文章の妙、行雲流水の如し。

史傳　濱田文學士

君家の爲に毒婦を誅せし烈女の傳をものして痛快勇壯、其妙處に至つては、髮立ち肉慄かしむ。請ふ刮目して次號の出づるを俟て。

其他、矢島女子學院長の論說、福地理學士の續稿、宮地宮内省掌典の美文等、材料豐富。趣味津々。

福羽美静大人序文
下田義天類大人校定
指原乙子女史編纂

女子文章軌範

全一册
和装美本
定價金參拾錢
郵税金四錢

本書は上長徳の頃より下明治の初年に至る九百年間に輩出せし名媛紫式部、清少納言、相摸、阿佛尼、鵜殿よの子、弓屋しづ子、三島さや子、荷田蒼生子、西三條實條公後室、柏原氏の母、馬塲存義の母千代、梶女、千代能、その女、河内孫子等の傑作中に就き其の最も精を拔き粹を收めて消息、記事、紀行、哀傷、序䟦、教訓、論文の七門に分ち毎章末に其の作法を詳解し尚難句古事地名等には一々其の句意語法出所本源を注釋して、我國文の構造及雅趣を會得するの捷徑たらしむ加之善く本書を熟讀せば又以て本邦婦人獨得の長處たる脩身齊家の一助たらん是を以て學校用書に適するは論なく家庭の諸媛も亦各一本を得て座右に備へば必ず無比の好伴侶たらん

發行所
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
株式會社 國光社

新刊廣告

家庭 修身一夕話 教育

東京感化院長高瀬眞卿君著

高等教育會議議員湯本武比古君序

伯爵東久世通禧君題辭

學校教育の眞理を解說し家庭薰陶の要領を談論し和漢洋三千年間の英雄豪傑碩儒偉人の事蹟を引證したるものにして後進教育の任に當れる諸學校の教師職員諸氏は云ふに及ばず苟も子女を教育して國家將來の良臣民を造成せんとする家庭には必ず一本を備へざるべからざるの珍書なり紙數凡四百五十頁製本美麗にして趣味饒多なる挿畫あり而も定價は僅に金六拾錢郵便稅金八錢なり

發行兼發賣所

東京築地二丁目 株式會社 國光社出版部 (電話新橋二六九三)

東京本鄉一丁目五 發賣所 國光書房 (電話本局三一四五)

生田目經德編

標註
雅文消息集

菊判 美本 全一冊

定價金廿五錢 郵稅金四錢

郵券代用一割

日用消息文の摸範は中古文にとらざれば雅馴なる言詞艶麗なる文章を綴りかたし慶長以來文學の大家古文の學を興してより契仲、眞淵、宣長、千蔭、翁麿、濱臣、春海など名家相繼ぎて斯の學を盛ならしめ國文の書世に出づるもの甚多く消息文の如きもその躰大にとゝのひ雅馴にして艶麗なる好摸範も多くあらはれたりしが其の後また多く世に行はれずなりぬ近來國文の再盛なるに方りて之を學び日用の消息に適用するはまことに必要のことなりこの篇專心を用ゐて古人の消息中より高尚にして雅馴なるものを採り四季雜の各部に分ち參考者の便よからんことをはかれり國文を修むるもの一本を坐側におきて摸範となさば益を得ること必大なるべし。

發行所 東京築地二丁目 株式會社 國光社出版部

!!!近刊豫告!!!

經濟的文學的

白耳義リージ大學敎授 ラヴレー氏原著
文學士 寺田淳二郎君譯

奢侈亡國論

經國的大文字

現今の世、人心靡然として奢侈に流れ、競ふて外觀の華を衒ひ、皮相の美を粧ひ、豪奢淫佚自ら得たりと爲すもの滔々世を擧げて、比々みな是なり、彼の歐米交際社會といふ者の如き綾羅の錦衣に非されば、乃ち共に臂を交へざる也、粱肉の美味に非されば、乃ち共に卓を圍まざる也。是を以て一夕の燕遊に數千萬金を費消して、傲然誇耀唯だ其額の少なからんことを是れ恐る、豈啻に朝歌夜絃の秦宮、酒池肉林の夏殿のみならんや、而て曰く是れ文明也、進歩也と、噫斯の如くにして已ますんば、其の究極底止する所、遂に羅馬衰亡史中の事實を再演せずんば非ざるべし、著者白國リージ大學敎授ラヴレー氏玆に見るあり、一書を著して、奢侈の定義、動念、不正を論じ、其の道德及び進歩の原因に非ざるを説破して、一代の頽爛を將倒に挽回せんと試みたり、本書は則ち是れ也、議論元と經濟上より觀察を下せりと雖も、而も一般經濟書の無味乾燥、砂を嚙み、臘を舐ぶるが如きに類せず、其のボウトリー、ミルを引き、ロッセルサビヤアを論じて現代社會の華侈驕奢を冷評罵倒するや、骨を刺し、膓を抉り、氣焔萬丈當るべからざるの概ありて、世の流行紳士をして狐奔鼠竄殆ど顏色なからしむ、譯者亦流麗の筆を以て親切鄭寧に原文を譯述したれば、繙讀の間趣味津々自ら禁ずべからざるものあり、吾國民由來勤儉の美風に富む、幸ひに本書を熟讀せば、奢侈の甚だ恐るべく、勤儉の益々尙ぶべきを知りて、謂ゆる文質彬々の美果を占むるを得ん、刊行近きにあり、乞ふ購讀の榮を賜へ、

京橋區築地二丁目廿一番地 **國光社出版部** 電話新橋二六三九番

毎月一回五日發行

婦人と子ども

一冊定價十錢
六冊前金五十七錢
十二冊前金一圓十錢
外に郵税一冊につき金一錢

汗牛充棟啻ならざる女學雜誌中に於て、本誌は實に家庭教育の指針として、女子教育の燈明として、唯一の雜誌あり。家庭の主婦たる母は必らず、讀まざるべからず、女子教育者たるものは、必らず讀まざるべからず、而して一般女子たる人に向つては、是非とも机上の友として之を勸めざるべからず。本誌は實に嚴正着實なる主義に基つきて、當今の女界に貢獻せんとするものなり、精撰せる記事、愈出で丶愈豐富、特に有趣有益の童話は本誌獨特の文字なり。

第二卷第五號 五月五日發行要目

○(子ども)樂隊の大勝利、母の誕生日、忠義な犬の話、紙の折り方、考へもの、笑ひ草○(家庭)家庭の要素(小島松之助)小兒に向つての小言(ひさ子)傳染病(長瀨醫學士)料理法(石非泰二郎)裁縫(岡本ちか)小さき日記印東おとな○(學術)鐵道の話(蘭亭)夢の話(東基吉)○(史傳)津崎矩子(下村三四吉)○(文苑)新體詩、唱歌、和歌)○(說林)動物愛憐と敎育(本多增次郎)○(寄書)數篇○(雜錄)端午の話、結婚論、寡婦と愛子、衞生の注意○(彙報)緊要事項數十件

發行所　東京女子高等師範學校附屬幼稚園　フレーベル會

發賣所　東京日本橋區本石町三丁目廿三番地　金昌堂

山崎忠和君著

日露の英雄

新刊廣告

露國の彼得大帝と我朝の德川齊昭島津齊彬とは其識見事業の世界的なる處同一なり其帝たり侯たり事功の成否の如きは別問題とすべし今此の三大英雄の性行經歷に就て細かに觀察すれば識慮の深遠なる意氣の雄偉なる機略の豁大なる未だ嘗て其の間に甚しき軒輊あるを見ず但其成功と否とは境遇に順逆ありしのみ之を以て三大英雄を輕重するが如きは眞に皮相の見なりと言ふもの是れ本書の著者が立論の骨子なり著者燃犀の史眼を以て東西幾百卷の史傳を看破し以て此の書を爲す三大英雄の音容動作眼前に現れ出でゝ宛も活動寫眞を見るが如し愈四月廿日を以て發刊す大方有爲の諸君一讀して萬古の心胸を開拓し一世の智勇を推倒するの志氣を養成せられんことを望む

●洋裝四六版　三大英雄寫眞銅版挿入　定價郵稅共金貳拾貳錢

發兌元　東京京橋區築地貳丁目（電話新橋二六九三）　國光社出版部

●近刊豫告●

現今諸名家撰述　國光社出版部編纂

女子必讀

新編ひめかゞみ　全

近世女子敎育の年に月に盛んなるに隨ひ、學は和漢洋を兼ね、才は天地人に通ずとも評すべき閨媛の彬々として世に現はるゝは誠に喜ぶべき事ながら、專ら智育を宗として、重きを德育に置かざる餘弊にや、さばかりの才媛にても其操行如何と顧る時は案外眼に一丁字なき鄙の賤の女にも及ばぬ者多く、其甚しきに至りてはふりがな新聞の三面に、父母良人の名迄汚す者さへ少なからず、斯くては古今東西の書を讀み盡せしとて何かせむ、誠に嘆はしき限りなり、本社茲に慨する事久し、仍て當今諸名家の文章中より近世列女の傳記を抄出し、之を賢良、忠義、孝行、節操、才學の五綱に分ちて編纂刊行することゝなせり、抑方今文明日進の際時勢に伴ふて女子の本分を盡さんと欲せば、操行學藝兩全ならざるべからず　學藝は花にして操行は實なり、花あり實ありてこそ始めて完全の女子と謂ふことを得べし、世上の才媛淑女諸君本書を熟讀玩味して花實を一身に兼ね備へ玉はんことを祈る。傳文撰述の作家中重なる人々の姓名を左に錄す

細川潤次郎　大町桂月　三輪田眞佐子　鹽井雨江　久米幹文　山川清案　井上賴文　驪井ふく子
青山延壽　安藤紫光　栗田寛　山本正周　磯野德文　大槻文彦　濱田廉　指原乙子　以下數十家

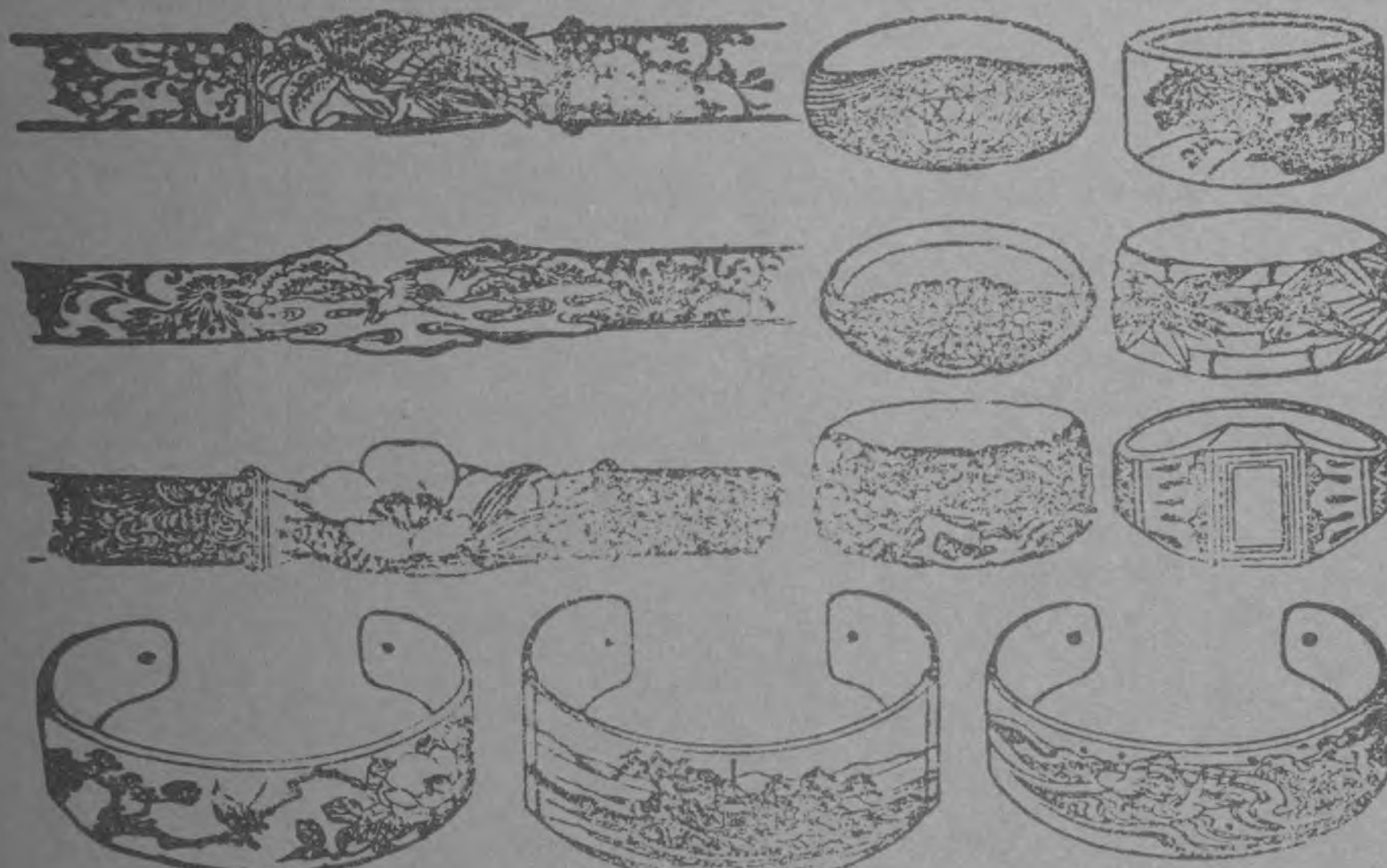
發行所

東京市京橋區築地二丁目

國光社出版部

女鑑
明治廿五年三月十二日 第三種郵便物認可　每月二回五日廿日發行 第貳百五拾參號　明治三十五年 五月廿日發行

吉沼製作品



金製指環

● 十八金二匁五分付片切彫刻付
甲價 十六圓
乙價 十四圓

● 廿金三匁付平象嵌片切彫刻付
甲價 廿二圓
乙價 十九圓

● 廿金三匁付浮肉彫刻付
甲價 廿六圓
乙價 廿三圓

● 廿二金三匁五分浮肉象嵌彫刻
甲價 卅四圓
乙價 廿九圓

● 廿二金三匁五分厚肉彫刻
甲價 卅六圓
乙價 卅一圓

● 廿二金三匁五分厚肉象嵌彫刻
甲價 卅八圓
乙價 卅三圓

● 廿二金三匁五分肉彫象嵌 ダイヤモンド入
甲價 二百五十圓
乙價 百八十圓
丙價 百三十圓
丁價 九十圓
戊價 六十五圓
巳價 五十圓

● 廿金三匁付小判形角形無地印
同指環 十五圓七十錢

● 廿二金四匁付小判形角形無地
印面指環 廿二圓四十錢

● 純金五匁付小判形角形無地印

同指環 廿九圓五十錢
外ニ段付模樣付形狀ノ難易ニ依リ價格ニ差アリ

金製帶止

● 十八金製高彫模樣[illegible]付
甲價 卅五圓
乙價 三十一圓
丙價 廿七圓
丁價 廿三圓
戊價 十九圓
巳價 十六圓

金製根掛

● 十八金一匁五分付片切彫刻
甲價 十一圓
乙價 九圓三十錢

● 廿金二匁付片切彫刻
甲價 十四圓五十錢
乙價 十二圓五十錢

● 廿二金二匁五分片切彫刻
甲價 十九
乙價 十七圓

● 十八金三匁付蝶番付三ッ折片切彫刻
甲價 廿圓
乙價 十七圓五十錢

● 廿金三匁付蝶番付三ッ折平象嵌片彫刻付
甲價 廿三圓
乙價 廿圓

◎印材製作篆刻

應貴需

右の外金量の多少寶石の大小又は彫刻の繁簡精粗により代價に高低の區々あり

時計及寶玉類貴金屬美術品商

東京市日本橋區通り二丁目
吉沼又右衛門
電話本局三十三番
長距離電話接續

東京市京橋區[illegible]丁目株式會社國光社印刷部印刷